

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第32集

は た い げ だに い せき
八田 神 母 谷 遺 跡

— 四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1998. 3

(財) 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

は た い げ だ に い せ き
八 田 神 母 谷 遺 跡

— 四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1998. 3

(財) 高知県文化財団
埋蔵文化財センター



八田神母谷遺跡遠景



小型丸底壺



初期須恵器

序

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査では貴重な発見が相次ぎ、土佐の古代史を明らかにするうえでも大きな成果を得ています。八田神母谷遺跡においても同様に貴重な成果を得ることができました。本遺跡の調査では縄文時代後期から近世にかけての遺跡であることが判明し、高知県最古の須恵器の出土など本県の注目される資料が多数出土しました。また、遺存しにくい木製品が多く出土したことも今回の調査成果の一つであります。これにより、より一層鮮明に歴史を復原できることと思います。

発掘資料は高知県の歴史を解明するうえで掛け替えのない文化遺産として、後世に伝えなければなりません。本書により埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり、御援助・御協力をいただいた関係者の皆様及び地元の方々に厚く御礼申し上げます。

1998年3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 古谷 碩志

例 言

1. 本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成7年度・8年度に実施した四国横断自動車道建設に伴う八田神母谷遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 八田神母谷遺跡は吾川郡伊野町八田に所在する。

3. 発掘調査は平成7年12月15日から平成9年2月28日まで実施した。

4. 調査面積 3,023m²

第Ⅰ調査区 761m² 第Ⅱ区 796m²

第Ⅲ調査区 280m² 第Ⅳ区 1,186m²

5. 調査体制

(1) 調査員

山本哲也 (高知県文化財団埋蔵文化財センター 第1班班長)

小嶋博満 (同 主任調査員)

山本雄介 (同 主任調査員)

坂本憲昭 (同 調査員)

下村 裕 (同 調査員)

久家隆芳 (同 調査員)

(2) 各調査区主担当

主に、第Ⅰ調査区・第Ⅱ調査区を小嶋が、第Ⅲ調査区・第Ⅳ調査区を久家が担当した。

(3) 総務担当

吉岡利一 (高知県文化財団埋蔵文化財センター 主幹)

本書の執筆・遺物写真撮影・編集は久家が行った。調査・測量については松田重治氏 (高知県文化財団埋蔵文化財センター) の協力を得た。

6. 出土遺物の木器については保存処理と樹種鑑定を(財)元興寺文化財研究所に委託した。

7. 須恵器については、植野浩三氏 (奈良大学文学部助手)・田中清美氏 ((財)大阪市文化財協会) に御教示を頂き、須恵器の胎土分析については三辻利一氏 (奈良教育大学) の手を煩わせ、玉稿を頂いた。また、本報告書作成にあたっては出原恵三氏・吉成承三氏はじめ(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸学兄から貴重な助言・教示を得た。記して深く感謝の意を表したい。

8. 発掘現場作業員は下記の方々である。猛暑・酷寒を厭わず作業に従事して下さった皆様に対し、記して感謝の意を表したい。

関 真一 中平正一 今村重臣 末政則幸 末政淑子 産田康子 岡林千代亀

滝沢昭子 山下末尾 前川喜美子 大賀幸子 坂本弘美 布村利恵 山下順子

光内 幸 山本千恵 弘田 満 近藤朋美 西村照子 西村麻里 平山理恵

垣本弘誠 垣本一年 谷岡葉子 山中益代 安岡 緑 宮本志真子 松澤大司

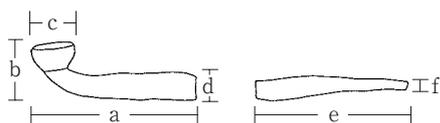
刈谷絹枝 田中保孝 深瀬三賀 多田晃三 徳平真也 和田邦裕 布村隼人
 矢野信明 岡田稔夫 梶原敦史 土居敏江 武政素乃 津野朝治 本山禎朗
 尾崎利通 尾崎 幸 太田耕治 田中琢也 豊田 剛 林 貴之 中村直弘
 尾崎定富 尾崎定子 尾崎富子 中越 禅 渡辺薫 横川香代 竹内聡美
 中岡美樹 竹山竜太 影山美香 楠瀬美智子 三本菊子 松本幸世 藤戸裕次
 杉本直助 山崎吉子

9. 遺物整理・報告書作成は下記の方々である。作業に従事して下さった皆様に対し、記して感謝の意を表したい。

大原喜子 小野山美香 門田美知子 川久保香 楠瀬憲子 黒岩佳子
 小松経子 榊 琴美 澤本友子 高橋千代 高橋由香 田村美鈴 中西純子
 西内宏美 橋田美紀 浜田雅代 東村知子 松木富子 松山真澄 宮地佐枝
 宮本幸子 森 綾子 矢野 雅 山本裕美子 山本由里

10. 出土遺物は（財）高知県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例



遺物計測部位

本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法	4
第Ⅲ章 調査成果	5
1. 第Ⅰ調査区	5
(1) 調査区の概要と基本層準	5
(2) 検出遺構と出土遺物	5
第1遺構面（弥生時代後期終末～古墳時代前期）	5
第2遺構面（弥生時代中期中葉～後半）	11
第3遺構面（縄文時代晩期）	11
第4遺構面	11
(3) 包含層出土遺物	11
2. 第Ⅱ調査区	17
(1) 調査区の概要	17
(2) 包含層出土遺物	17
3. 第Ⅲ調査区	24
(1) 調査区の概要と基本層準	24
(2) 包含層出土遺物	27
4. 第Ⅳ調査区	33
(1) 調査区の概要と基本層準	36
(2) 検出遺構	36
(3) 包含層出土遺物	38
第Ⅳ章 考察	45
付編 自然科学的考察	53

挿図目次

- Fig. 1 八田神母谷遺跡位置図
- Fig. 2 八田神母谷遺跡周辺の遺跡分布図
- Fig. 3 調査区位置図
- Fig. 4 第Ⅰ調査区 基本層準
- Fig. 5 第Ⅰ調査区 第1遺構面平面図
- Fig. 6 第Ⅰ調査区 SR1断面図
- Fig. 7 第Ⅰ調査区 SR1・包含層出土遺物
- Fig. 8 第Ⅰ調査区 SR1出土遺物
- Fig. 9 第Ⅰ調査区 SR1出土遺物
- Fig.10 第Ⅰ調査区 第2遺構面平面図
- Fig.11 第Ⅰ調査区 SR群断面図
- Fig.12 第Ⅰ調査区 SR2出土遺物
- Fig.13 第Ⅰ調査区 集石遺構1・2平面図・断面図・出土遺物
- Fig.14 第Ⅰ調査区 第3遺構面平面図
- Fig.15 第Ⅰ調査区 P1断面図
- Fig.16 第Ⅰ調査区 SR4断面図・出土遺物
- Fig.17 第Ⅰ調査区 包含層出土遺物
- Fig.18 第Ⅰ調査区 包含層出土遺物
- Fig.19 第Ⅱ調査区 土器集中部平面図
- Fig.20 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.21 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.22 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.23 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.24 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.25 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.26 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物
- Fig.27 第Ⅲ調査区 基本層準
- Fig.28 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.29 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.30 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.31 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.32 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.33 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.34 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物
- Fig.35 第Ⅳ調査区 平面図
- Fig.36 第Ⅳ調査区 基本層準
- Fig.37 第Ⅳ調査区 SR7断面図
- Fig.38 第Ⅳ調査区 SR7出土遺物
- Fig.39 第Ⅳ調査区 SR8断面図
- Fig.40 第Ⅳ調査区 SR9エレベーション図
- Fig.41 第Ⅳ調査区 SK1平面図・断面図
- Fig.42 第Ⅳ調査区 SR8・9出土遺物
- Fig.43 第Ⅳ調査区 包含層出土遺物
- Fig.44 第Ⅳ調査区 落ち込み1・包含層出土遺物
- Fig.45 第Ⅳ調査区 包含層出土遺物
- Fig.46 搬入土器出土遺跡
- Fig.47 畿内系土器実測図
- Fig.48 東阿波型土器実測図
- Fig.49 吉備型土器・下川津B類土器実測図

写真図版

- PL.1 第Ⅰ調査区北壁・SR1完掘状況
- PL.2 第Ⅰ調査区SR1遺物出土状況
第2遺構面完掘状況
- PL.3 第Ⅰ調査区集石遺構検出状況・SR4完掘
状況
- PL.4 第Ⅰ調査区SR5完掘状況・第Ⅱ調査区遺
物出土状況
- PL.5 第Ⅱ調査区遺物出土状況
- PL.6 第Ⅱ調査区遺物出土状況
- PL.7 第Ⅱ調査区遺物出土状況
- PL.8 第Ⅲ調査区調査前全景・遺物出土状況
- PL.9 第Ⅲ調査区遺物出土状況
- PL.10 第Ⅲ調査区遺物出土状況
- PL.11 第Ⅲ調査区遺物出土状況
- PL.12 第Ⅳ調査区中央南北セクション・SR7遺
物出土状況
- PL.13 第Ⅳ調査区SR8遺物出土状況
- PL.14 第Ⅳ調査区西半部SR7完掘状況・SK1断
面
- PL.15 第Ⅳ調査区SK1完掘状況・東半部SR7完
掘状況
- PL.16 第Ⅳ調査区落込み1遺物出土状況
- PL.17 SR1出土遺物
- PL.18 SR1・包含層出土遺物
- PL.19 SR1・4・包含層出土遺物
- PL.20 包含層出土遺物
- PL.21 包含層出土遺物
- PL.22 包含層出土遺物
- PL.23 包含層・落込み1出土遺物
- PL.24 落込み1・包含層・SR1出土遺物
- PL.25 包含層出土遺物
- PL.26 包含層SR8・落込み1出土遺物
- PL.27 SR1・包含層出土遺物
- PL.28 包含層出土遺物
- PL.29 包含層出土遺物
- PL.30 包含層出土遺物
- PL.31 包含層出土遺物
- PL.32 包含層・SR7出土遺物
- PL.33 SR7・8出土遺物
- PL.34 包含層・落込み1出土遺物
- PL.35 SR1・包含層出土遺物
- PL.36 SR2・集石遺構1・包含層出土遺物
- PL.37 SR2・包含層出土遺物
- PL.38 SR1・2・包含層出土遺物

第 I 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境 (Fig.1)

八田神母谷遺跡の所在する吾川郡伊野町は高知県のほぼ中央部に位置する。南北約14.5km、東西約3.5km、面積約100km²である。高知県の中心地である高知市からは約10kmしか離れておらず、このことは伊野町にとって経済的にも文化的にも非常に重要である。

伊野町は北部高地と南部低地とに二分することができる。北部高地は標高400~900mの山岳地を形成する。南部低地は標高20~200mの低地・台地・丘陵地で構成される。また、愛媛県石鎚山に発源する仁淀川は伊野町の西端沿いを南流する。

八田神母谷遺跡は仁淀川の支流、奥田川と吉良ヶ峯西麓に挟まれた谷部に立地する。

(2) 歴史的環境 (Fig.2)

伊野町で現在までに確認されている最古の遺物は、縄文時代中期にまで遡る。奥名遺跡から船元ⅢA式土器が出土している。晩期では大デキ・八田トチ谷で該期の遺物が出土している。弥生時代前期（西見当Ⅰ式期）には秋山山根遺跡（春野町）が出現する。西分増井遺跡では松菊里型住居1棟を含む前期の竪穴住居等が検出されている。弥生時代中期中葉の遺物は大デキ・サジキで出土している。中期後半になると各地に高地性集落が見られる。バーガ森北斜面遺跡もその一つであり、発掘調査の結果、標高50~80mの地点から3棟の半平地半竪穴住居が検出されている。周辺には用石甫木山遺跡（土佐市）・朝倉城山遺跡（高知市）・荒倉峠南斜面遺跡（春野町）の高地性集落がある。後期になると、寺門遺跡・天神溝田遺跡がある。天神溝田遺跡では炉跡が3箇所確認されている。また、銅剣・銅戈がそれぞれ1本ずつ出土している。天神溝田遺跡以外でも周辺から青銅製品が発見されている。



Fig.1 八田神母谷遺跡位置図

岩滝ノ鼻遺跡から細型 I 式a類の銅剣が発見され、西畑フケ遺跡（春野町）・波介万法寺遺跡（土佐市）では銅矛が発見されている。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての拠点集落である西分増井遺跡が成立する。森岡遺跡・高岡中学校校庭遺跡（土佐市）からも前期の遺物が出土している。古墳時代中期には八田岩瀧ノ鼻遺跡から袋状鉄斧が出土した。古墳時代後期になると散在的にはあるが古墳が築造される。枝川古墳群・八田古墳（伊野町）・ここ谷古墳群・塚地サルバミ古墳（土佐市）・弘岡上古墳（春野町）がある。枝川古墳群は3基の円墳で構成される6世紀末から7世紀初めの古墳群である。発掘調査の結果、1号墳からは銀環・ガラス製の勾玉が出土した。3号墳には追葬がみとめられた。八田の地にも八田古墳（現在は消滅）が築かれる。

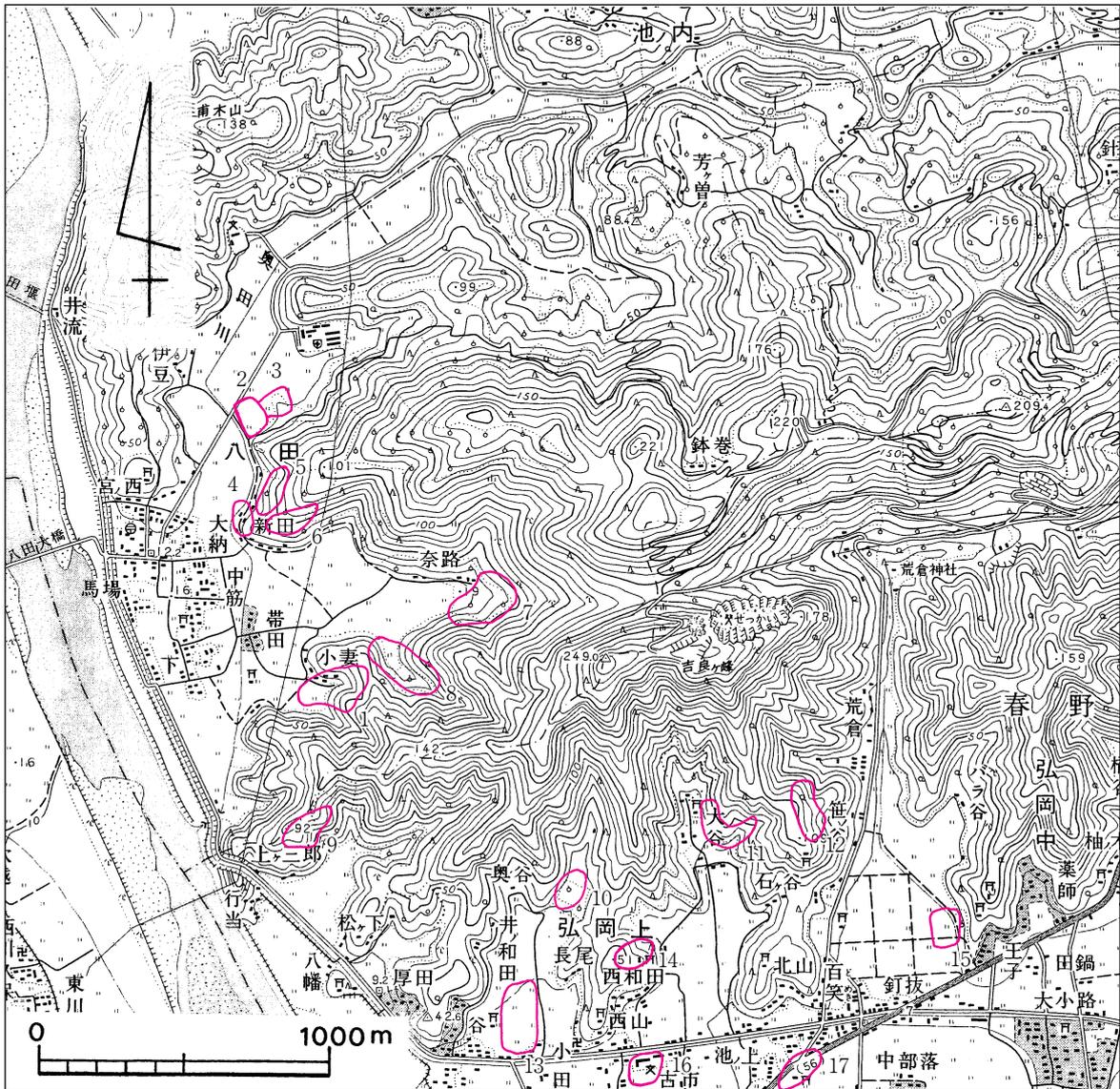
律令制下において伊野町の大部分は吾川郡大野郷に編成される。吾川郡は仁淀川の兩岸をふくむ大野郷・桑原郷・仲村郷・次田郷・高岡郷・海部郷・吾川郷・三井郷の8郷である。『続日本書紀』によれば承和8年(841)に仁淀川右岸の後者4郷を高岡郡として分けている。枝川・池内は土佐郡朝倉郷に属したと考えられている。また、八田は吾川郡桑原郷に入れる説もある。大野郷は天平勝宝7年(755)に東大寺の封戸となる。神谷地区には郡内唯一の式内社である天岩戸別安国玉主神社（あめのいわとわけやすくにたまぬしじんじゃ）がある。

中世になると、吾川郡は京都六条若宮八幡の別当職付属の所領として与えられたことが『吾妻鏡』に記されている。その後、この地が南北朝の動乱・戦国時代とは無関係ではなかったことを示す神谷城・八田城等が今も残る。「長宗我部地檢帳」によると八田村では屋敷数は103を数え、小村として近俊村・小妻村・西内村・新畠村・王子村・若宮村・大野村・西窪村・下安正村・窪田村・ヲビ田村・岸上村・門田村・土居村・イツノ村がみえる。

近世では、野中兼山により、新田開発を目的に八田堰と弘岡井筋、鎌田堰と高岡井筋が構築される。また、『土佐州郡志』によると、八田には本村・平次谷・末田谷・神母谷・新田・奈呂・茅谷に集落がみられ、神母谷の戸数は5戸と記す。

参考・引用文献

- 岡本健児・横川末吉他『伊野町史』1973年
- 岡本健児・山本 大他『土佐市史』1978年
- 『高知県の地名』日本歴史地名大系40巻 平凡社 1983年
- 岡本健児他『枝川古墳群』伊野町教育委員会 1985年
- 『高知県』角川日本地名大辞典39 角川書店 1986年



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	八田神谷遺跡	縄文～近世	10	奥谷遺跡	弥生
2	岩瀧ノ鼻遺跡B	古墳	11	吉良屋敷跡	弥生
3	岩瀧ノ鼻遺跡A	弥生	12	吉良城跡	弥生
4	新田遺跡	古墳	13	巖島遺跡	古代～中世
5	観音ノ鼻遺跡	古墳	14	八幡宮西ノ城跡	中世
6	観音ノ鼻遺跡	古墳	15	後田遺跡	弥生～中世
7	八田奈呂遺跡	弥生～近世	16	古市遺跡	中世
8	八田栃谷遺跡	弥生～古墳	17	西ノ芝遺跡	弥生
9	八田城跡	中世			

Fig.2 八田神谷遺跡周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法

1. 調査に至る経過 (Fig.3)

四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設工事に伴い、事前に高知県教育委員会事務局文化振興課（現、文化財保護室）と日本道路公団高松建設局（現、四国支社）高知工事事務所との間で、工事範囲内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議・調整が行われ、伊野町・土佐市・須崎市において試掘調査を実施することとなった。

平成7年4月1日付で、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターと日本道路公団高松建設局との間で、「平成7年度四国横断自動車道（南国～伊野間及び伊野～須崎間）」埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結される。

伊野町八田地区は調査の都合上、1から4区として平成7年8月21日から試掘調査を実施した。調査の結果、八田1区は八田奈呂遺跡、八田2区は八田栃谷遺跡、八田3区は八田神母谷遺跡として本格的発掘調査を実施することとなった。

八田神母谷遺跡は平成7年12月15日から本格的発掘調査を実施した。

2. 調査の方法

八田神母谷遺跡は調査の都合上、第Ⅰ～Ⅳ調査区を設定し調査を実施した。各調査区とも表土は重機を用いて除去した後、遺物包含層の掘削、遺構の検出・掘削は人力により精査に努めた。検出遺構・遺物の出土状況及び土層断面は適宜、写真撮影を行った後、公共座標を基に平面図・断面図を作成した。

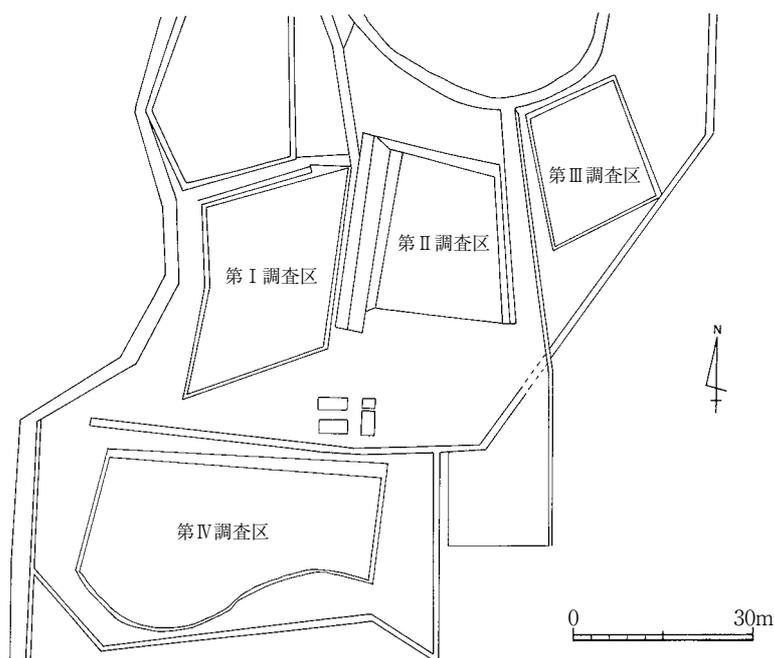


Fig.3 調査区位置図

第Ⅲ章 調査成果

1. 第Ⅰ調査区

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig.4)

当調査区では弥生時代後期末～古墳時代前期・弥生時代中期中葉～後半・縄文時代晩期の遺構面を検出した。

また、基本層準は調査区北西部で観察を行った。

(2) 検出遺構

①第1遺構面 (Fig.5～9)

SR1は、調査区北東部において検出した自然流路である。弥生時代中期の包含層を削り込む。幅約2.8m、深さ0.4mの規模であり、約31mにわたり検出した。北方向へは調査区外へのびる。一方、東方向へは第Ⅱ区の湿地へと続く。後述するが、当該期、第Ⅱ区・第Ⅲ区は湿地状を呈していたと考えられる。断面形は逆台形を呈する。基底面は東から西方向へやや下がる。

出土遺物は、鉢・高杯・甕・叩き石・石包丁がある。在地産の甕の一部には内面ヘラ削りが認められ、底部は丸底を指向し、体部は球形を指向するなど新しい要素が認められる。8は、畿内産の甕である。体部の破片も数点出土しており、同一個体と考えられる。26の縄文時代晩期の浅鉢、28の弥生時代前期の甕、30・31の石包丁は混入と考えられる。SR1は遺構の性格から時期幅が認められるが、概ね弥生時代後期末～古墳時代前期の自然流路と考えられる。

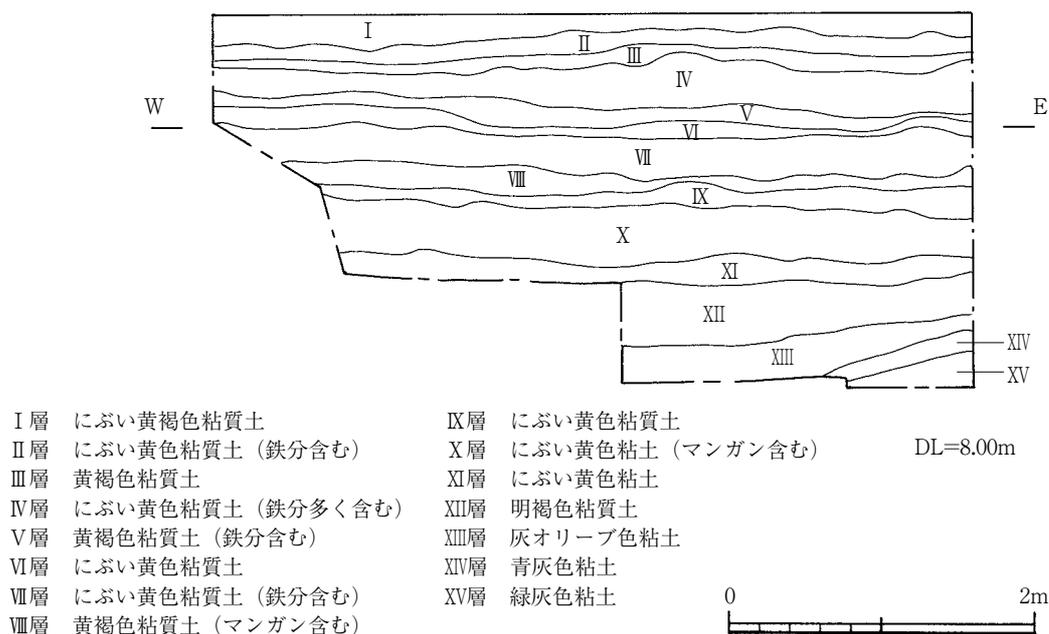


Fig.4 第Ⅰ調査区 基本層準

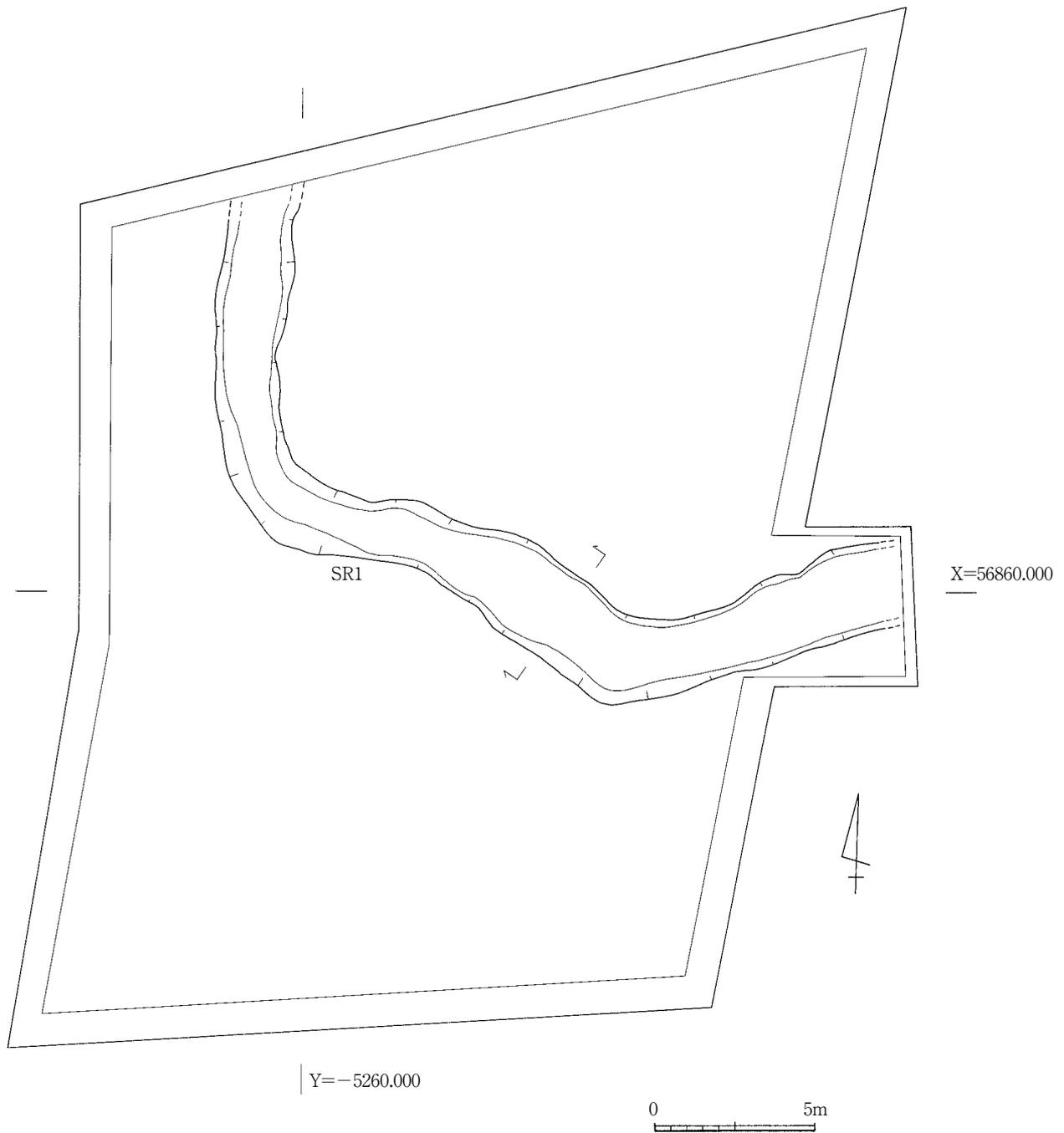


Fig.5 第I調査区 第1遺構面平面図

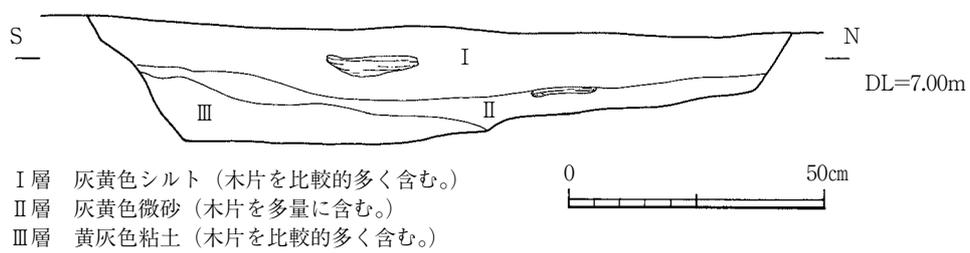


Fig.6 第I調査区 SR1断面図

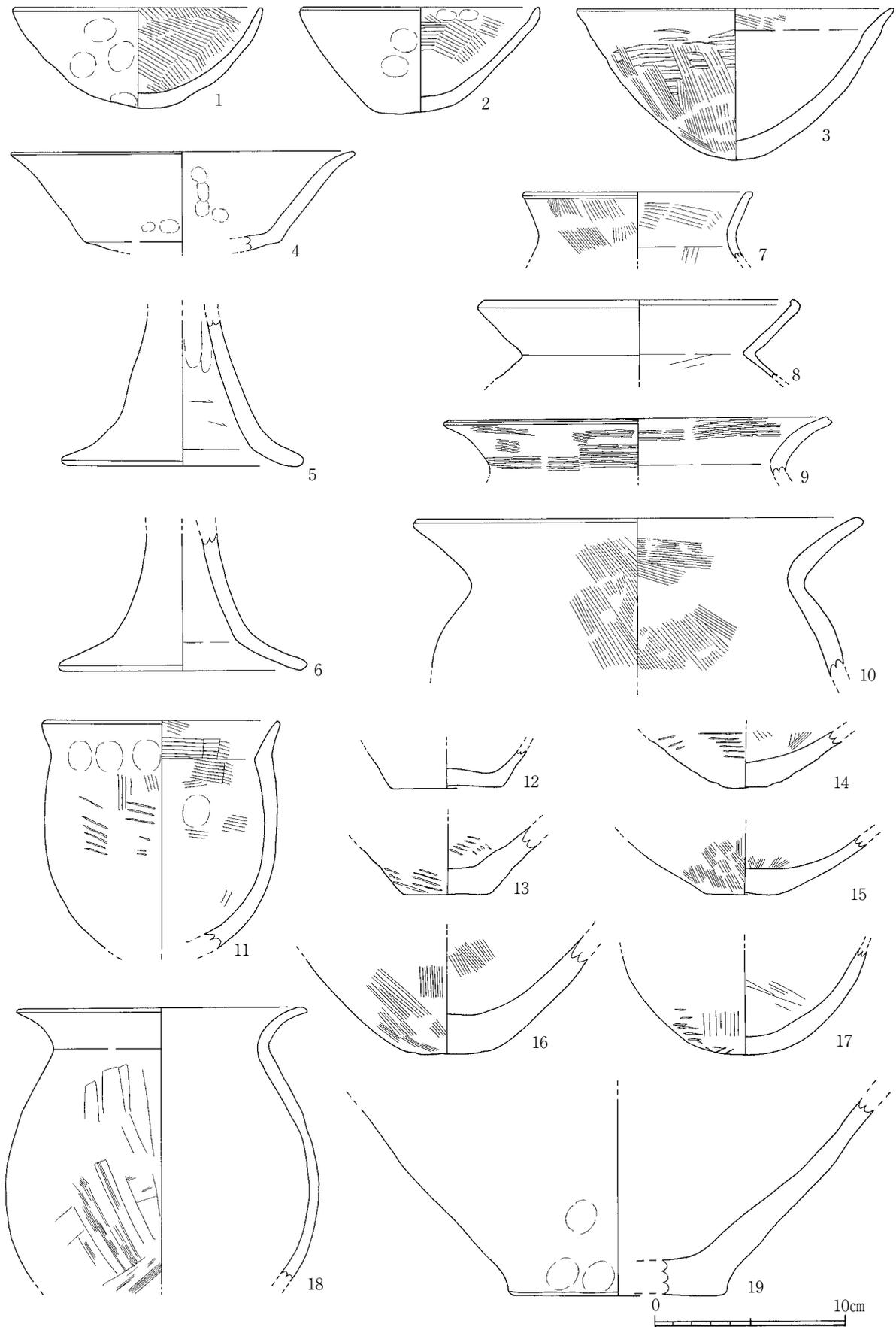


Fig.7 第I調査区 SR1・包含層出土遺物

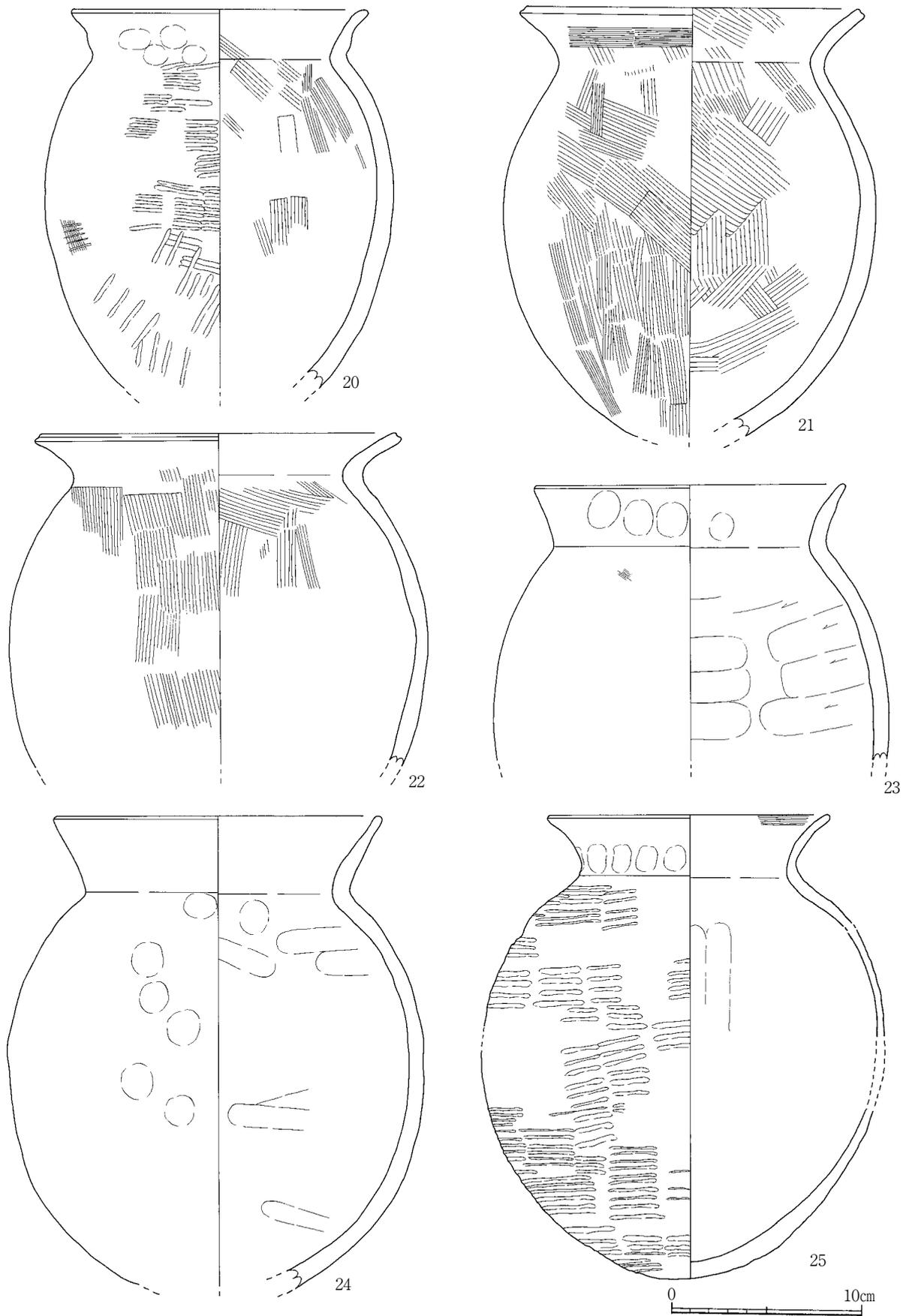


Fig.8 第I調査区 SR1 出土遺物

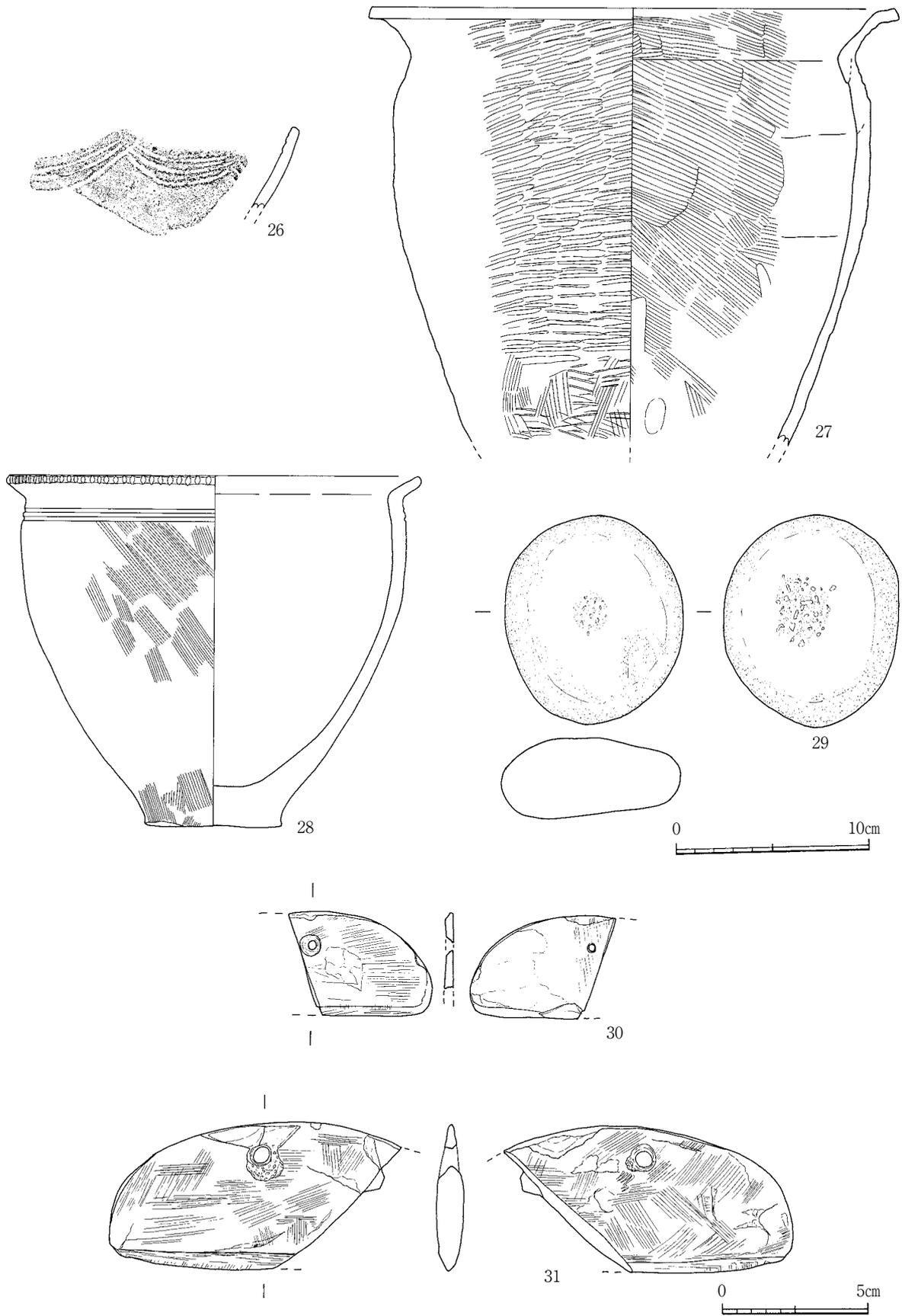


Fig.9 第I調査区 SR1 出土遺物

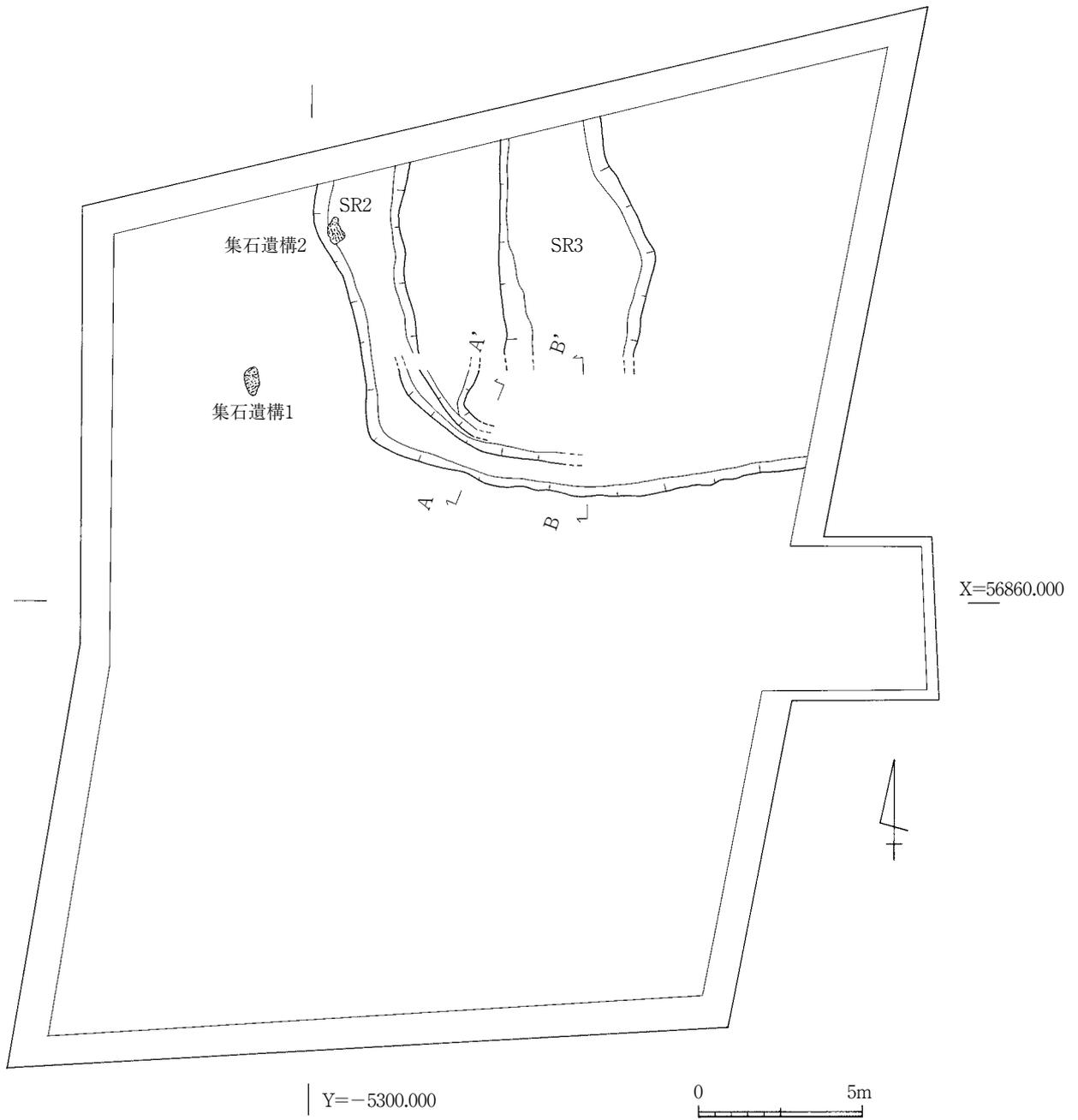


Fig.10 第I調査区 第2遺構面平面図

②第2遺構面 (Fig.10~13)

第2遺構面は第1遺構面から約60cm掘削して検出した。

SR2・3は、調査区北半部において検出した自然流路群である。断面観察から少なくとも4条の自然流路が切り合い関係をもち存在するが、各平面プランは明確に検出することはできなかった。

SR2は自然流路群の中では最も新しく、「L」字状に流れる。北方向へは調査区外へのび、東方向へは第Ⅱ調査区の低湿地につながる。幅約2m、深さ0.1mであり、約20mにわたり検出した。南北方向部分では流路の平面プランを検出することができたが、東西方向部分については北肩は検出することができなかった。基底面に高低差があまりなく、流路方向については判然としない。地形から考えると東方向から北方向への流路方向を想定することができる。出土遺物は、甕・壺・石斧・石鏃・叩き石である。38は縄文時代晩期の深鉢であり、混入である。40は石斧である。扁平な自然石の先端を磨き、石斧として利用していたと考えられる。石材は頁岩である。SR2は弥生時代中期中葉～後半の自然流路と考えられる。

SR3はSR2の東側に平行して流れる。北方向へは調査区外へのびる。南方向へはSR2の南肩以南でSR3の続きを検出していないことから、東か西方向に曲がるものと考えられる。SR3と他の自然流路との切り合い関係は不明である。幅約3.5m、深さ約0.2mである。

集石遺構1・2はともに調査区北西部において検出した。集石遺構1は直径約8cmの小石を長径約90cm、短径約50cmの平面楕円形に置く。小石除去後には、若干の窪みが認められた。出土遺物は弥生土器片・石鏃・獣歯である。集石遺構1は弥生時代中期後半の所産である。

集石遺構2は集石遺構1から約5m北、SR2の西肩部で検出した。直径約8cmの小石を長径約80cm、短径約40cmの平面楕円形に置く。時期決定に耐え得る遺物は出土しなかったが、集石遺構1と同一面で検出していることから同時期と考えられる。集石遺構1・2ともに同様の機能を果たしていたと考えられるが、性格は不明である。

③第3遺構面 (Fig.14~16)

第3遺構面は第2遺構面から約50cm掘削して検出した。

SR4は調査区北東部で検出した自然流路である。幅約1.4m、深さ約0.2mの規模であり、約13mにわたり検出した。北方向・東方向ともに調査区外へのびる。出土遺物は粗製の深鉢(44)である。SR4は縄文時代晩期である。

P1はSR4の埋土を除去して検出したピットである。直径約50cm、深さ約10cmの規模である。基底部分は平らであり壁は垂直に立ち上がる。埋土は黄灰色粘土であり、植物遺体を少量含む。また、SR4の埋土とは違う。遺物は出土しなかった。

④第4遺構面

第4遺構面は第3遺構面から約30cm掘削して検出した。

SR5は調査区の北東部で検出した自然流路である。深さ約0.6mをはかる。幅については調査区の都合上確認することができなかった。遺物は出土しなかった。

⑤包含層出土遺物 (Fig.7・17・18)

56~58は深鉢である。これらは同一個体である。体部上半は屈曲部から緩やかに立ち上がる。口縁

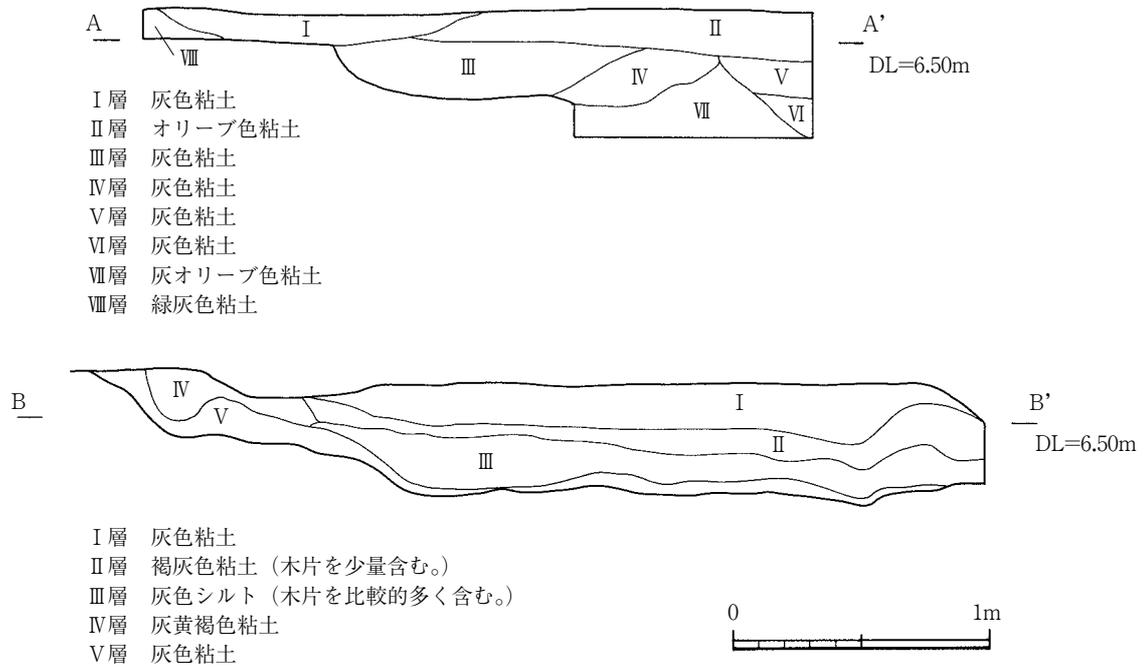


Fig.11 第I調査区 SR群 断面図

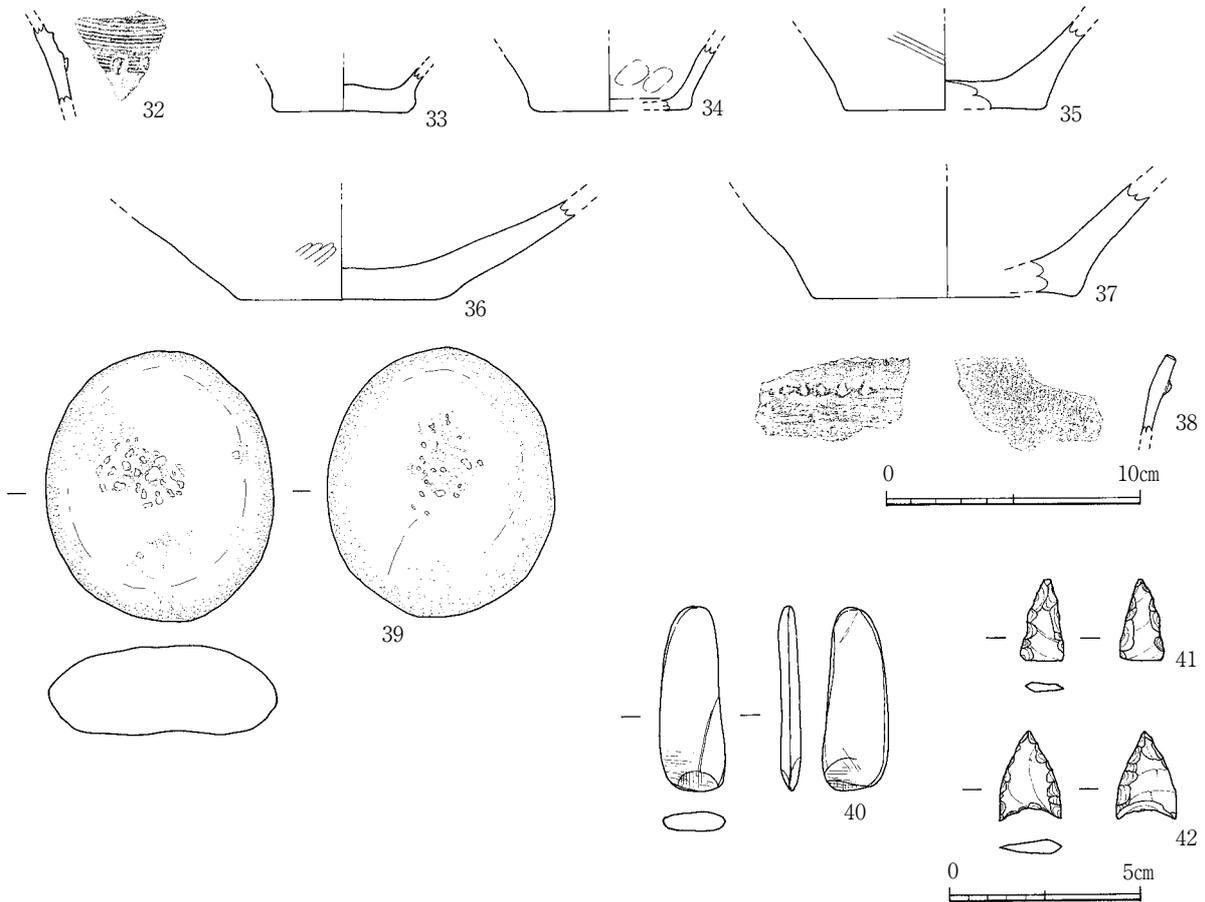


Fig.12 第I調査区 SR2 出土遺物

部のやや下がった位置に刻み目突帯を貼付する。屈曲部に刻み目を施す。体部外面屈曲部以下は条痕調整を施す。内傾接合である。59・73・74は縄文土器である。ともに粗製の深鉢である。外面は条痕調整である。60～63は突帯文土器である。60～62は口縁からやや下がった位置に突帯を貼付する。60は口唇部を丸くおさめるが、61・62は面をなす。65は弥生時代前期の壺である。無軸の木葉文を施す。無軸の木葉文は県下初例である。70は甕である。口縁部は緩やかに外上方にのびる。体部外面は叩き成形後、ハケ調整を施す。叩き痕は口縁部下半にもみられる。内面はハケ調整である。外面には煤の付着が認められる。76・77は古銭である。76は天聖元寶である。77は1/4程欠損しているが景祐元寶の篆書体であると考えられる。これらの他にも1点出土しているが劣化が激しく判読不能である。

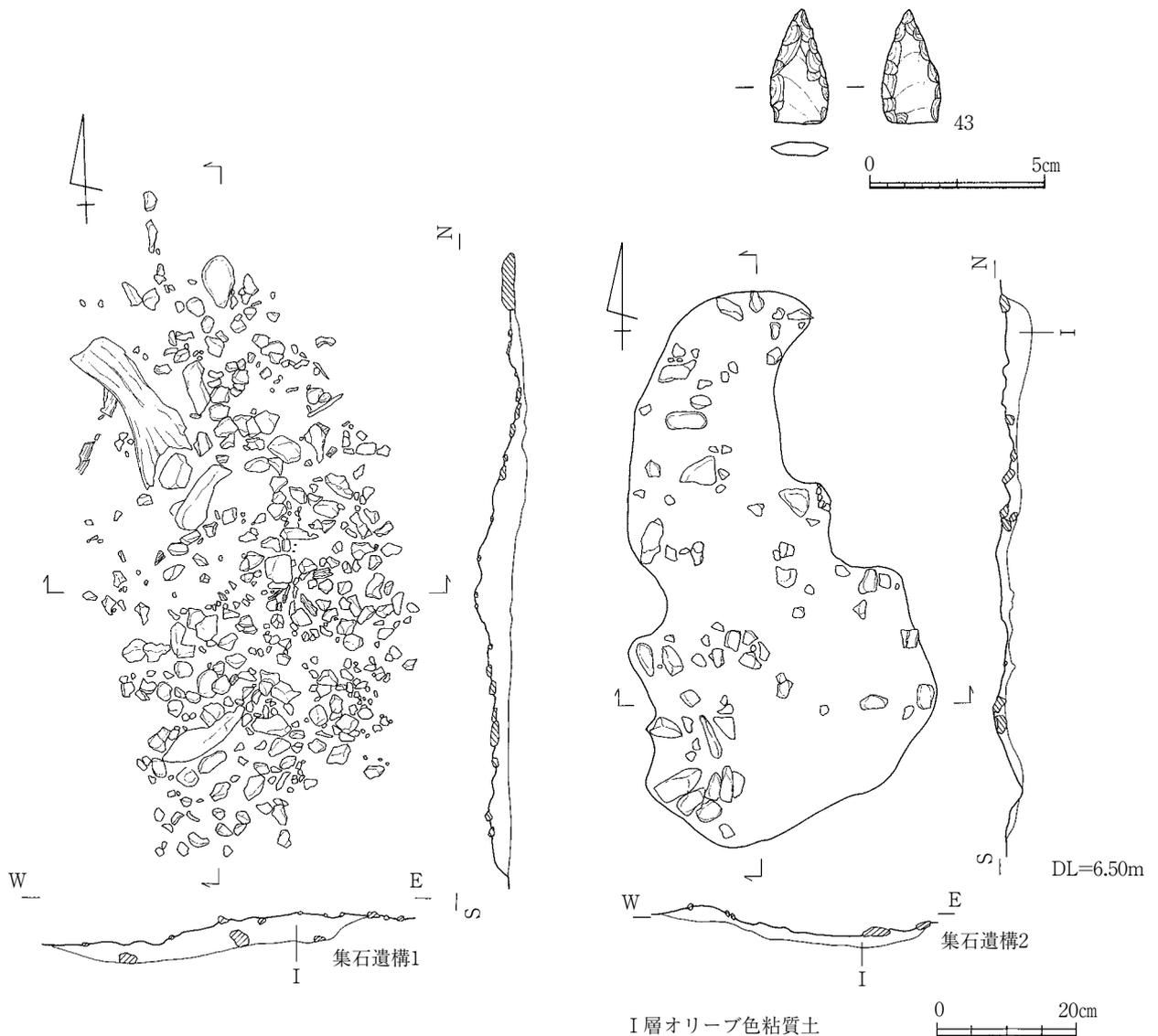


Fig.13 第I調査区 集石遺構1・2平面図・断面図・出土遺物

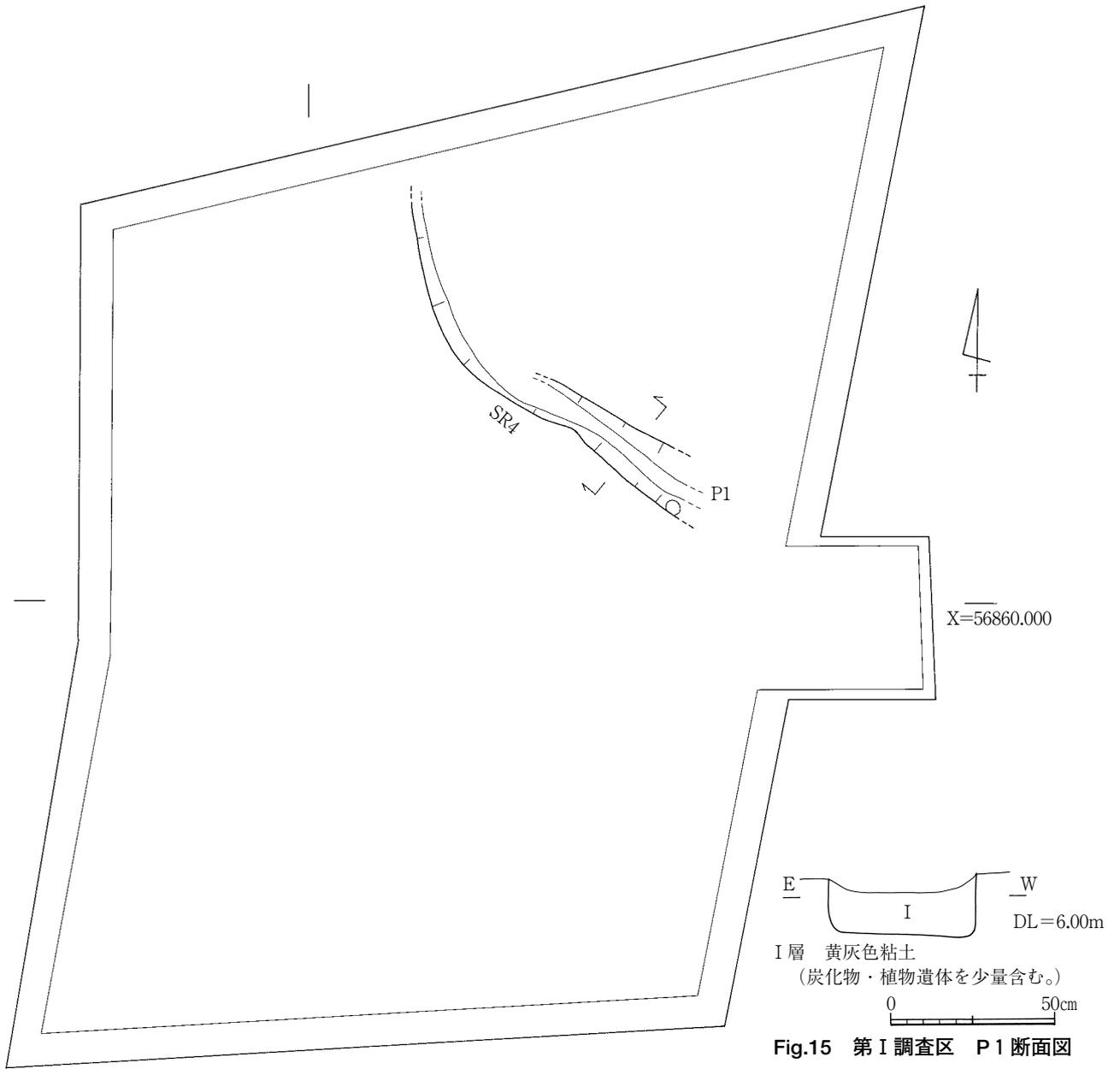
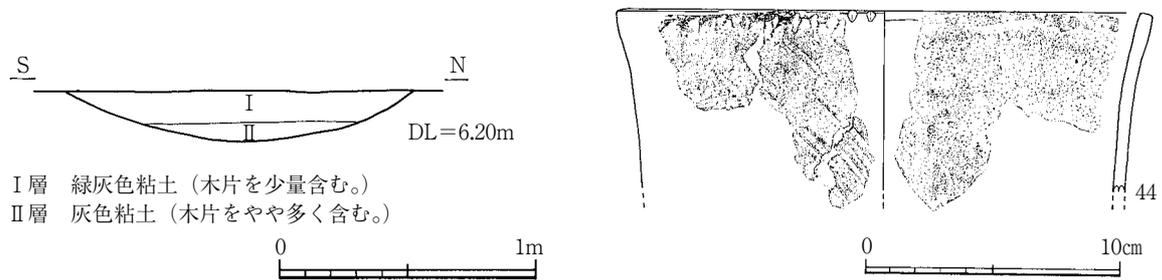


Fig.14 第I調査区 第3遺構面平面図



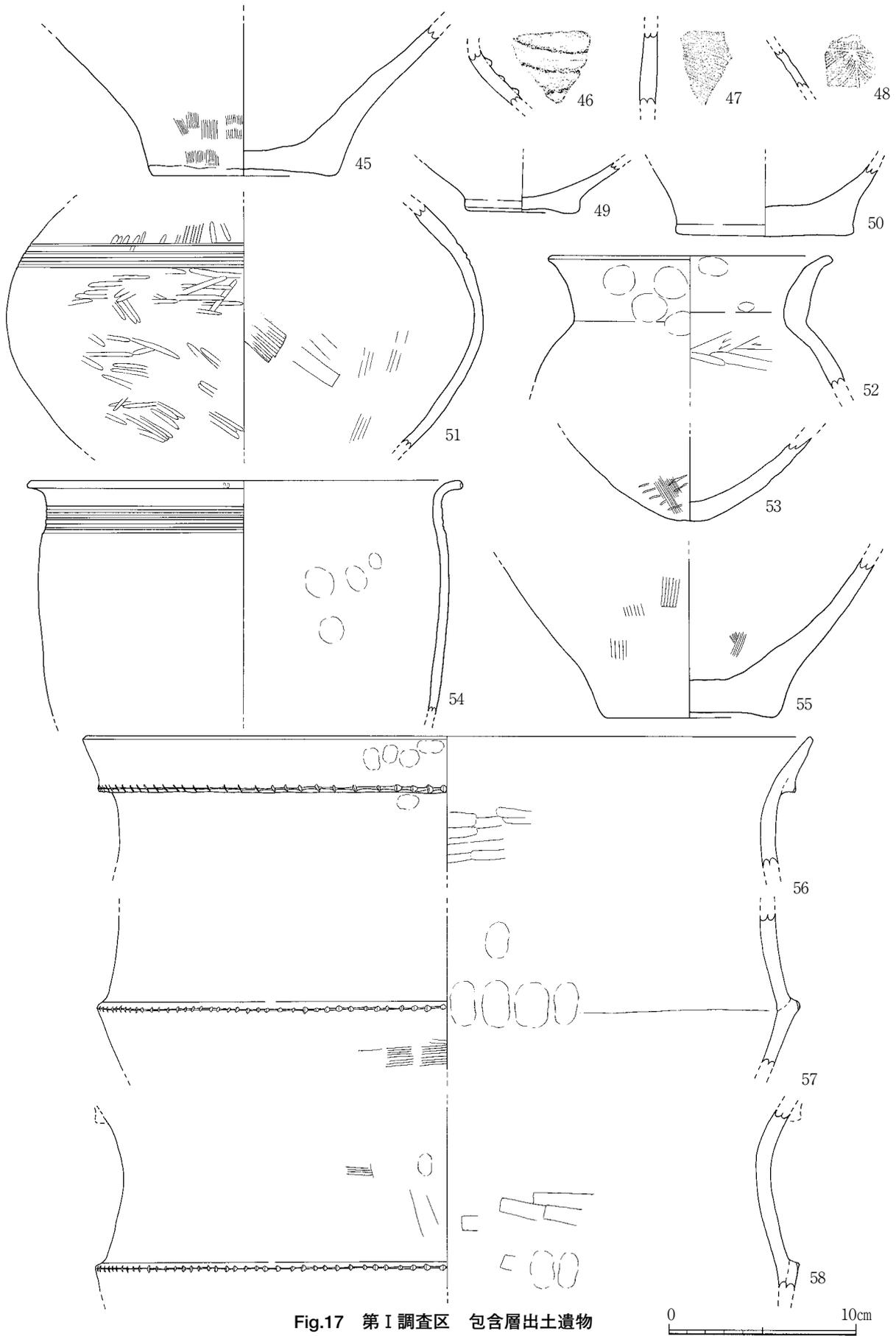


Fig.17 第I調査区 包含層出土遺物

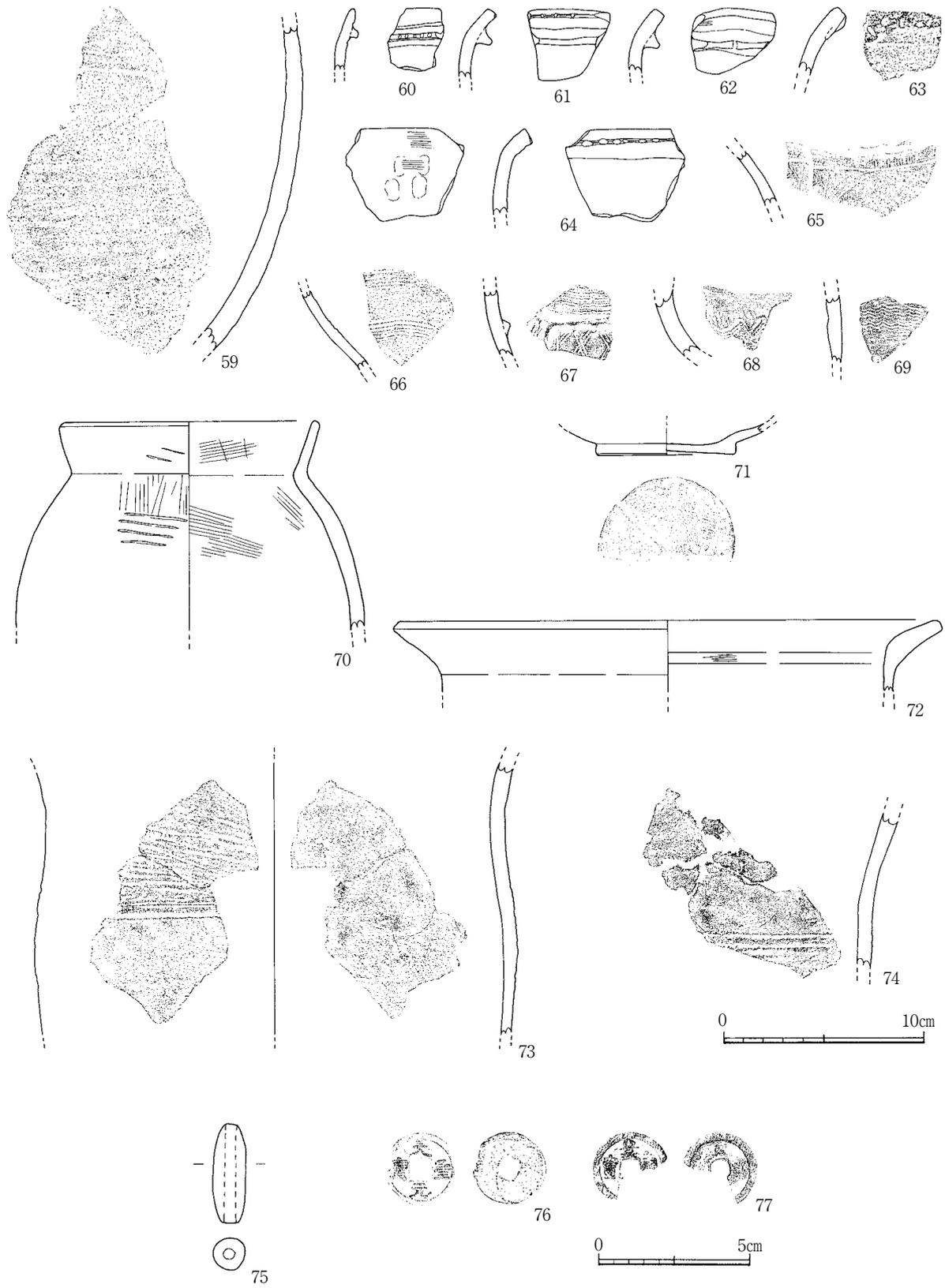


Fig.18 第I調査区 包含層出土遺物

2. 第Ⅱ調査区

(1) 調査区の概要 (Fig.19)

縄文時代後期中葉以降、谷地形を埋没していく過程が明らかとなった。基本的には、北東方向から南西方向への傾斜面堆積を示す。

祭祀的要素の強い土器集中部が確認された。土師器の甕・小型丸底壺・高杯がまとめて出土した。正位置を保ったものは無く、投げ込まれたものと推測される。102の須恵器壺もこの土器集中部に伴うものと考えられる。また、周辺グリット及び上層・下層から小型丸底壺等が出土している。

(2) 包含層出土遺物 (Fig.20~26)

99は須恵器高杯の脚である。外面はカキメ調整を施す。102は須恵器の壺である。外面は叩き痕を非常に丁寧にナデ消す。外面に3ヶ所「×」のヘラ記号がある。TK73型式併行段階あるいはそれ以前に遡る可能性がある。県下では最古段階に属する。117は畿内産の甕である。122は複合口縁壺である。133・134は神西式土器である。147・148は縄文時代晩期の浅鉢である。頸部で屈曲し、内湾気味に立ち上がる。外面はヘラ磨き調整を施す。149は縄文時代晩期の粗製の深鉢である。

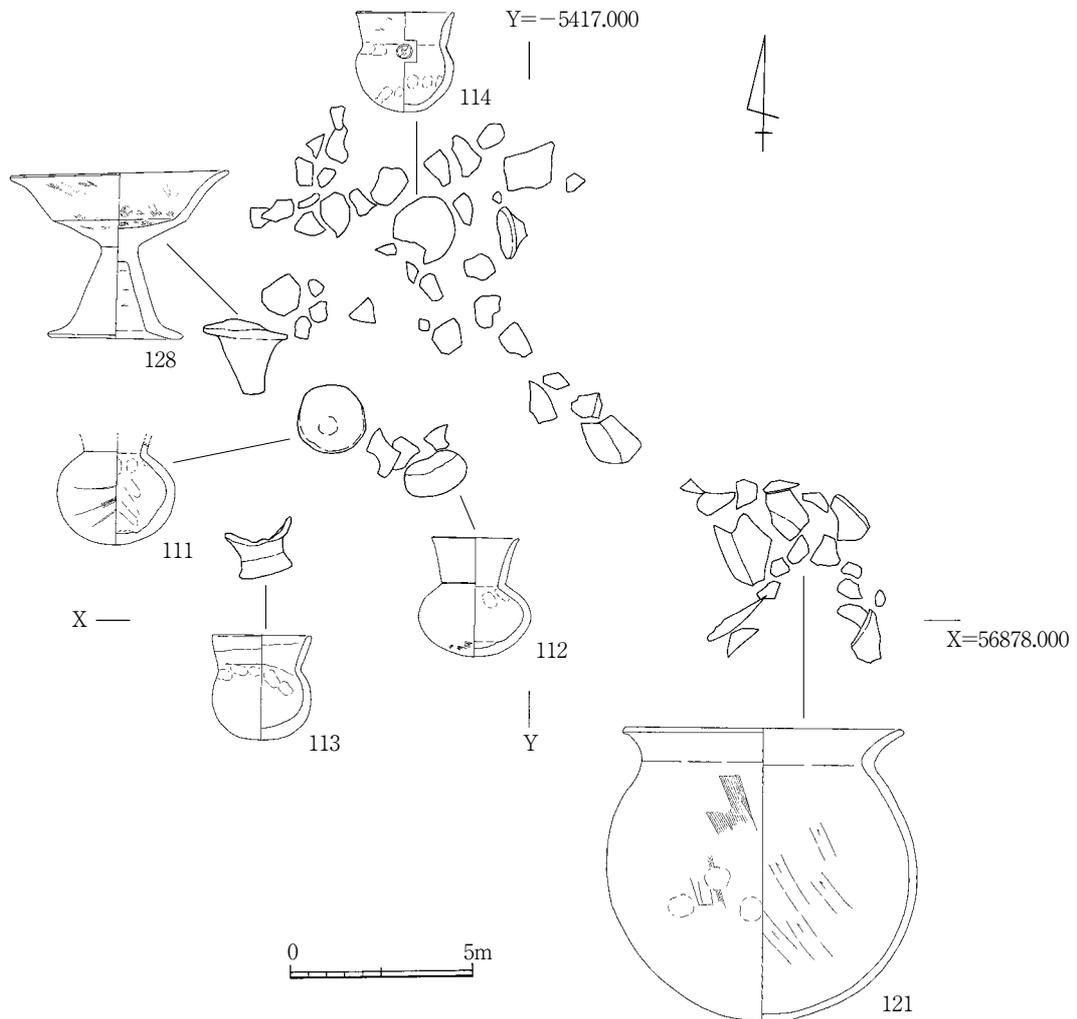


Fig.19 第Ⅱ調査区 土器集中部平面図

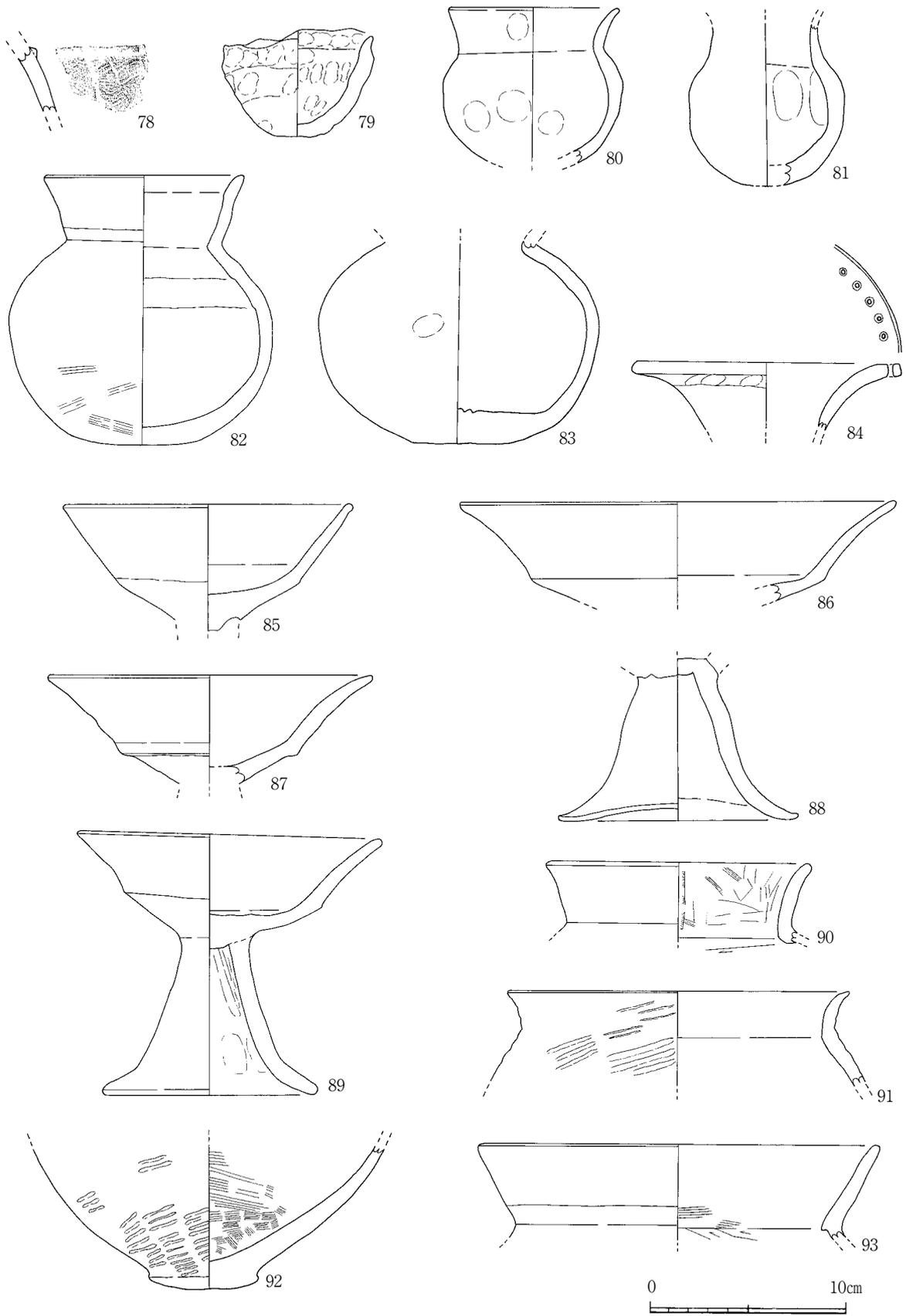


Fig.20 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物

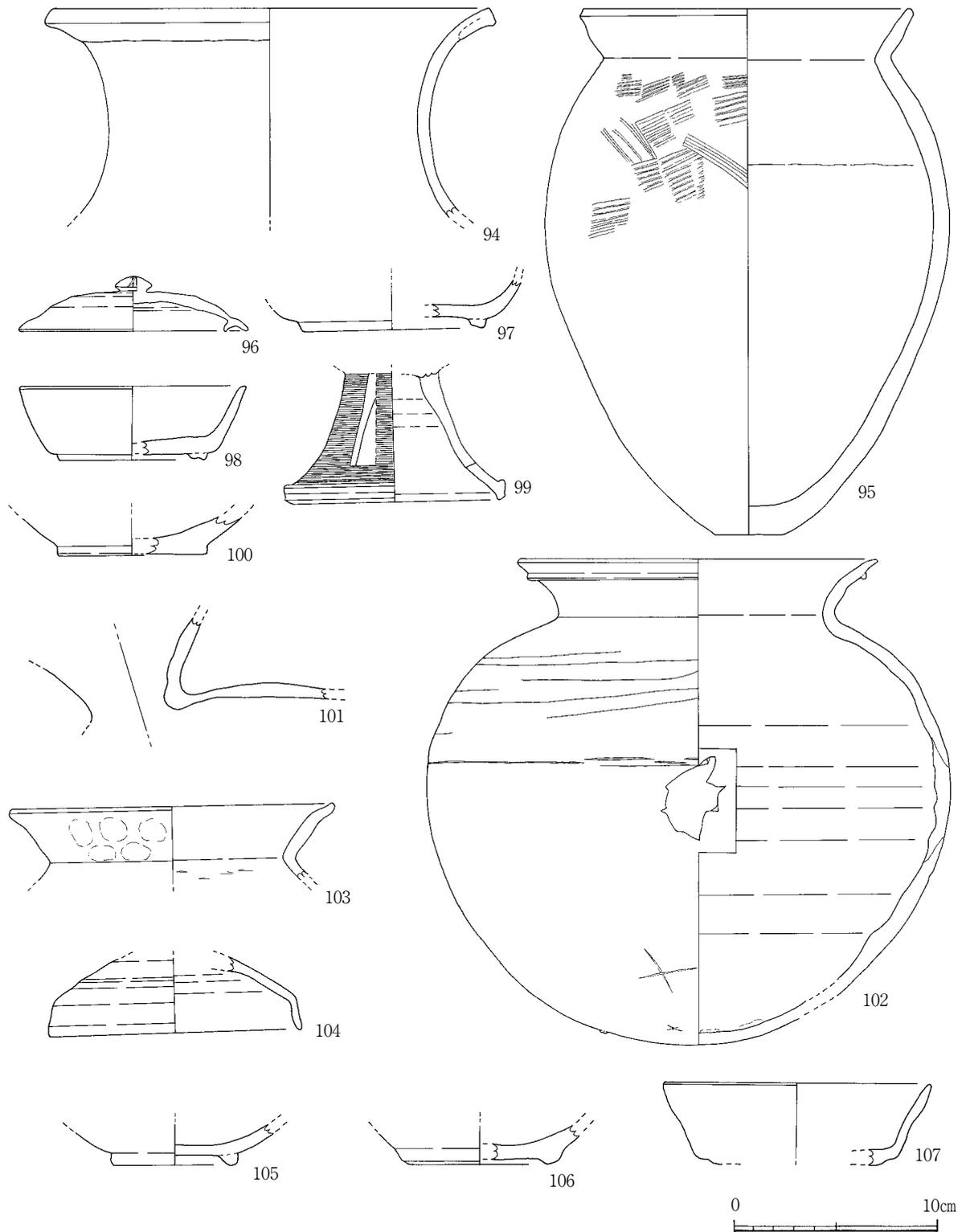


Fig.21 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物

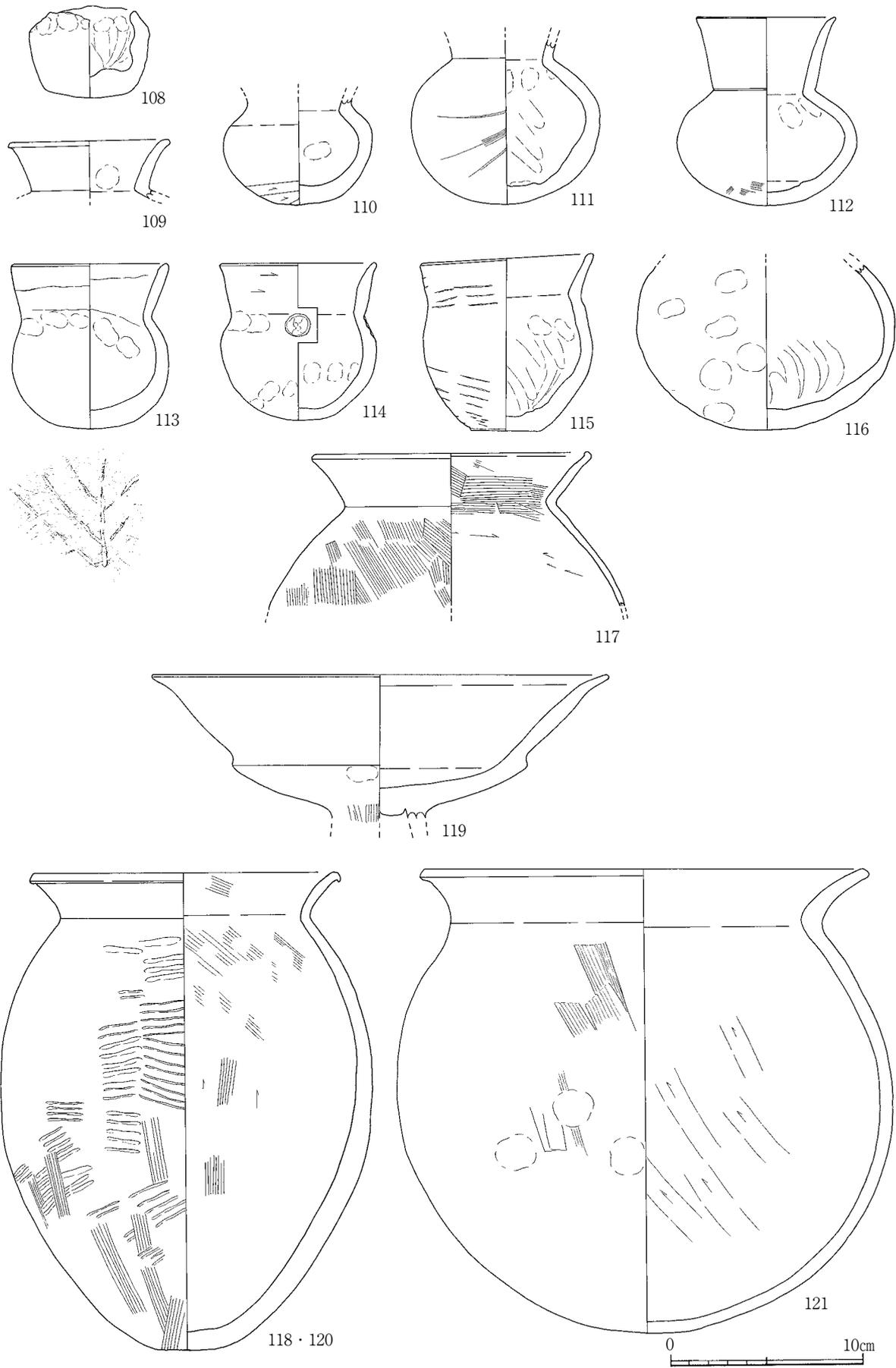


Fig.22 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物

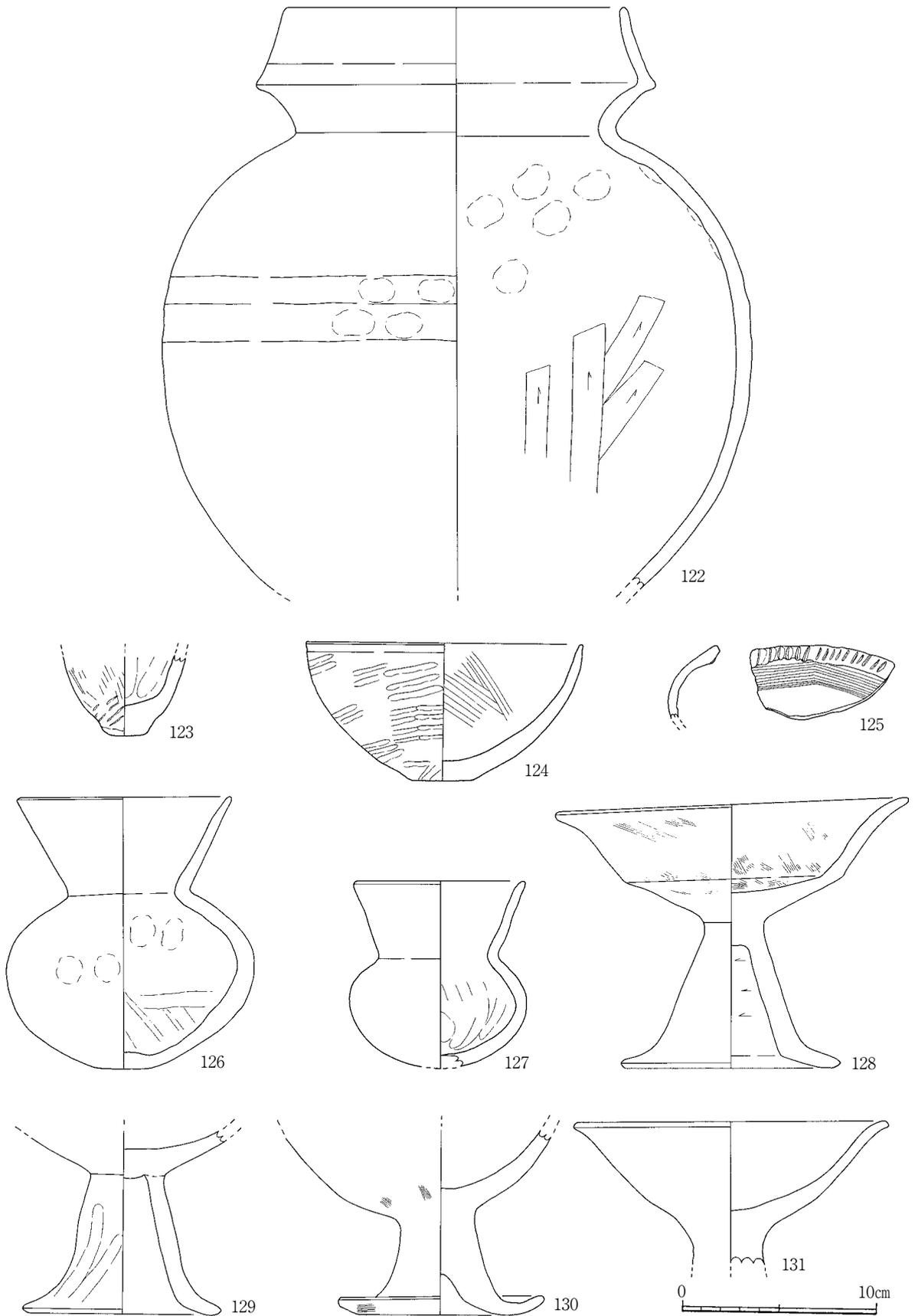


Fig.23 第Ⅱ調査区 包含層出土遺物

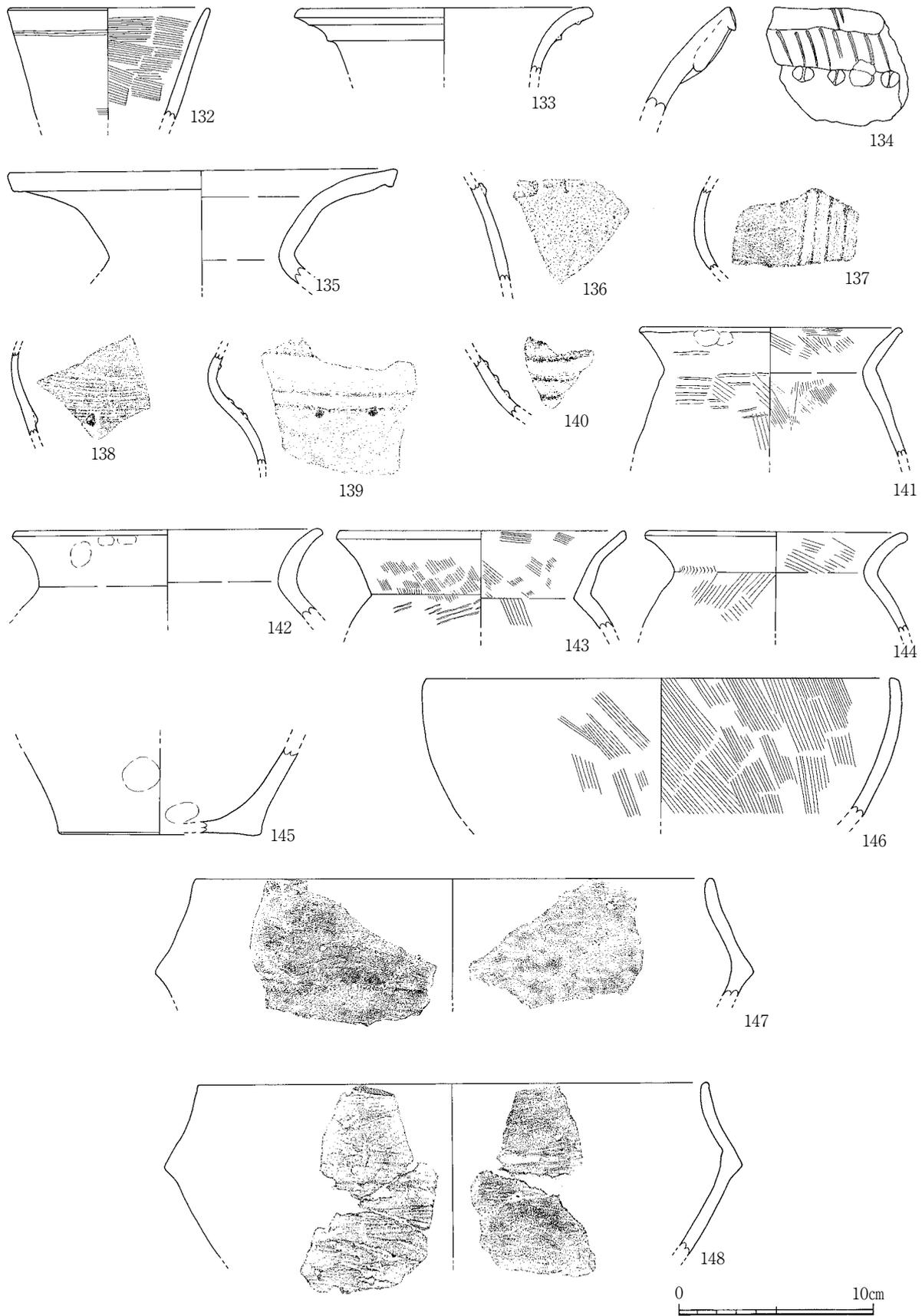


Fig.24 第Ⅱ調査区 包含出土遺物

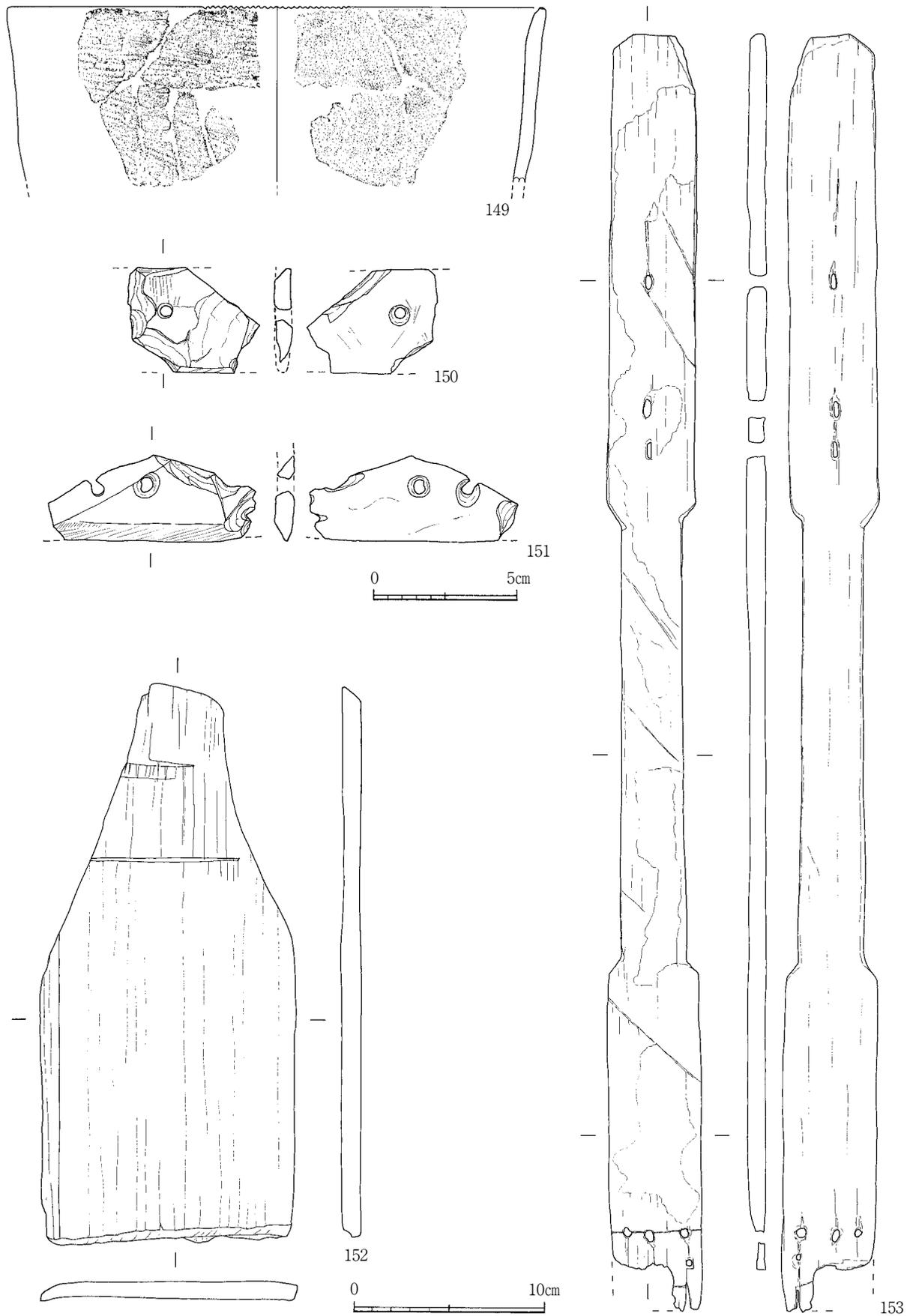


Fig.25 第Ⅱ調査区 包含出土遺物

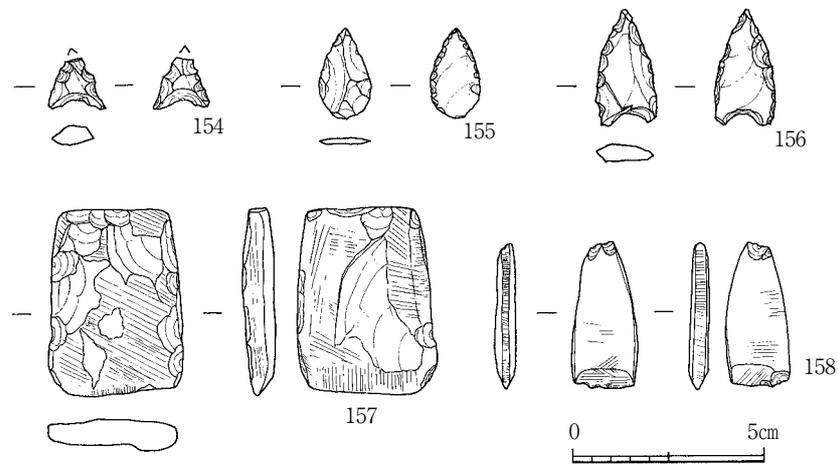


Fig.26 第Ⅱ調査区 包含出土遺物

3. 第Ⅲ調査区

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig.27)

第Ⅱ調査区同様、縄文時代後期後半以降、谷地形を埋没していく過程が明らかとなった。近世以前は基本的に北西方向から南東方向への傾斜面堆積を示す。

また、基本層準は調査区東壁で観察を行った。

- I層 灰色粘土
- II層 灰色粘質土
- III層 にぶい黄褐色粘質土
- IV層 青灰色粘質土
- V層 腐食土
- VI層 にぶい黄褐色腐食土混じり粘土
- VII層 暗黄褐色腐食土混じり粘土
- VIII層 暗灰黄色腐食土混じり粘土
- IX層 灰色粘土
- X層 灰色粘土
- XI層 暗灰黄色粘土
- XII層 暗灰黄色粘土
- XIII層 明緑灰色粘土
- XIV層 腐食土
- XV層 明緑灰色粘土

I・II層は主に調査区の南半部に分布する。VI層は古代の包含層である。VII・VIII層は弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物包含層である。IX層は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の遺物を少量含むが、概ね弥生時代中期中葉～後半の遺物包含層である。

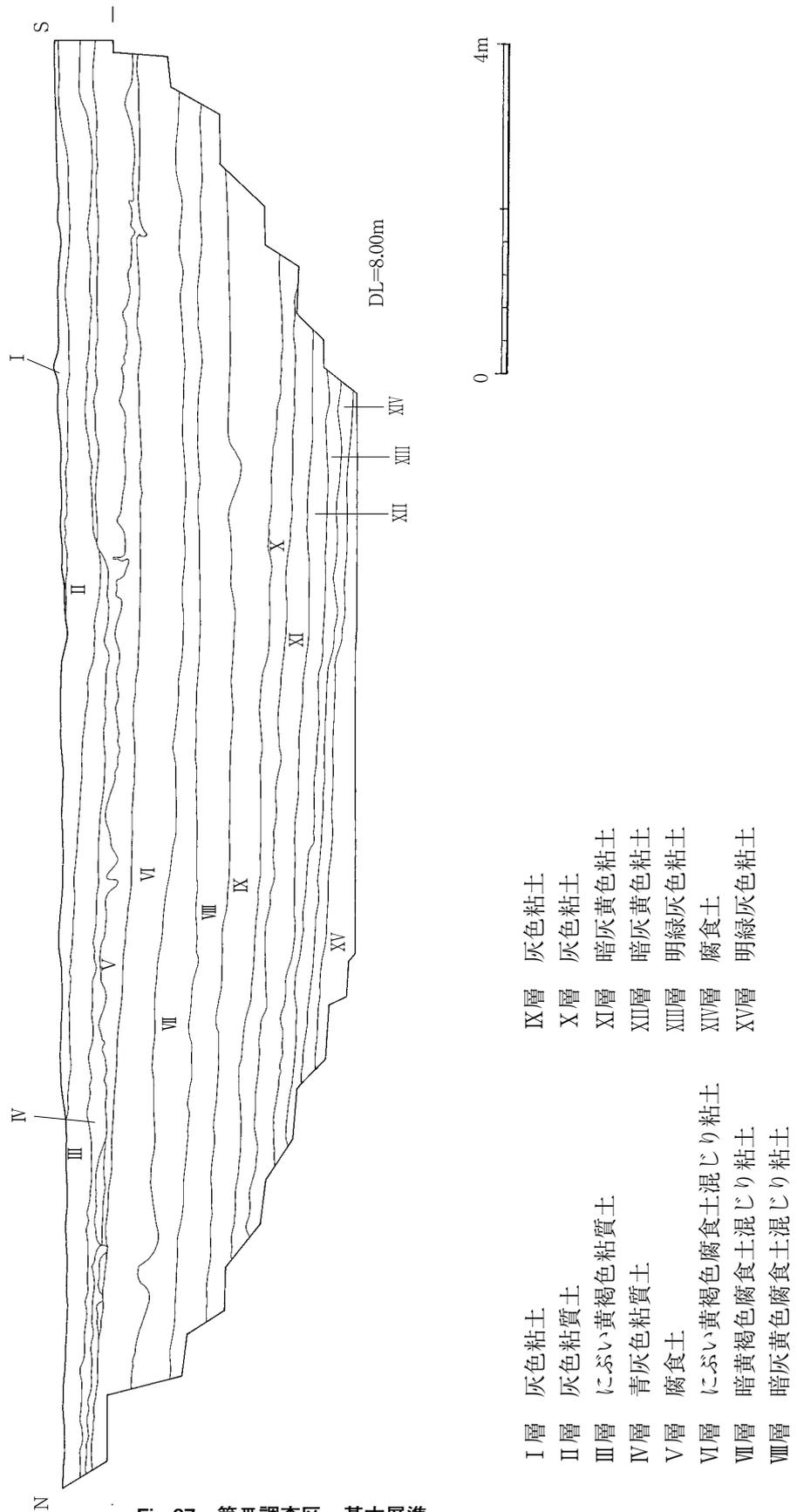


Fig.27 第三調査区 基本層準

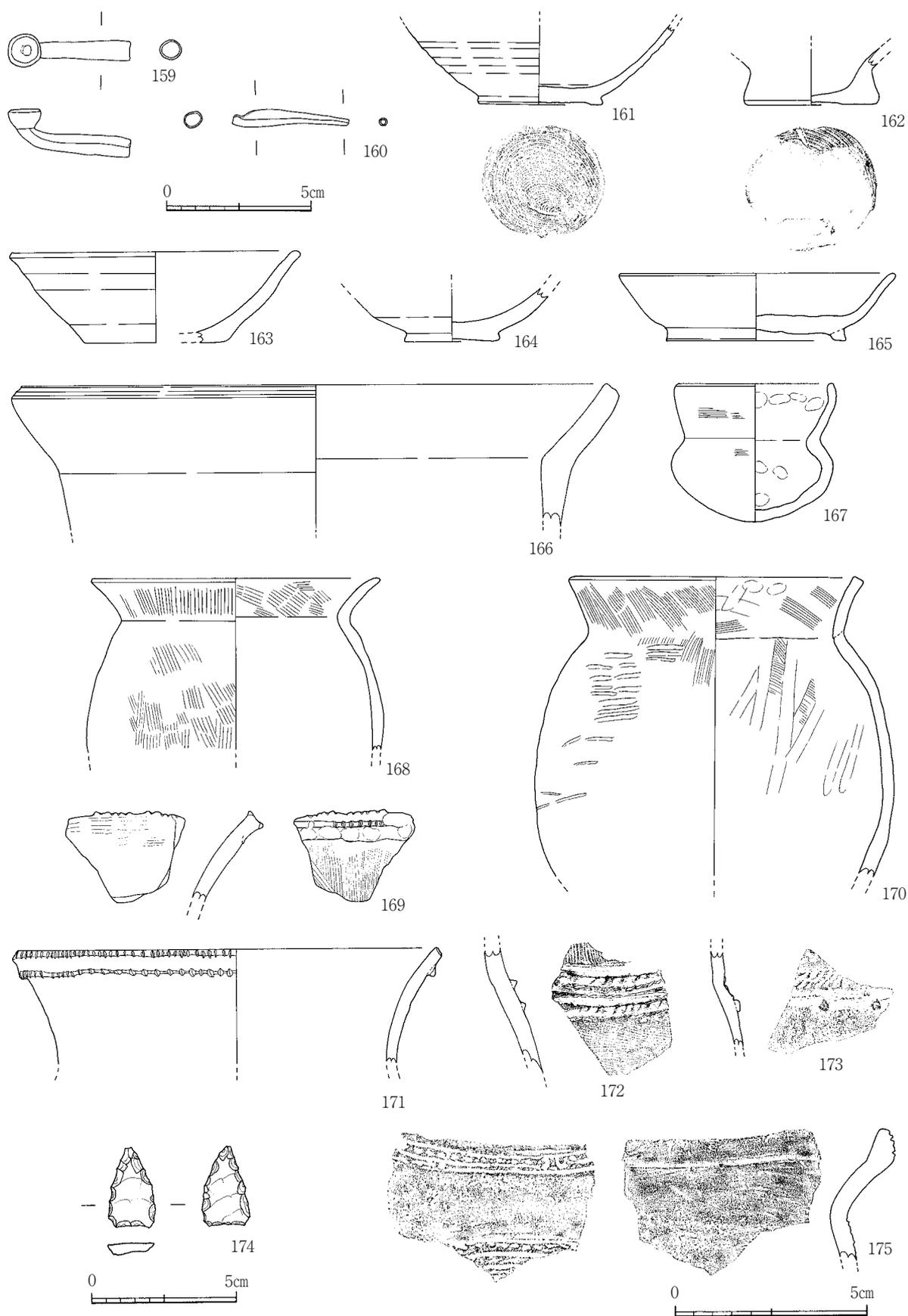


Fig.28 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

(2) 包含層出土遺物 (Fig.28~Fig.34)

165は須恵器の杯である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。底部外面にはヘラ切り痕が残る。167は小型丸底壺である。体部はやや上半に最大径をもち、口縁部は内湾してたちあがる。168は土師器の甕である。体部外面はやや粗いハケ調整である。外面は激しく煤ける。170は土師器の甕である。体部外面は叩き成形後、ハケ調整を施す。口縁部外面は斜め方向のハケ調整である。外面には煤が付着する。175は伊吹町式の深鉢である。波状口縁である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は直立する。口唇部は尖り気味に丸くおさまる。縄文の撚り方はRLである。口縁部には3条の沈線を巡らせ、上段の沈線と中段の沈線の間には刺突文を施す。胴部上半にも4条以上の沈線帯を巡らせ、上から1本目の沈線直下に刺突文を施す。縄文時代後期後葉である。180は田下駄である。一方の先端を平面三角形に切断する。鼻緒孔3孔以外に側辺に2ヶ所穴をあける。残存長61.5cm、全幅8.8cm、厚さ1.3cmである。田下駄として転用したのと考えられる。181は田下駄である。鼻緒孔3孔以外に9孔あける。縁辺部に縁弧に沿い、2孔1対の孔を3ヶ所にあける。また、縁辺部に沿い溝が巡る。田下駄として転用したものである。全長61.1cm、全幅16.1cm、厚さ1.1cmである。182は用途不明木製品である。一方の先端を凸状に加工し、凸状部の根元部分に溝状に抉る。残存長64cm、全幅13.2cm、厚さ1cmである。184は建築部材である。一方の長辺に抉りを入れる。2孔1対の孔を3ヶ所にあける。残存長111cm、全幅12.8cm、厚さ2.8cmである。185はナスビ形木製品である。刃部が三つ又にわかれるタイプである。全長66.1cm、全幅16.9cm、厚さ1.6cmである。

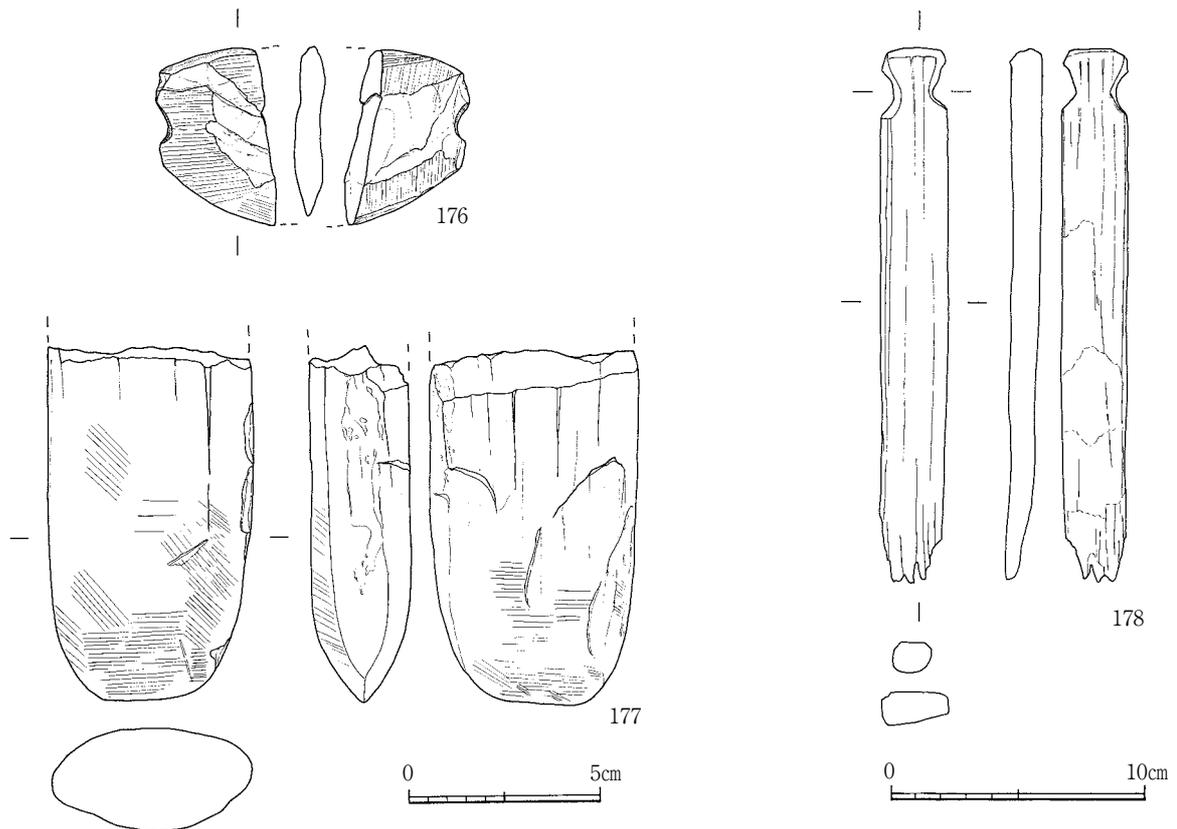


Fig.29 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

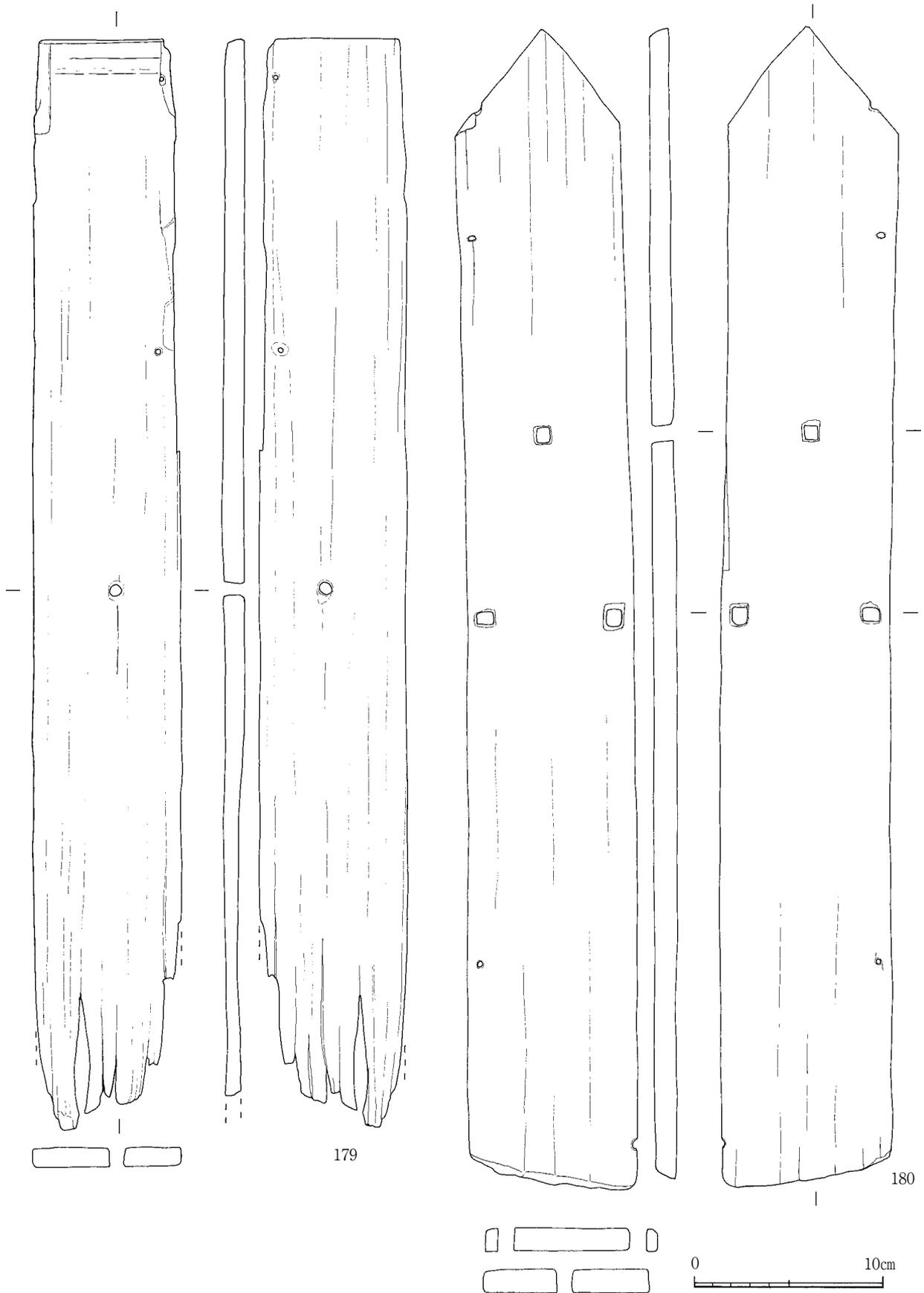


Fig.30 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

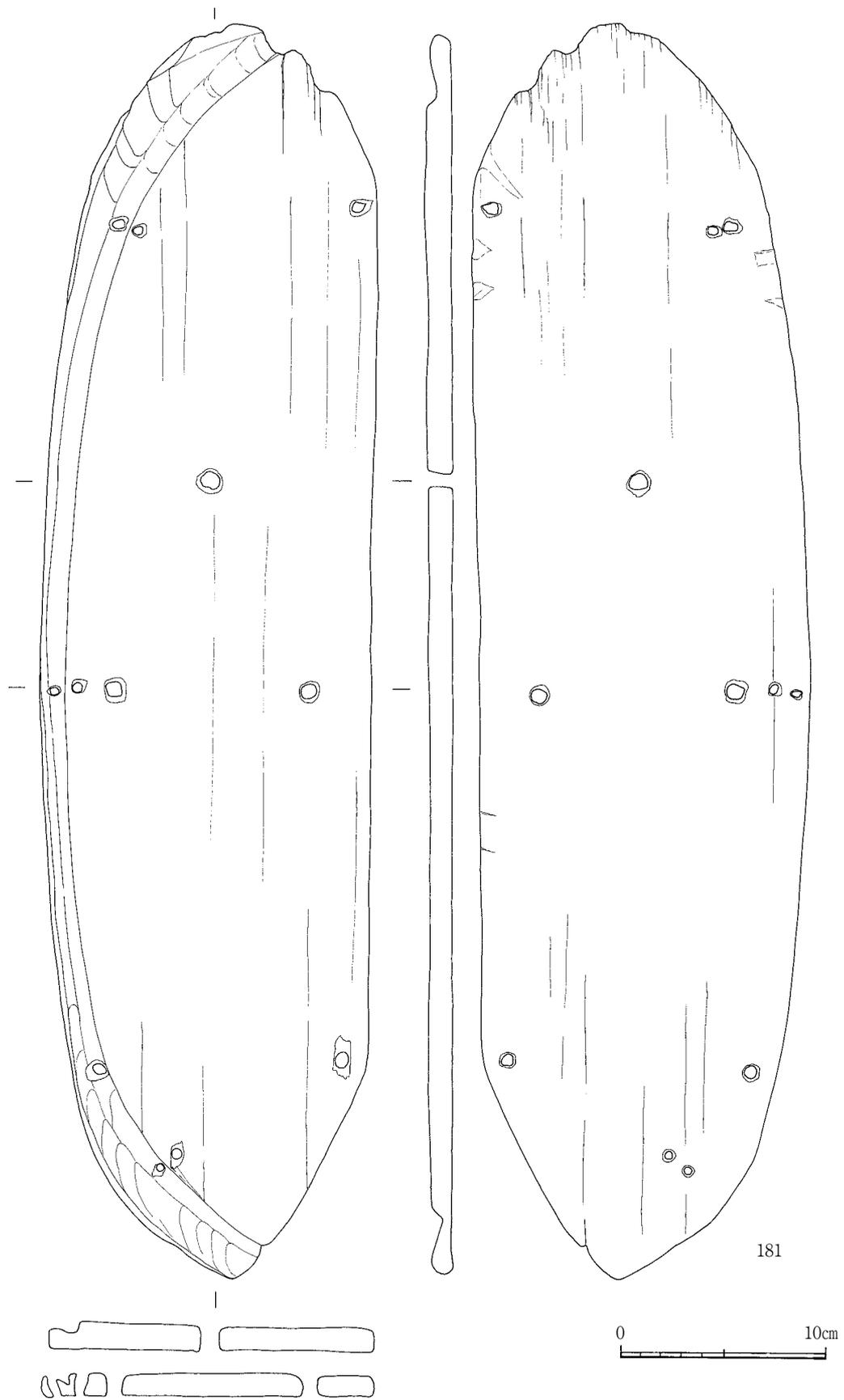


Fig.31 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

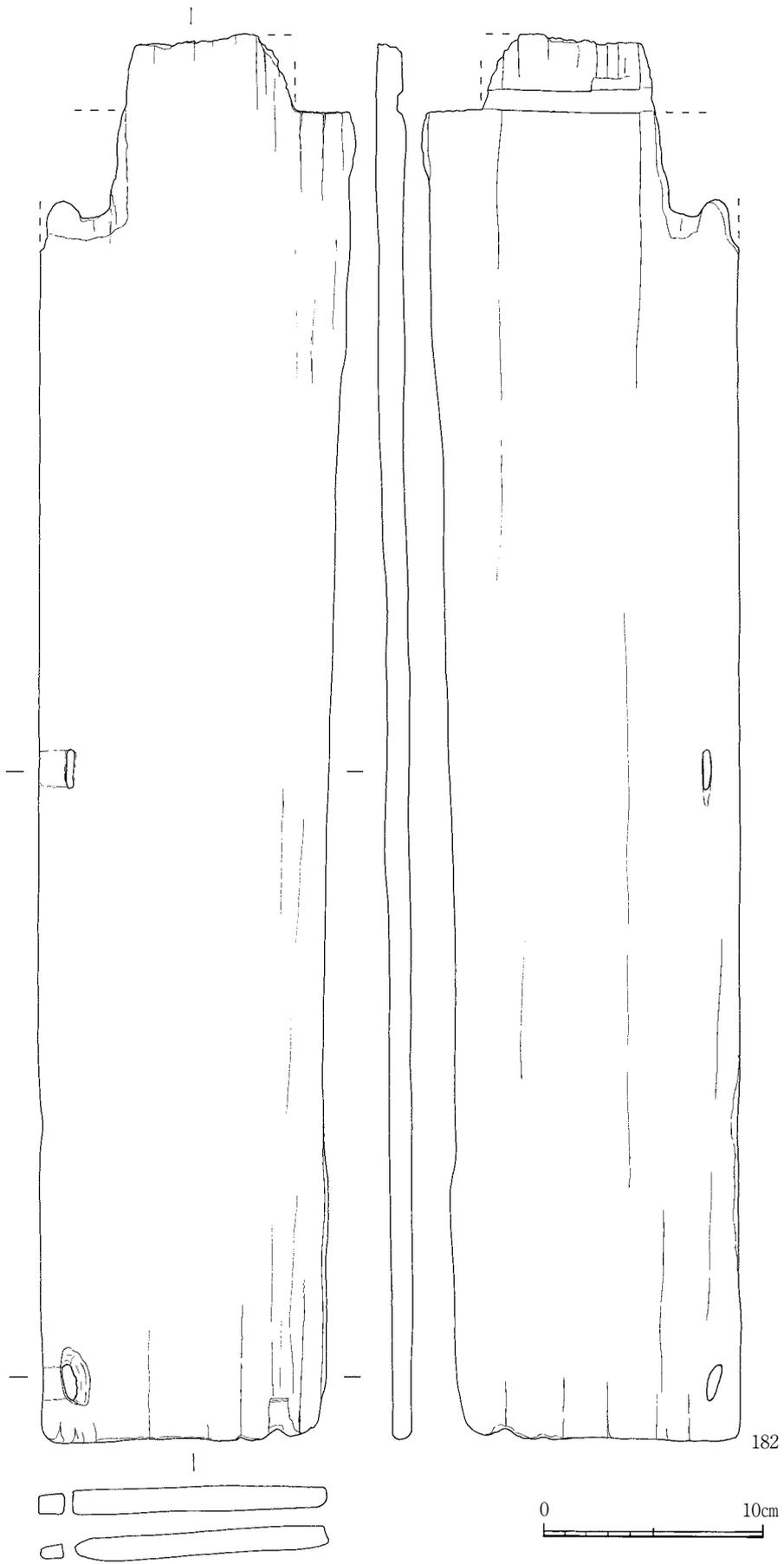


Fig.32 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

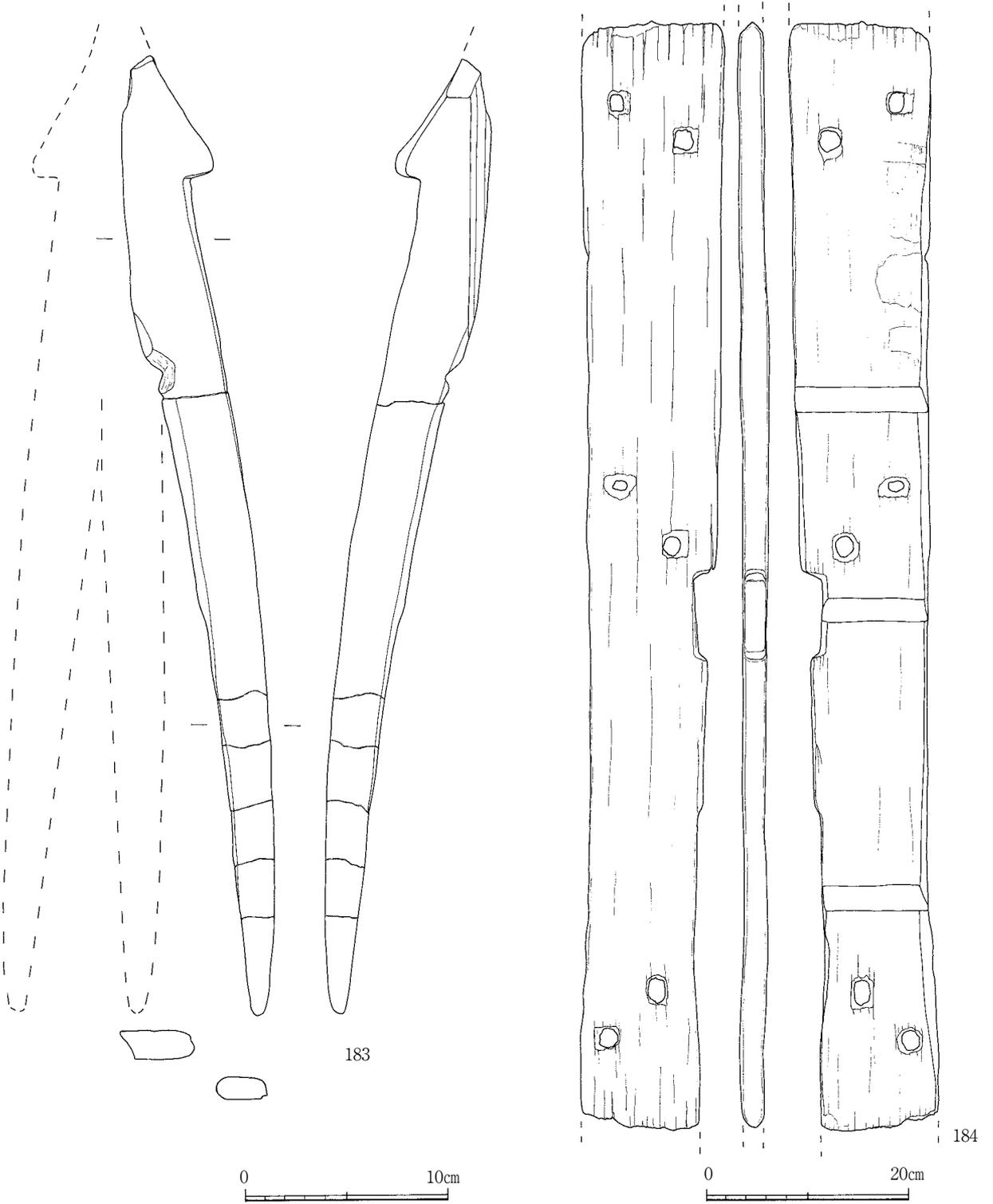


Fig.33 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

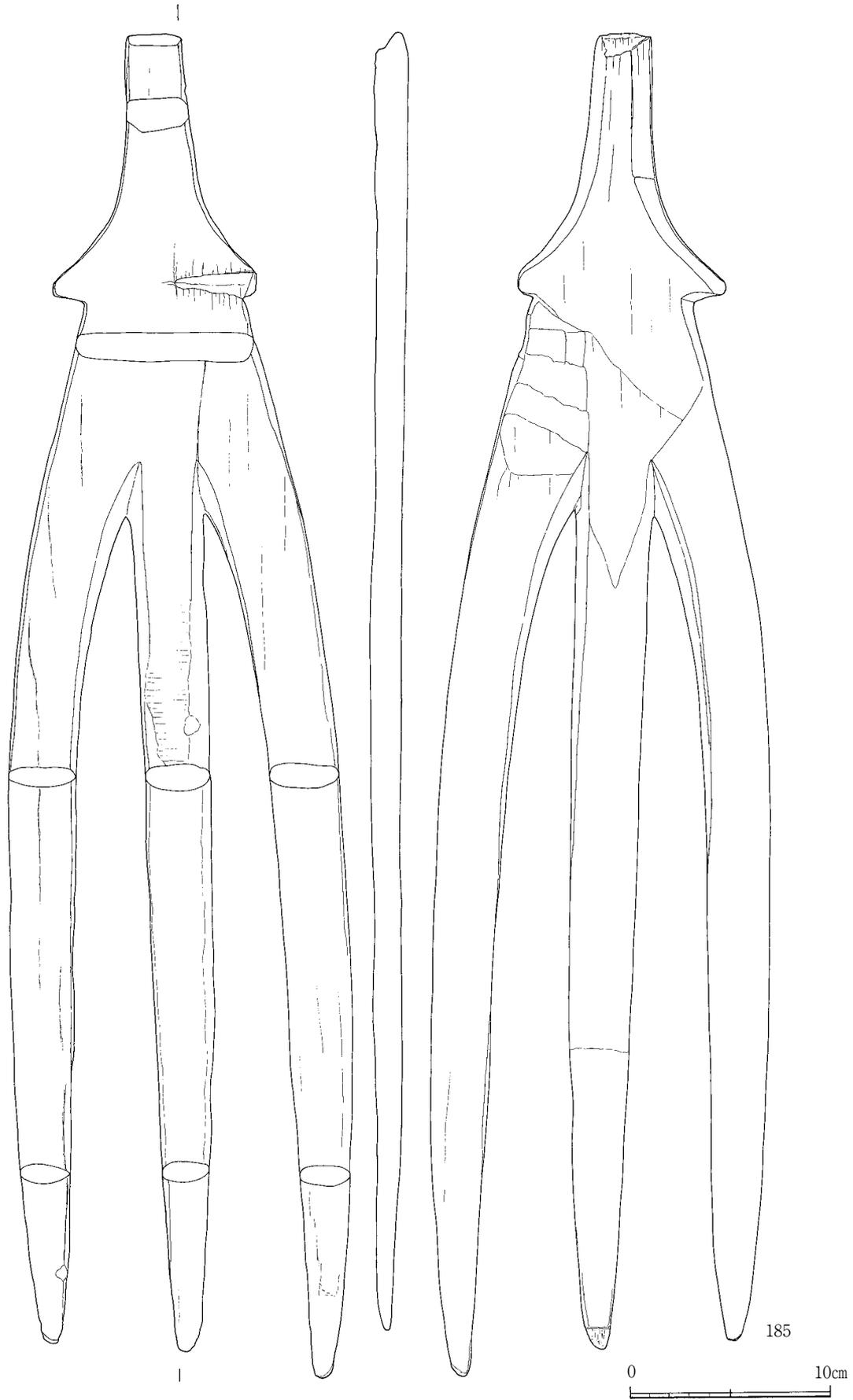


Fig.34 第Ⅲ調査区 包含層出土遺物

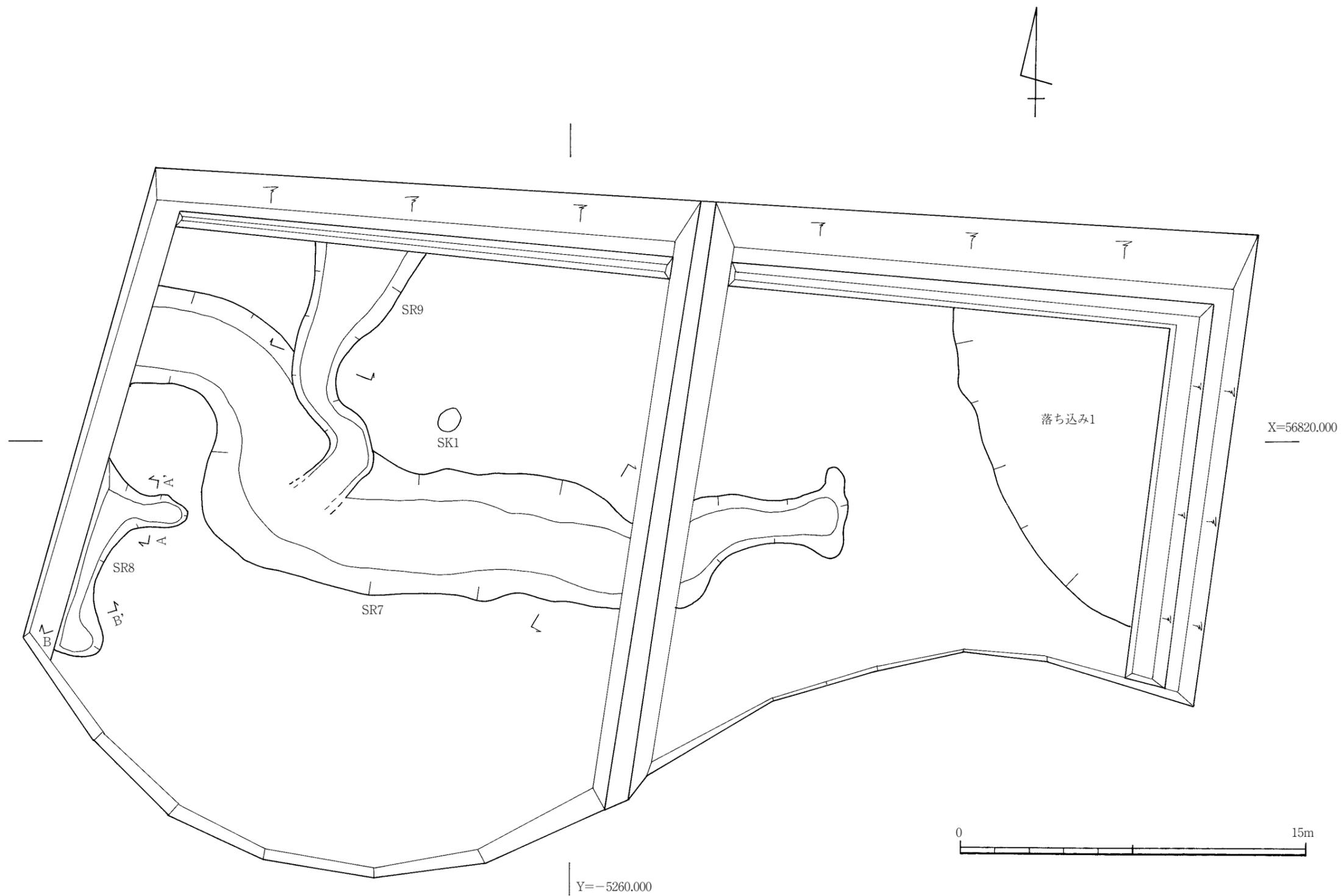


Fig.35 第Ⅳ調査区 平面図

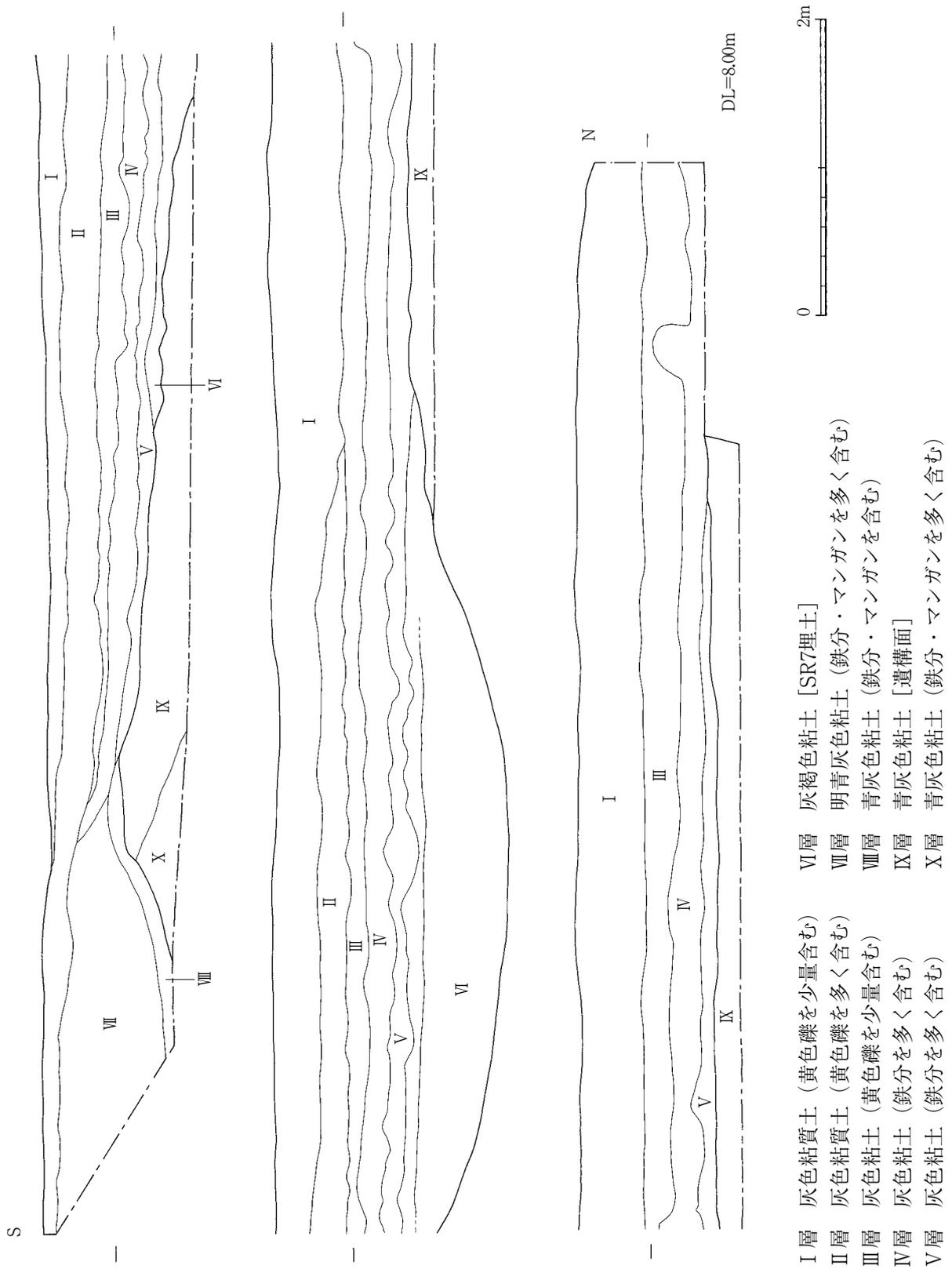


Fig.36 第IV調査区 基本層準

4. 第Ⅳ調査区

(1) 調査区の概要と基本層準 (Fig.35・36)

弥生時代後期後半・中世の自然流路および土坑等を検出した。

調査区中央部の南北セクションで基本層準を観察した。

I～V層は南から北方向に下がる傾斜面堆積である。II・III層は近世以降の遺物包含層である。IV・V層は弥生時代後期後半から中世の遺物を包含する。遺構はIX層上面で検出した。

(2) 検出遺構 (Fig.37～42)

SR7はV層除去後、調査区の中央部を横断する形で検出した東西方向の自然流路である。規模は幅約6m、深さ約0.6mを測り、基底面は東から西に向って下がる。約27mにわたり検出した。西方へは調査区外にのびる。断面を観察する限り、少なくとも2度の流路変更がみられるが平面プランを明確にすることはできなかった。埋土は4層に分層でき、下層からは多くの雑木が出土した。雑木に混じり、187の木錘が完形で出土した。

図示できる遺物は少なく、SR7の時期について明確にはできない。SR7の埋土からは弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と中世の2時期の遺物が出土している。

SR8は調査区西南部で検出した溝状の遺構である。遺構は調査区外へひろがるため、全体の平面プランおよび規模は不明である。土層観察用のセクションベルトを2箇所設定し観察した結果、北側の突出部は南側の突出部に比べ深く、I層を除き埋土も違う。出土遺物から中世(13世紀)の所産と考えられるが、弥生時代後期の遺物が混在した状態で少なからず出土している。特に弥生時代の遺物は南端部においてその傾向が顕著である。

SR9は調査区北西部で検出した自然流路である。幅約2m、深さ0.3mの規模を有し、約9mにわたり検出した。調査区外へは、北東方向へのびるものと考えられるが、第I～第III調査区では検出していない。また、西方向へのびるものがSR7との切り合い関係を明確にすることはできなかった。出土遺物からSR9は13世紀の自然流路であると考えられるが、弥生時代後期の遺物も出土している。SR7を切ると考えられる。

SK1は調査区中央部やや北寄り検出した土坑である。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.85mを測る。基底面及び側面は被熱のため赤色を呈する。埋土には炭層が堆積している。また、周辺から轆の羽口片が出土した。以上のことからSK1は小鍛冶に関連する土坑であると

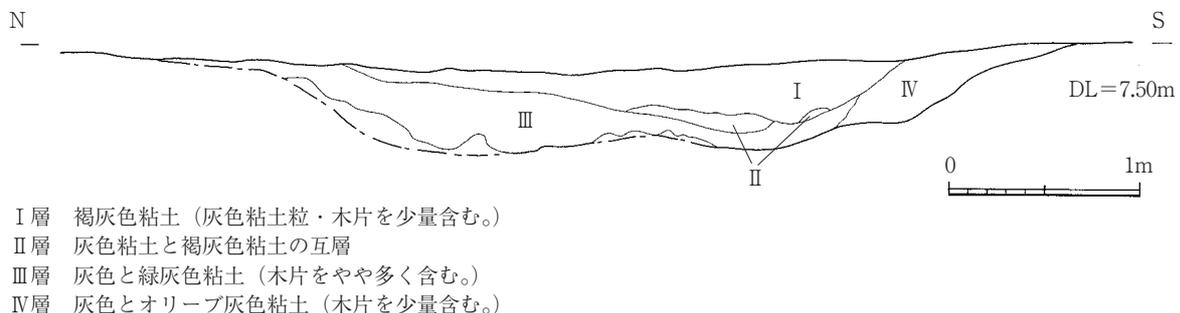


Fig.37 第Ⅳ調査区 SR7断面図

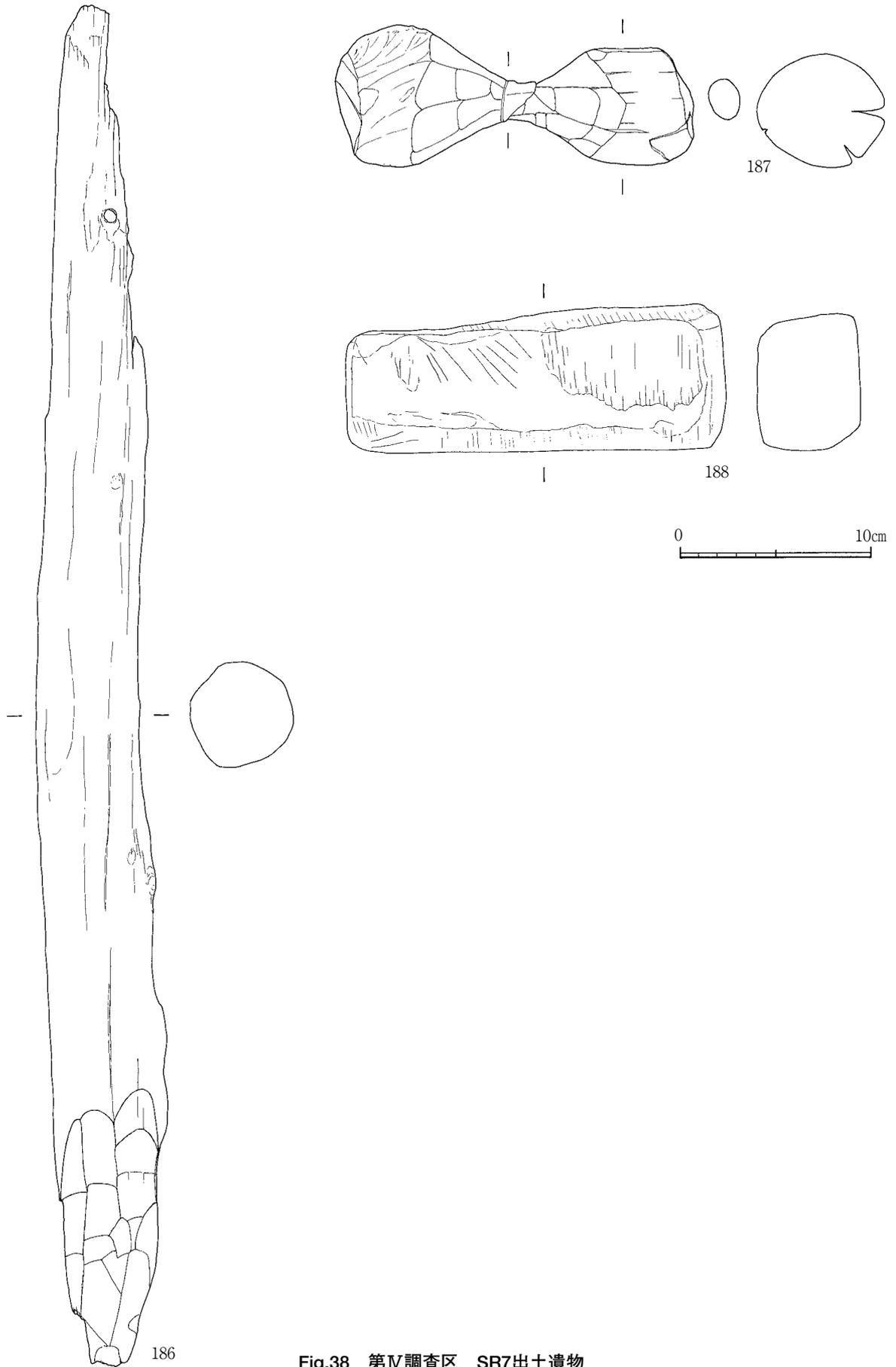


Fig.38 第Ⅳ調査区 SR7出土遺物

考えられる。時期については遺物
 が出土していないため明確では
 ないが、SK1を覆っていたV層から
 白磁等の遺物が出土しているこ
 とから13世紀以降の所産である
 と考えられる。

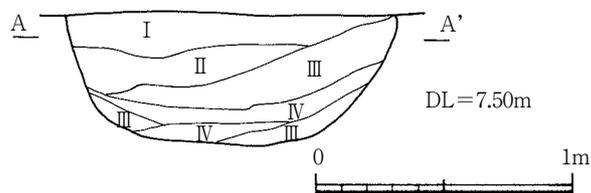
(3) 包含層出土遺物

(Fig.43~45)

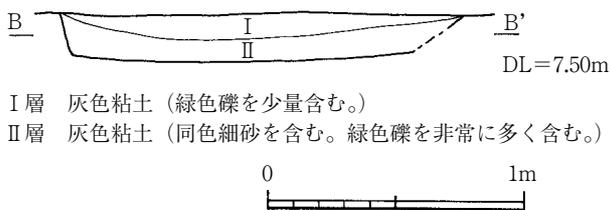
調査区北東部では北東方向へ下
 がる落込み状の自然地形を検出
 した。木製品・土器はほとんどが
 落ち際からの出土である。

203は土師器の甕である。内面
 は主に縦方向のナデ調整である。
 外面はやや間隔が狭い叩き成形
 後、縦方向のハケ調整を施す。
 204は土師器の甕である。体部は
 球形を指向する。丸底である。外
 面の調整は基本的にはハケ調整
 であるが、ハケ原体は数種認め
 られる。内面はハケ調整・ナデ
 調整である。外面には煤が付着
 する。
 207は土師器の甕である。口縁部
 はやや長く、垂直ぎみに立ち上
 がる。体部外面は叩き形成後、
 縦方向のハケ調整後、横方向に
 ナデる。内面は肩部から口縁部
 はやや粗いハケ調整を施す。体
 部はハケ調整後、ナデる。外面
 には煤が付着する。

218は須恵器の杯である。底部
 外面に「東□」と墨書される。図
 示できなかったが周辺から出土
 した土師器にも墨痕が認められ
 た。
 223はフイゴの羽口片である。



- I層 灰色粘土 (緑色礫を少量含む。)
- II層 褐灰色粘土
- III層 青灰色粘土
- IV層 灰色粘土



- I層 灰色粘土 (緑色礫を少量含む。)
- II層 灰色粘土 (同色細砂を含む。緑色礫を非常に多く含む。)

Fig.39 第IV調査区 SR 8 断面図

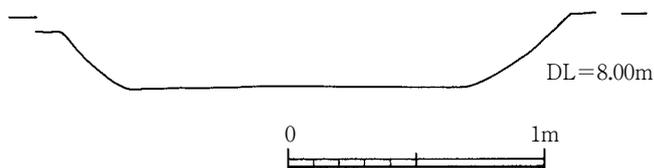
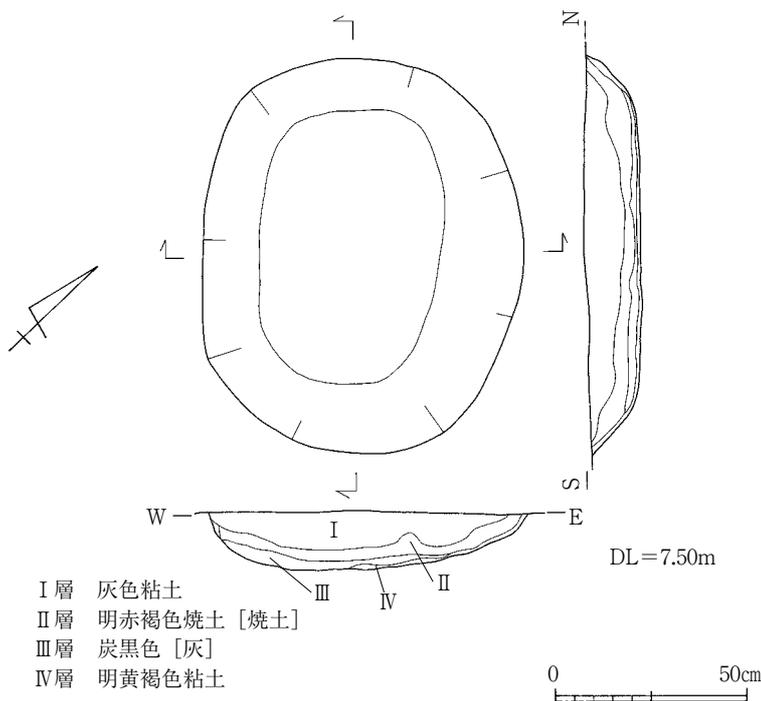


Fig.40 第IV調査区 SR 9 エレベーション図



- I層 灰色粘土
- II層 明赤褐色焼土 [焼土]
- III層 炭黒色 [灰]
- IV層 明黄褐色粘土

Fig.41 第IV調査区 SK 1 平面図・断面図

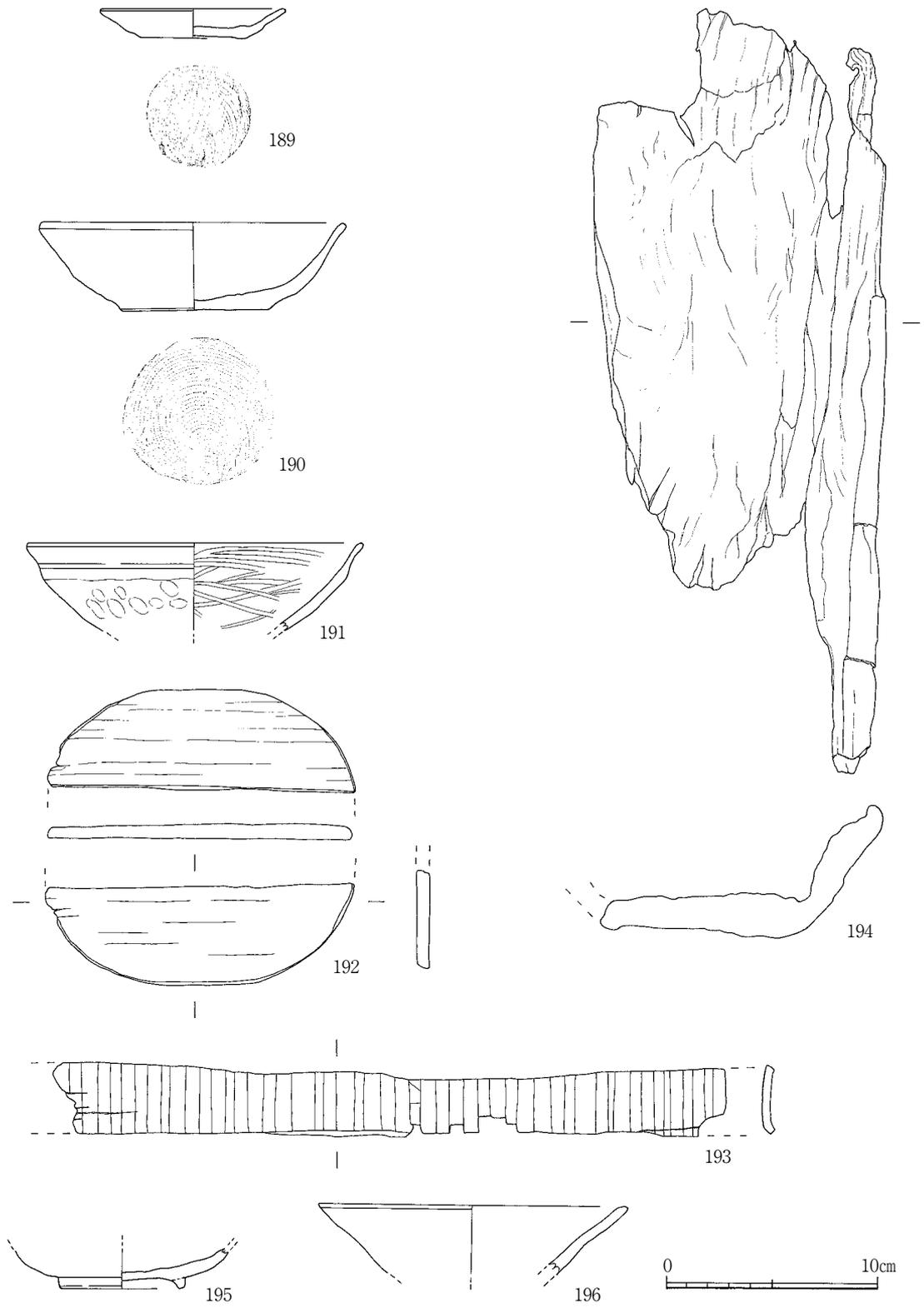


Fig.42 第Ⅳ調査区 SR 8・9 出土遺物

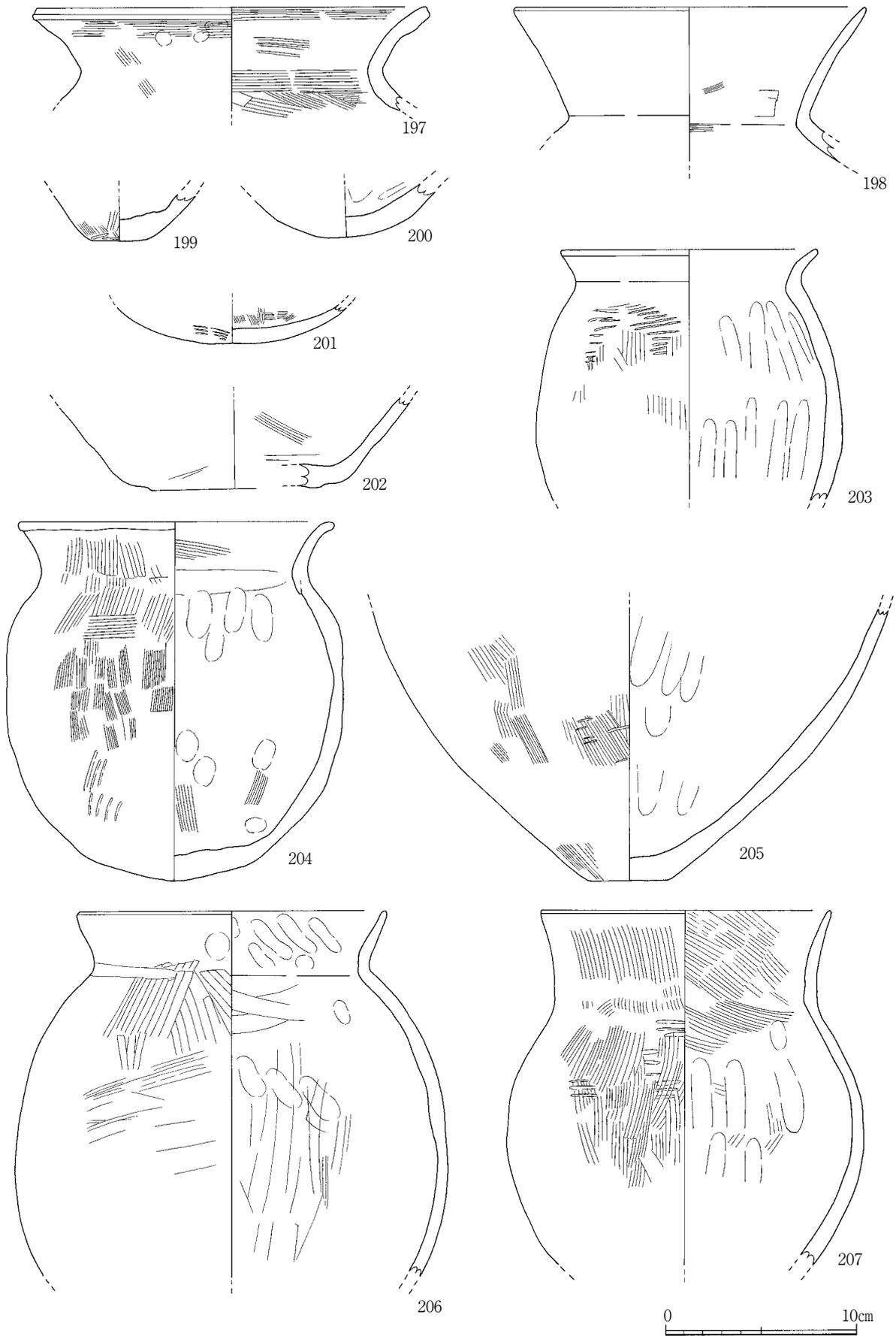


Fig.43 第IV調査区 包含層出土遺物

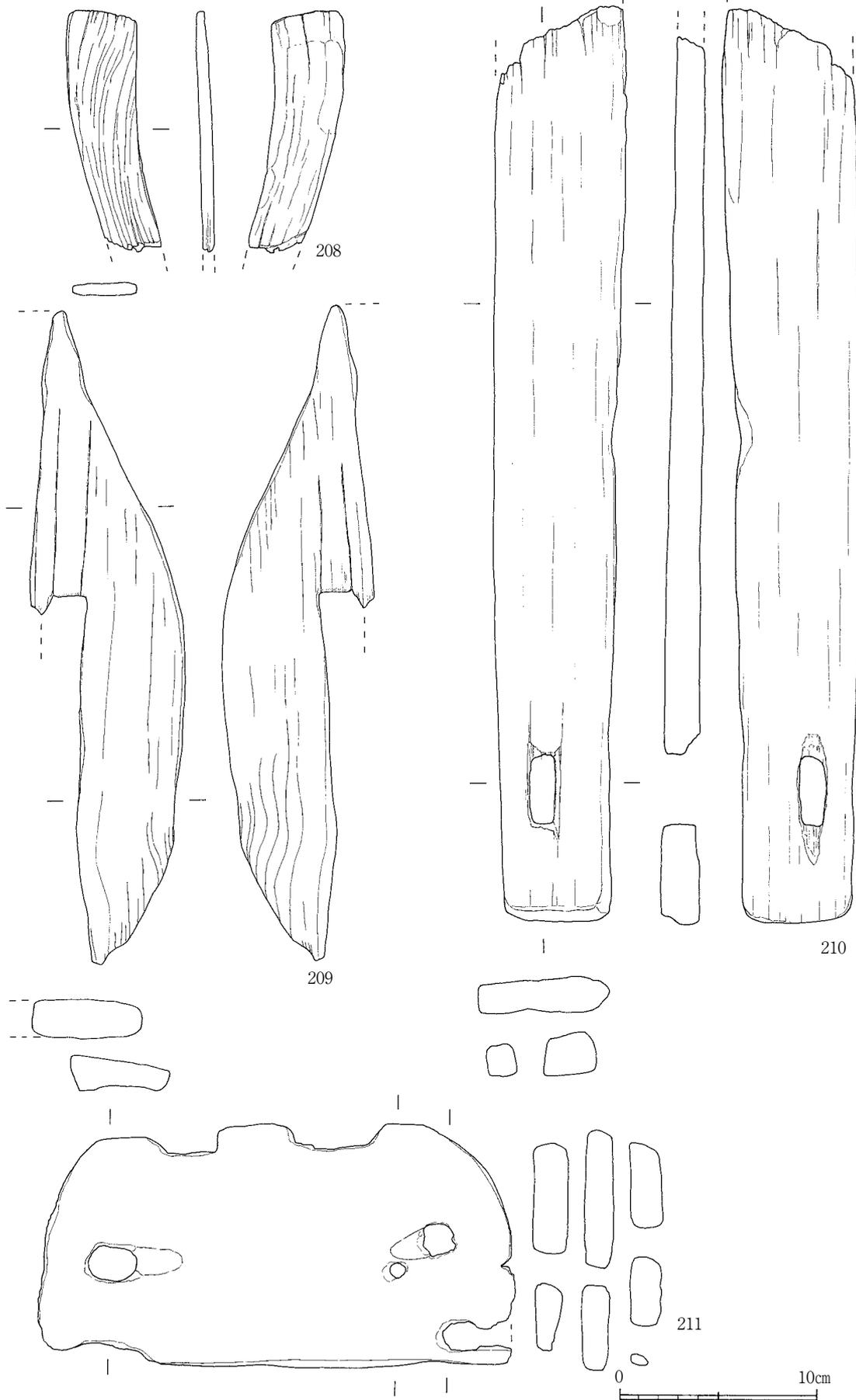


Fig.44 第Ⅳ調査区 落ち込み1・含包層出土遺物

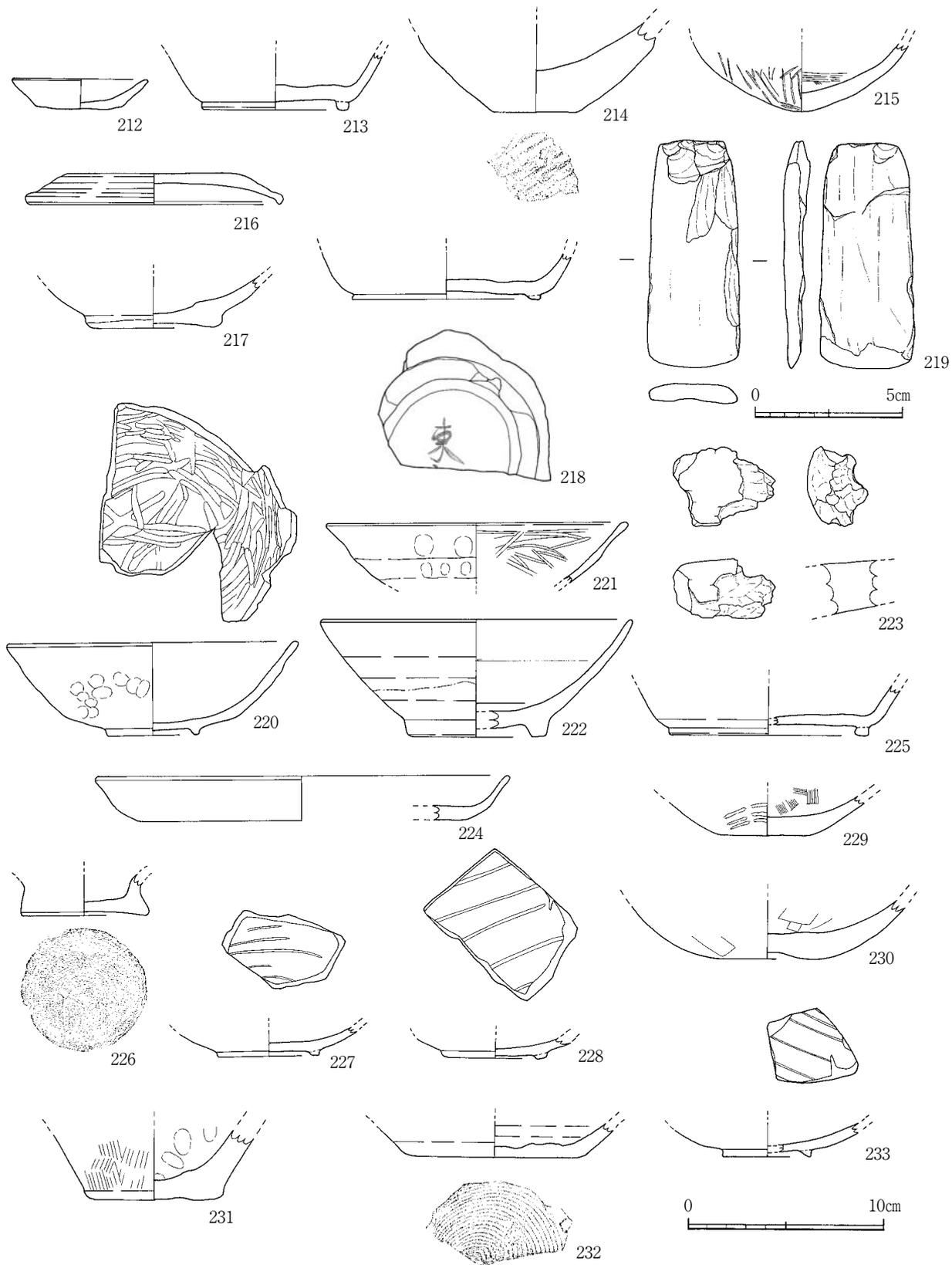


Fig.45 第IV調査区 包含層出土遺物

5. まとめ

(1) 縄文時代

縄文時代後期中葉の伊吹町式土器が出土した。試掘調査でも、1点出土しており、ともに調査区北東部の丘陵直下からの出土である。晩期においては自然流路を1条、ピットを1基検出した。

(2) 弥生時代

弥生時代前期の遺物が比較的多く確認された。木葉文を施した壺の破片が2点出土した。そのうちの1点は無軸の木葉文を施したものであり、県下初例である。また、県内の他地域に先駆け稲作農耕を受容した田村遺跡群に対し、内傾接合・条痕調整など縄文時代的要素を多分に残す深鉢の存在等、周辺部に位置する仁淀川流域の動向を伺うことができる。

中期中葉から後半では自然流路とともに集石遺構が2基検出された。

(3) 古墳時代

弥生時代終末になり、再び遺物が確認されるとともに出土量も多い。遺物は主に自然流路からの出土である。遺構の性格上、明らかに混入と考えられる遺物を除いても、出土遺物の時期には幅がある。出土遺物には畿内産の搬入土器がみられる。また、在地産の甕には内面ヘラケズリが見られる個体がある。また、ナスビ形木製品等の農耕具類・建築部材等の木製品も多く出土した。遺跡の立地等を考慮に入れると低湿地での水田経営を想定しなければならない。

古墳時代中期の遺物には須恵器壺がある。TK73型式段階あるいはさらに遡る可能性がある。高知県内では最古段階に属する。また、祭祀性の強い遺物群を検出した。

(4) 古代

少量の遺物が認められるのみであるが、墨書土器が2点出土した。1点は須恵器杯の底部外面に「東」と墨書される。もう1点は土師器の底部外面に書かれているが、判読不能である。

(5) 中世

焼土坑1基・溝状遺構1条・自然流路2条を検出した。焼土坑の周辺から轆の羽口が出土していることから、鍛冶関連の遺構と考えられる。中世の時期には主に調査区の南半部を主に利用していたようである。また、祭祀に使用されたと考えられる木製品が出土している。

(参考文献)

永井久美男 中世の出土銭 ―出土銭の調査と分類― 兵庫埋蔵銭調査会 1994年

第Ⅳ章 考 察

弥生時代後期終末期から古墳時代前期初頭の搬入土器について

1. はじめに

弥生時代後期終末期から古墳時代前期初頭、汎日本的に各地の土器が活発に動く。高知県下においても複数地域の土器が搬入される。発掘調査の増加により資料が蓄積されつつある状況である。以下では、弥生時代後期終末期から古墳時代前期初頭（後期Ⅲ-2から古式土師器Ⅰ期）の搬入土器を集成してみたい。

2. 搬入土器 (Tab.1 Fig.46)

現在までに高知県では畿内系土器・東阿波型土器・下川津B類土器・吉備型土器が確認されている。

畿内系土器は高知県下では13遺跡18点の甕が出土している。搬入土器のなかでは最も多くの遺跡で確認されている。太平洋に沿う東西に長い分布を示す。窪川町大鶴津⁽¹⁾で出土しており分布の最西端である。また、各小地域の拠点集落だけでなく、竪穴住居数棟で構成される小規模集落にも搬入される。

Tab.1 搬入土器出土遺構

	遺跡名	出土遺構	畿内産 (Fig.47)	東阿波型 (Fig.48)	吉備型 (Fig.49)	下川津B類 (Fig.49)
1	稗地遺跡	ST3	甕1点(3)			
		ST5	甕1点(2)			
2	拝原遺跡	包含層	甕1点(4)	甕1点(1)		
		SD1	体部1点(15)			
3	江見遺跡		甕1点(1)			
4	ひびのき遺跡	A地区ST		二重口縁壺1点(13)		
5	ひびのきサウジ遺跡	ST8				甕1点(8)
6	岩村遺跡群	ST1			鉢1点(1)	
		包含層		高杯1点(12)		
7	五軒屋敷遺跡	ST2	甕1点(8)			
8	小籠遺跡	ST8		甕1点(4)		
		ST13		二重口縁壺1点(11)		
		ST14		二重口縁壺1点(7)・壺1点(5)	甕1点(7)	
		ST15	甕1点(6)	甕1点(2)		
		ST16	甕1点(7)	高杯1点(3)		
		SK113		甕2点(6・10) 二重口縁壺2点(8・9)		
9	西分増井遺跡	ST8	甕4点(10~13)	甕2点(15・16)	甕2点(2・3)	
10	仁ノ遺跡					
11	八田神母谷遺跡	SR1	甕1点			
		包含層	甕1点			
12	馬場末遺跡	土器集中部	甕1点(9)	甕1点(14)		
13	上美都岐遺跡	包含層			甕1点(4)	
14	襟野々遺跡		甕1点(14)			
15	大鶴津遺跡		甕(15)			
16	永田遺跡	ST2	甕1点(17)			
17	松ノ木遺跡	ST10		甕1点(17)	甕2点(5・6)	
18	田島遺跡	ST1	甕1点(16)			

東阿波型土器は8遺跡で確認されている。器種では甕9点、二重口縁壺7点、壺1点、高杯2点である。全出土個数の約70%が小籠遺跡からの出土であり、長岡台地は分布の核になる。その他の地域では比較的規模の大きい拠点集落に搬入される傾向がある。

下川津B類土器はひびのきサウジ遺跡で甕が1点出土しているのみである。また、時期的にも他に先行して搬入される。

吉備型土器は5遺跡で確認されている。甕は6点、鉢は1点確認されている。上美都岐遺跡以外は各地域の拠点集落への搬入がみられる。上美都岐遺跡については当遺跡周辺の岩井口遺跡・二ノ部遺跡等で当該期の住居跡が数棟検出されている。

3. まとめ

以上、高知県下出土の搬入土器を見てきた。幾つかの指摘をしてまとめとしたい。弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭（Ⅲ-2・3期～古式土師器Ⅰ期）にかけての土器の変遷は、器面調整の省略化・土器組成の変化等がみられるが漸進的である。

Ⅲ-2期になると、他地域の土器が搬入される。しかしながら、在地の土器に比較すると圧倒的に搬入土器の数は少ない。また、在地の土器は搬入土器の影響をほとんど受けない。

東阿波型土器・吉備型土器の多くは拠点集落からの出土が目立つ。一方、畿内系土器は集落の規模の大小を問わず搬入される傾向がある。これらは各土器の背景の違いを反映しているものと考えられる。

(註)

(1) 未発表資料であるが、高知県窪川町教育委員会の便宜により実測図を載せることができた。

(2) 庄内式土器・布留式土器・東阿波型土器が出土している。

Fig.47-15以外の実測図は報告書等から転載した。

Fig.47-1・9・14 Fig.48-14 「周辺地域における土師器の様相」

Fig.47-2・3 『稗地遺跡発掘調査報告書』

Fig.47-4・5 Fig.48-1 『拝原遺跡』

Fig.47-6・7 Fig.48-2~11 『小籠遺跡Ⅱ』

Fig.47-8 『五軒屋敷遺跡発掘調査報告』

Fig.47-10~13 Fig.48-15・16 Fig.49-2・3 『西分増井遺跡群発掘調査報告』

Fig.47-16 『田島遺跡』

Fig.47-17 『永田遺跡』

Fig.48-12 Fig.49-1 『岩村遺跡群』

Fig.48-17 Fig.49-5・6 『松ノ木遺跡Ⅳ』

Fig.49-4 『上美都岐遺跡』

Fig.49-8 『ひびのき遺跡』

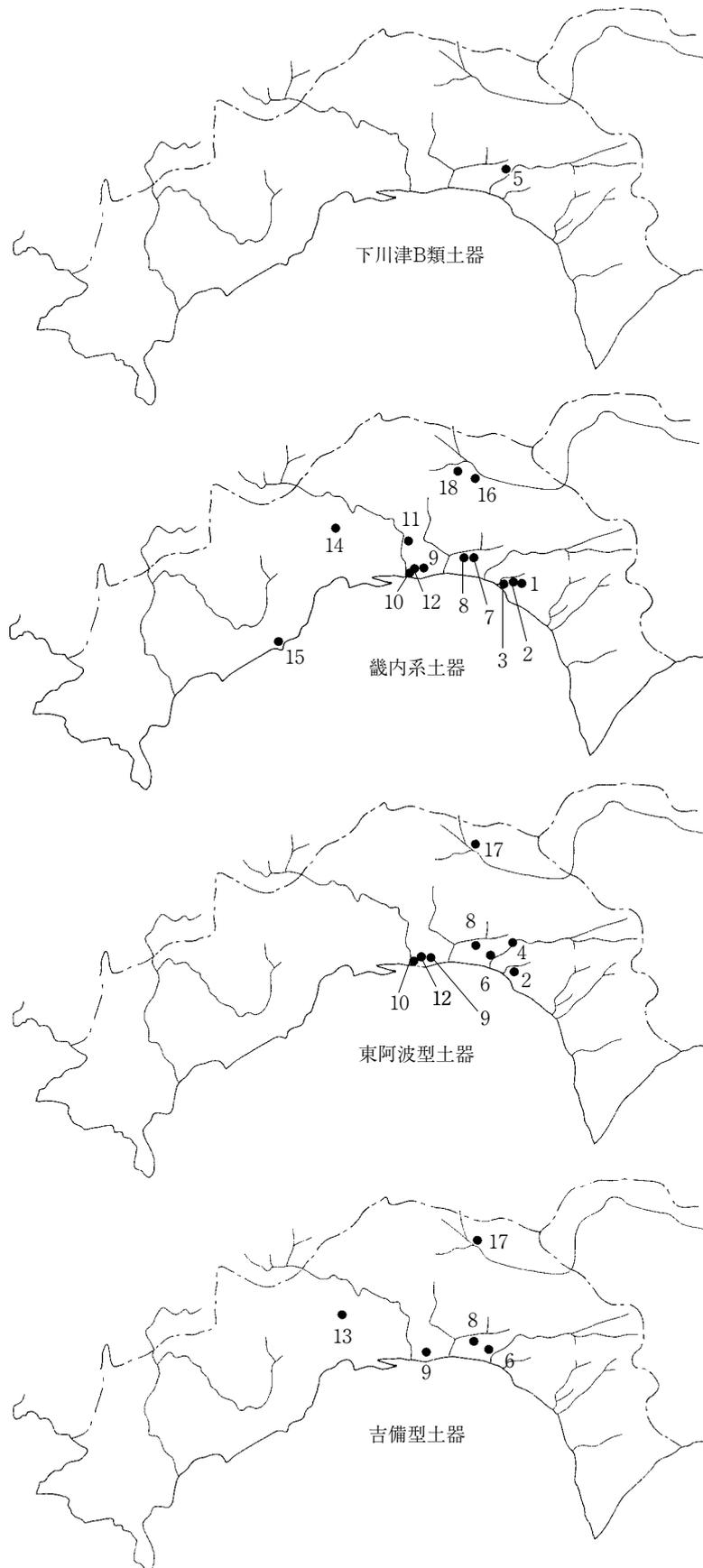
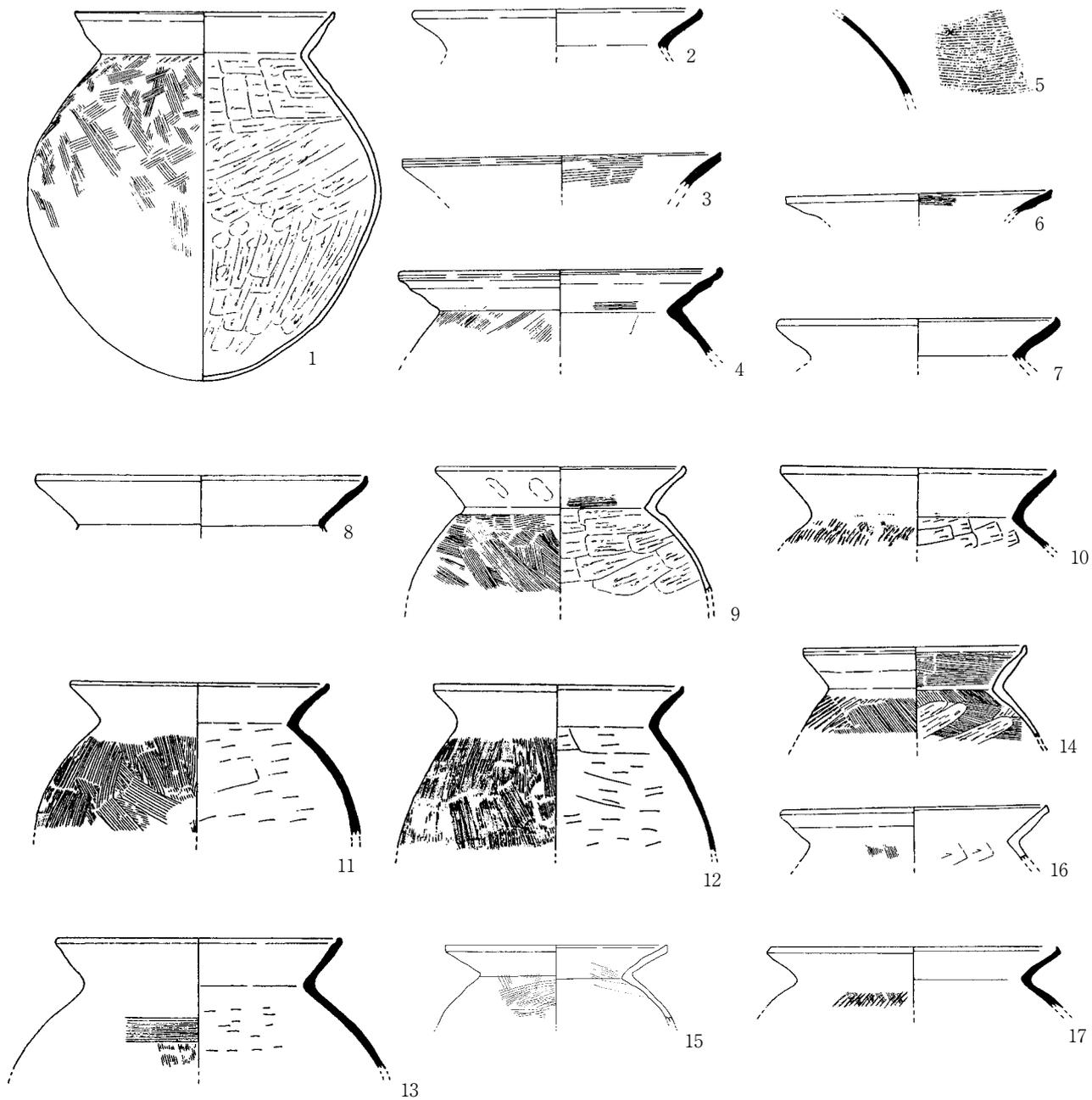


Fig. 46 搬入土器出土遺跡 (遺跡No.はtab. 1 に対応)



1 江見遺跡 2・3 稗地遺跡 4・5 拝原遺跡 6・7 小籠遺跡 8 五軒屋敷遺跡
 9 馬場末遺跡 10~13 西分増井遺跡 14 襟野々遺跡 15 大鶴津遺跡
 16 田畠遺跡 17 永田遺跡

Fig. 47 幾内系土器実測図

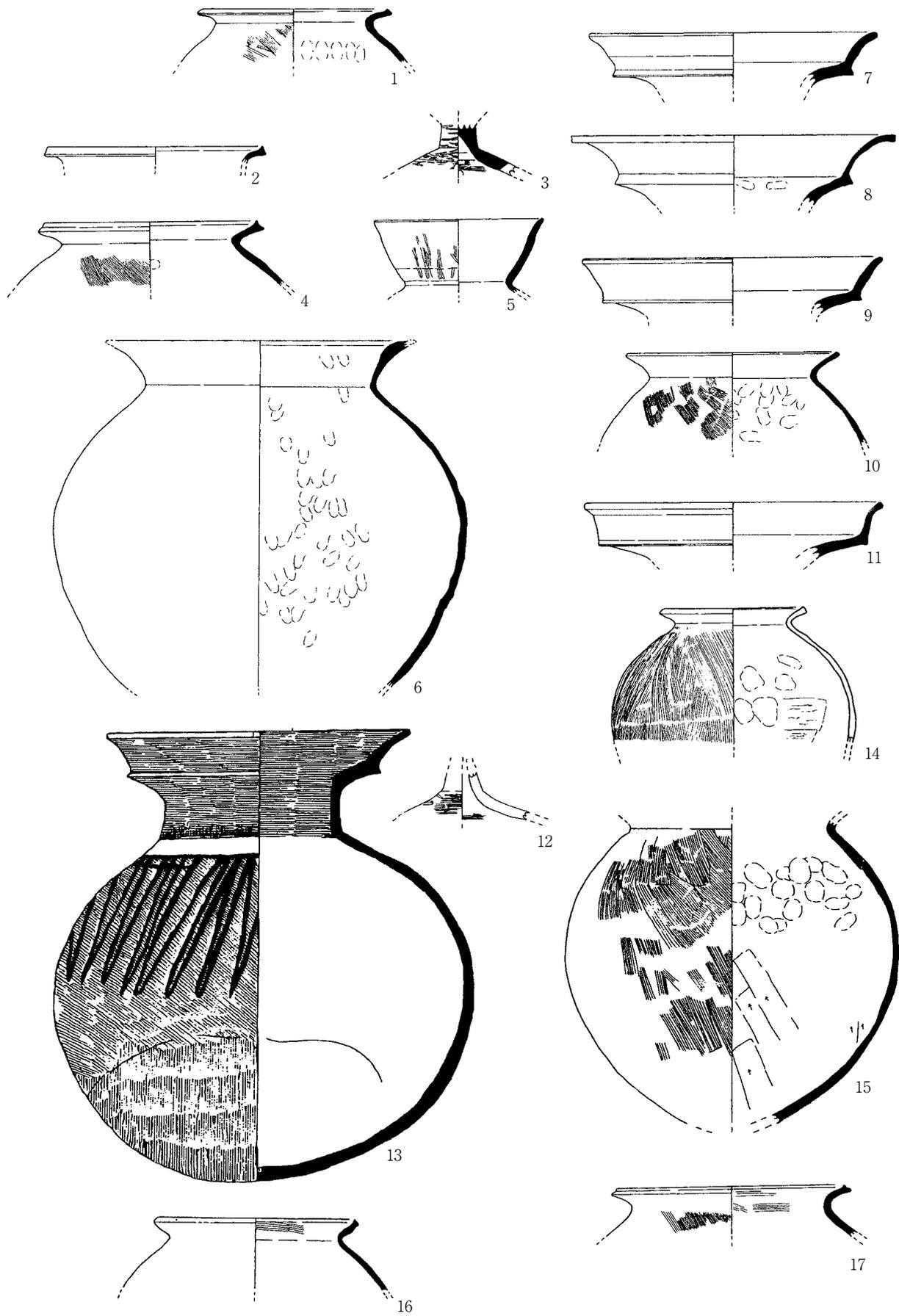


Fig. 48 東阿波型土器実測図



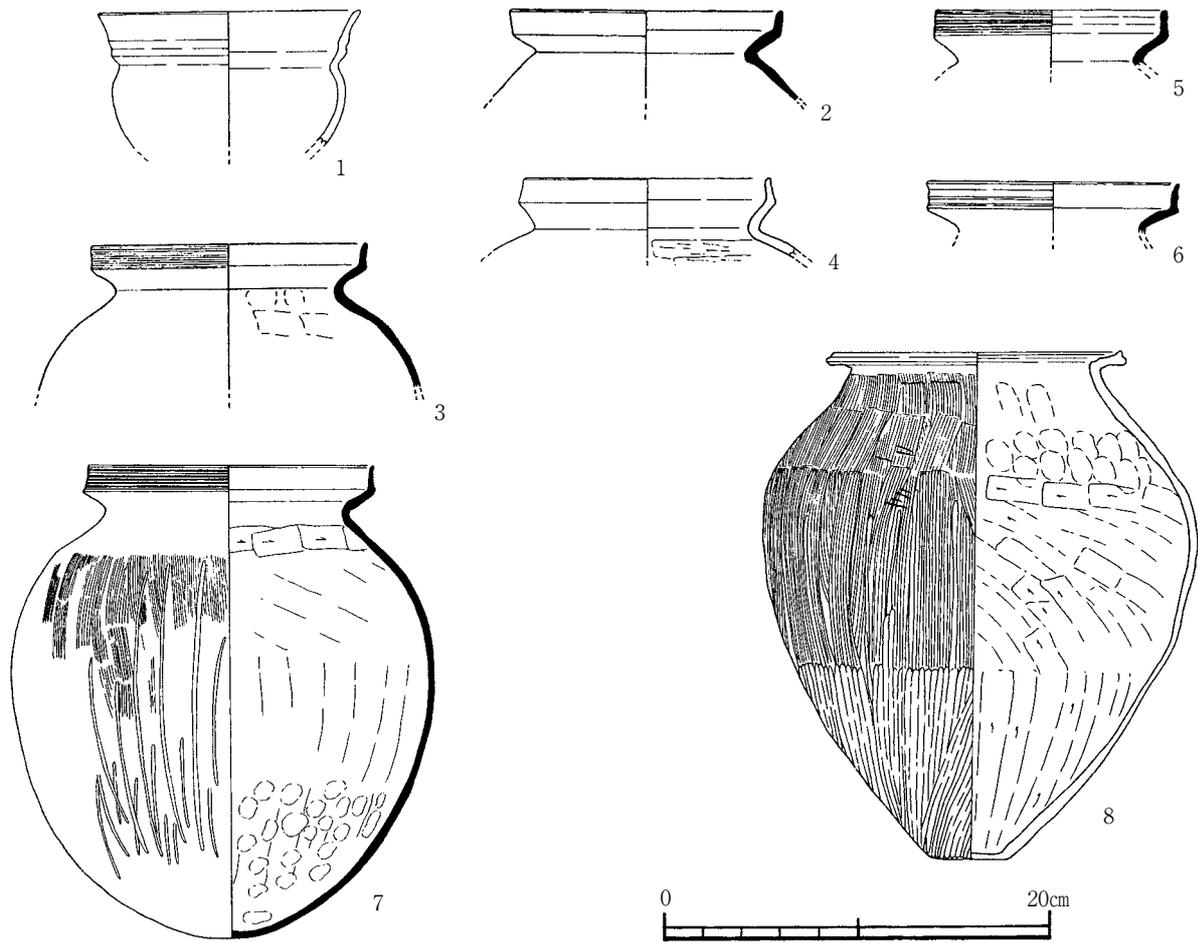


Fig.48-1 拝原遺跡 2~11 小籠遺跡 12 岩村遺跡群
13 ひびのき遺跡 14 馬場末遺跡 15・16 西分増井遺跡 17 松ノ木遺跡

Fig.49-1 岩村遺跡群 2・3 西分増井遺跡 4 上美都岐遺跡 5・6 松ノ木遺跡
7 小籠遺跡 8 ひびのきサウジ遺跡

Fig. 49 吉備型土器・下川津B類土器 (8のみ下川津B類土器) 実測図

参考・引用文献

出原恵三	『堀ノ尻遺跡』	高知県本山町教育委員会	1993年
出原恵三	『松ノ木遺跡Ⅱ』	高知県本山町教育委員会	1991年
出原恵三他	『松ノ木遺跡Ⅳ』	高知県本山町教育委員会	1996年
出原恵三	『西分増井遺跡群発掘調査報告』	高知県春野町教育委員会	1990年
高橋啓明	『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』	高知県土佐山田町教育委員会	1990年
松田知彦	『稗地遺跡発掘調査報告書』	高知県埋蔵文化財センター	1993年
宅間一之他	『五軒屋敷遺跡発掘調査報告』	高知県教育委員会	1984年
三谷民雄他	『岩村遺跡群Ⅱ』	高知県南国市教育委員会	1997年
出原恵三	「土佐」『弥生後期の瀬戸内海』	古代学協会四国支部第10回松山大会資料	1996年
出原恵三	「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向ー」	『考古学研究』第40巻第2号	1993年
出原恵三	「四国出土の吉備型甕」	『古代吉備』第17集	1995年
出原恵三	『拝原遺跡』	高知県教育委員会香我美町教育委員会	1993年
出原恵三	『永田遺跡』	高知県本山町教育委員会	1995年
廣田佳久	「周辺地域における土師器の様相」	『研究紀要 第1号』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	1994年
岡本健児・廣田典夫	『高知県ひびのき遺跡』	土佐山田町教育委員会	1997年
	高知県埋蔵文化財センター年報2	高知県埋蔵文化財センター	1993年
大久保徹也	『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』		
	7・下川津遺跡』		
	「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代 初頭の土器について」		1990年
廣田佳久	『岩井口遺跡二ノ部遺跡・城跡』	高知県佐川町教育委員会	1995年
廣田佳久	『岩井口遺跡Ⅱ』	高知県佐川町教育委員会	1995年
廣田佳久	『上美都岐遺跡』	高知県佐川町教育委員会	1997年

土器観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
7	1	SD1	弥生土器 鉢	12.8	5.3	—	内面ハケ調整。	
〃	2	SD1	弥生土器 鉢	12.2	5.5	—	内面ハケ調整。	
〃	3	SD1	弥生土器 鉢	(16.4)	(7.9)	—	外面叩き成形後、縦ハケ調整。	
〃	4	SD1	弥生土器 高杯	(17.6)	—	—	内外面ハケ調整。赤色チャート含む。	
〃	5	SD1	弥生土器 高杯	—	—	12.0	脚柱部内面ヘラ削り。	
〃	6	SD1	弥生土器 高杯	—	—	(12.4)	脚柱部内面ヘラ削り調整。	
〃	7	SD1	弥生土器 甕	(11.8)	—	—	内外面ハケ調整。	
〃	8	SD1	古式土師器 甕	(16.0)	—	—	内面ヘラ削り調整。	畿内産。外面煤付着。
〃	9	SD1	弥生土器 甕	(19.3)	—	—	口縁部内面ハケ調整。	外面煤付着。
〃	10	SD1	弥生土器 甕	(22.8)	—	—	内外面ハケ調整。	
〃	11	SD1	弥生土器 甕	(12.0)	—	—	体部外面叩き成形後縦ハケ調整。内面ハケ調整。	外面煤付着。
〃	12	SD1	弥生土器 底部	—	—	5.8		
〃	13	SD1	弥生土器 底部	—	—	1.8	外面叩き成形後縦ハケ。内面粗いハケ調整。	
〃	14	SD1	弥生土器 底部	—	—	4.4	外面叩き成形。内面粗いハケ調整。	
〃	15	SD1	弥生土器 底部	—	—	(3.7)	内外面ハケ調整。	
〃	16	SD1	弥生土器 底部	—	—	(3.0)	外面叩き成形後ハケ調整。内面ハケ調整。	
〃	17	SD1	弥生土器 底部	—	—	—	外面叩き成形後粗い縦ハケ調整。内面ハケ調整。	
〃	18	SD1	弥生土器 甕	(14.6)	—	—		
〃	19	包含層	弥生土器 底部	—	—	(10.6)		
8	20	SD1	弥生土器 甕	(15.2)	—	—	外面叩き成形後粗い縦ハケ調整。内面ハケ調整。	
〃	21	SD1	土師器 甕	(17.4)	—	—	外面叩き成形後ハケ調整。内面粗いハケ調整。	
〃	22	SD1	土師器 甕	(18.4)	—	—	外面ハケ調整。胴部内面上半ハケ調整、下半ナデ調整。	外面煤付着。
〃	23	SD1	土師器 甕	(16.0)	—	—	外面ハケ・ナデ調整。内面横位のヘラ削り調整。	外面煤付着。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
8	24	SD1	土師器 甕	(16.8)	—	—	外面ハケ・ナデ調整。内面ナデ調整。	外面煤付着？。
〃	25	SD1	土師器 甕	(14.6)	24.5	—	外面叩き成形後未調整。内面ナデ調整。	外面煤付着。
9	26	SD1	縄文土器 浅鉢	—	—	—	波状口縁。	混入。
〃	27	SD1	弥生土器 甕	(26.7)	—	—	外面叩き成形後ハケ調整。口縁部叩き出し技法。内面ハケ調整。	
〃	28	SD1	弥生土器 甕	(20.8)	18.2	7.2	如意状口縁。口唇部に刻目を施す。上胴部ヘラ描き沈線を施す。外面ハケ調整。	混入。
12	32	SD2	弥生土器 壺	—	—	—	微隆起突帯を貼付。櫛描き直線文・円形浮文を施す。	
〃	33	SD2	弥生土器 底部	—	—	(5.0)		
〃	34	SD2	弥生土器 底部	—	—	(5.8)		
〃	35	SD2	弥生土器 底部	—	—	(7.6)	内外面ミガキ調整。	
〃	36	SD2	弥生土器 底部	—	—	(8.0)	外面ミガキ調整。	
〃	37	SD2	弥生土器 底部	—	—	(10.4)	内外面ミガキ調整。	
〃	38	SD2	縄文土器 深鉢	—	—	—	外面条痕文を施す。口唇部に刻目を施す。刻目突帯を貼付。	
16	44	SD4	縄文土器 深鉢	—	—	—	口唇部に刻目を施す。	
17	45	包含層	弥生土器 底部	—	—	9.0	内外面ハケ調整。	
〃	46	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	微隆起突帯を貼付。	
〃	47	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	ヘラ描き沈線を施す。	
〃	48	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面ミガキ調整後木葉文を施す。	煤付着。
〃	49	包含層	弥生土器 底部	—	—	5.6		
〃	50	包含層	弥生土器 底部	—	—	(9.2)		
〃	51	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面ミガキ調整後ヘラ描き直線文を施す。内面ミガキ・ハケ調整。	
〃	52	包含層	土師器 甕	(14.8)	—	—	外面ヘラナデ調整。内面ヘラ削り調整。	
〃	53	包含層	弥生土器 底部	—	—	—	外面叩き成形後縦ハケ調整。	
〃	54	包含層	弥生土器 甕	(22.4)	—	—	口唇部に刻目を施す。上胴部にヘラ描き沈線を施す。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
17	55	包含層	弥生土器 底部	—	—	9.6	外面ハケ調整。	
〃	56	包含層	深鉢	(38.2)	—	—		
〃	57	包含層	深鉢	—	—	—		
〃	58	包含層	深鉢	—	—	—		
18	59	包含層	縄文土器 深鉢	—	—	—	外面条痕調整。	
〃	60	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	口唇部に刻目を施す。刻目突帯を貼付する。	
〃	61	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	口唇部に刻目を施す。突帯を貼付する。	
〃	62	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	口唇部に刻目を施す。刻目突帯を貼付する。	
〃	63	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	如意状口縁。口唇部に刻目を施す。	
〃	64	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	如意状口縁。口唇部に刻目を施す。内面ハケ調整。	
〃	65	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面ミガキ調整後木葉文を施す。	
〃	66	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面櫛描き直線文を施す。	
〃	67	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面微隆起突帯を貼付。櫛描き波状文を施す。双線による斜格子文を施す。	
〃	68	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面櫛描き波状文を施す。	
〃	69	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	外面櫛描き直線文・波状文を施す。	
〃	70	包含層	弥生土器 甕	(12.2)	—	—	外面叩き成形後縦ハケ調整。内面ハケ調整。	
〃	71	包含層	土師器 甕	(26.4)	—	—		
〃	72	包含層	縄文土器 深鉢	—	—	—	外面沈線を施す。	
〃	73	包含層	縄文土器 深鉢	—	—	—	外面条痕調整。	
〃	74	包含層	土師質土器 椀	—	—	6.6	底部外面糸切り未調整。	
20	78	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	微隆起突帯を貼付。櫛描き波状文を施す。	
〃	79	包含層	手捏ね土器	7.4	5.1	1.6		
〃	80	包含層	小型丸底壺	8.4	—	—		

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
20	81	包含層	土師器 鉢	—	—	—		
〃	82	包含層	土師器 壺	9.8	13.7	—	胴部外面下半ヘラ削り調整、上半ナデ調整。	
〃	83	包含層	土師器 壺	—	—	4.0		
〃	84	包含層	弥生土器 壺	(13.4)	—	—	口縁部に円孔あり。	
〃	85	包含層	弥生土器 高杯	(14.2)	—	—	内外面ハケナデ調整。	
〃	86	包含層	弥生土器 高杯	(21.6)	—	—		
〃	87	包含層	弥生土器 高杯	(16.0)	—	—	外面ハケナデ調整。	
〃	88	包含層	弥生土器 高杯	—	—	11.0	脚柱部内面ヘラ削り調整。	
〃	89	包含層	弥生土器 高杯	(14.9)	13.3	10.4	杯部外面ハケナデ調整。脚柱部内面ナデ調整。	
〃	90	包含層	土師器 甕	(13.8)	—	—	口縁部内面ハケ調整。肩部内面ヘラ削り調整。	
〃	91	包含層	土師器 甕	(17.0)	—	—	外面叩き成形後未調整。口縁部叩き出し技法。	
〃	92	包含層	弥生土器 底部	—	—	5.5	外面叩き成形後未調整。内面ハケ調整。	
〃	93	包含層	土師器 甕	(19.8)	—	—	口縁部内外面ハケナデ調整。肩部内面ヘラ削り調整。	
21	94	包含層	弥生土器 壺	(21.0)	—	—		
〃	95	包含層	弥生土器 甕	(15.8)	25.6	(3.4)	平底。体部外面叩き成形後縦ハケ調整。	
〃	96	包含層	須恵器 蓋	(11.0)	2.7	—	擬宝珠様つまみ上面にヘラ記号あり。外面に自然釉がかかる。	
〃	97	包含層	須恵器 杯	—	—	8.8		
〃	98	包含層	須恵器 杯	(10.8)	3.6	—	体部外面に自然釉がかかる。	
〃	99	包含層	須恵器 高杯	—	—	(9.8)		
〃	100	包含層	土師質土器 椀	—	—	7.1		
〃	101	包含層	須恵器 平瓶	—	—	—	自然釉がかかる。	
〃	102	包含層	須恵器 甕	17.4	23.8	—	内外面丁寧なナデ調整。底部付近に三ヶ所にヘラ記号あり。	
〃	103	包含層	土師器 甕	(15.4)	—	—	頸部内面ヘラ削り調整。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
21	104	包含層	須恵器 杯蓋	(12.0)	—	—		
〃	105	包含層	土師質土器 椀	—	—	—		
〃	106	包含層	白磁 椀	—	—	—		
〃	107	包含層	土師器 杯	(12.8)	—	—		
22	108	包含層	手捏ね土器	4.3	4.8	—	底部外面に黒斑あり。	
〃	109	包含層	小型丸底壺	(8.0)	—	—		
〃	110	包含層	小型丸底壺	—	—	—	底部外面ヘラ削り調整。	
〃	111	包含層	小型丸底壺	—	—	—	底部外面に黒斑あり。	
〃	112	包含層	小型丸底壺	(7.0)	9.9	—	底部外面に黒斑あり。	
〃	113	包含層	小型丸底壺	7.9	8.6	—	底部外面に黒斑あり。底部外面に木葉痕あり。	
〃	114	包含層	小型丸底壺	7.9	8.2	—	内面体部に黒斑あり。	
〃	115	包含層	小型甕	(8.6)	9.0	3.7	外面叩き成形後、ナデ調整。	
〃	116	包含層	土師器 壺	—	—	—		
〃	117	包含層	土師器 甕	13.8	—	—	体部内面ヘラ削り調整。	畿内産。外面煤付着。
〃	118	包含層	弥生土器 甕	(12.2)	—	—	外面叩き成形後、縦ハケ調整。内面ハケ調整後、ナデ調整。	外面煤付着。
〃	119	包含層	弥生土器 高杯	(23.2)	—	—	内面ミガキ調整。	
〃	120	包含層	弥生土器 甕	(15.6)	24.5	3.0	外面叩き成形後、縦ハケ調整。内面ハケ調整後、ナデ調整。	
〃	121	包含層	土師器 甕	22.6	24.2	—	外面ハケ・ハケナデ調整。内面ヘラ削り調整。	
23	122	包含層	土師器 複合口縁甕	(17.2)	—	—	外面ナデ調整。内面ヘラ削り調整。	
〃	123	包含層	弥生土器 底部	—	—	2.3	外面叩き成形後、縦ハケ調整。	
〃	124	包含層	弥生土器 鉢	(14.0)	—	2.7	外面叩き成形後、底部付近ハケ調整。内面ハケ調整。	
〃	125	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	口唇部に刻目。	
〃	126	包含層	土師器 壺	(10.6)	—	14.0	底部外面に黒斑あり。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
23	127	包含層	小型丸底壺	8.4	9.6	—		
〃	128	包含層	弥生土器 高杯	17.5	13.6	—	脚柱内面へラ削り調整。	
〃	129	包含層	弥生土器 高杯	—	—	—		
〃	130	包含層	弥生土器 高杯	—	—	7.8	脚柱実である。	
〃	131	包含層	弥生土器 高杯	—	—	—		
24	132	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	口縁部内外面ハケ調整。	
〃	133	包含層	弥生土器 壺	(14.6)	—	—	微隆起突帯が二条巡る。	
〃	134	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	口縁端部に粘土帯を貼付し、沈線を施す。 口縁部に円形浮文を貼付する。	
〃	135	包含層	弥生土器 壺	(19.4)	—	—		
〃	136	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	円形浮文を貼付する。	
〃	137	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	棒状浮文を貼付する。	
〃	138	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	円形浮文を貼付する。	
〃	139	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	微隆起突帯・円形浮文を貼付する。	
〃	140	包含層	弥生土器 壺	—	—	—	微隆起突帯を貼付する。	
〃	141	包含層	弥生土器 甕	(13.0)	—	—	外面叩き成形後、未調整。口縁叩き出し 技法。内面ハケ調整。	
〃	142	包含層	土師器 甕	(15.2)	—	—		
〃	143	包含層	弥生土器 甕	(14.4)	—	—	口縁端部をつまみ上げる。口縁部を強く ナデる。	外面煤付着。
〃	144	包含層	弥生土器 甕	(12.8)	—	—	口縁端部は丸くおさめる。体部外面ハケ 調整。	外面煤付着。
〃	145	包含層	弥生土器 底部	—	—	—		
〃	146	包含層	弥生土器 鉢	(22.6)	—	—	口縁端部は面をなす。内外面はハケ調整。 外面黒斑あり。	
〃	147	包含層	縄文土器 浅鉢	(26.0)	—	—	内外面ミガキ調整。	
〃	148	包含層	縄文土器 浅鉢	(26.0)	—	—	内外面ミガキ調整。	
25	149	包含層	縄文土器 深鉢	(27.4)	—	—	口唇部に刻目を施す。外面条痕調整。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
28	161	Ⅲ層	椀	—	—	6.4	底部外面糸切り未調整。	
〃	162	Ⅵ層	土師質土器 杯	—	—	6.8		
〃	163	Ⅳ層	土師質土器 杯	(14.6)	4.8	(9.1)		
〃	164	Ⅳ層	土師質土器 椀	—	—	(4.8)	底部外面糸切り未調整。	
〃	165	Ⅵ層	須恵器 杯	(14.0)	3.6	—	底部外面ヘラ切り後、ナデ調整。	
〃	166	Ⅵ層	土師器 鍋	(30.0)	—	—		
〃	167	Ⅶ層	小型丸底壺	8.0	7.2	—	体部外面黒斑あり。	
〃	168	Ⅶ層	土師器 甕	(14.6)	—	—		外面煤付着。
〃	169	Ⅸ層	弥生土器 壺	—	—	—	貼付口縁。口唇部に刻目を施す。	
〃	170	Ⅶ層	弥生土器 甕	(14.2)	—	—	口縁端部は面を成す。体部外面叩き成形後、未調整。体部内面ハケ調整後、ナデ調整。	外面煤付着。
〃	171	Ⅺ層	弥生土器 甕	(20.6)	—	—	口唇部に刻目を施す。口縁部に刻目突帯を貼付する。	外面煤付着。
〃	172	Ⅸ層	弥生土器 甕	—	—	—	微隆起突帯を二条貼付する。	外面煤付着。
〃	173	Ⅸ層	弥生土器 甕	—	—	—	微隆起突帯・円形浮文を貼付する。沈線を施す。	外面煤付着。
〃	175	Ⅻ層	縄文土器 深鉢	—	—	—		
42	189	SR8	土師質土器 皿	8.5	1.4	4.8	底部外面糸切り未調整。	
〃	190	SR8	土師質土器 杯	15.0	4.2	6.8	底部外面糸切り未調整。	
〃	191	SR8	瓦器 椀	(15.6)	—	—	内面に暗文を施す。	上層の包含層出土の可能性ある。
〃	195	包含層	土師質土器 椀	—	—	5.6		
〃	196	SR9	土師質土器 杯	(14.4)	—	—		
43	197	落ち込み	弥生土器 甕	(20.1)	—	—	口唇部は面を成す。	外面煤付着。
〃	198	落ち込み	弥生土器 壺	18.0	—	—		
〃	199	落ち込み	弥生土器 底部	—	—	2.4	被熱赤変。	
〃	200	落ち込み	弥生土器 底部	—	—	—		

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
43	201	落ち込み	弥生土器 底部	—	—	—		
々	202	落ち込み	弥生土器 底部	—	—	(8.8)		
々	203	落ち込み	弥生土器 甕	14.0	—	—	体部外面叩き成形後、縦ハケ調整。体部内面ナデ調整。被熱赤変。	
々	204	落ち込み	土師器 甕	16.0	18.5	—	外面ハケ調整。	外面煤付着。
々	205	落ち込み	弥生土器 底部	—	—	(4.0)	外面叩き成形後、縦ハケ調整。	外面煤付着。
々	206	落ち込み	土師器 甕	(15.8)	—	—	体部外面非常に粗いハケ調整。体部内面ヘラ削り調整。	外面煤付着。
々	207	落ち込み	弥生土器 甕	14.8	—	—	体部外面叩き成形後、縦ハケ調整。内面ハケ調整。	外面煤付着。
45	212	Ⅱ層	土師質土器 皿	(6.6)	1.6	4.4		
々	213	Ⅱ層	須恵器 杯	—	—	7.2		
々	214	Ⅲ層	弥生土器 甕	—	—	4.2	底部外面叩き目が残る。	
々	215	Ⅲ層	弥生土器 甕	—	—	—	丸底。叩目が明瞭に残る。	
々	216	Ⅲ層	須恵器 蓋	(12.6)	1.6	—	内面天井部は磨かれており、転用硯の可能性はある。墨痕は認められない。	
々	217	Ⅲ層	土師質土器 杯	—	—	6.0		
々	218	Ⅲ層	須恵器 杯	—	—	—		墨書土器。
々	220	Ⅳ層	瓦器 椀	(14.3)	4.7	4.6	断面台形の高台を貼りつける。	
々	221	Ⅴ層	瓦器 椀	15.0	—	—		
々	222	Ⅲ層	白磁 椀	—	6.0	5.6	見込みに砂目跡あり。	
々	224	Ⅲ層	須恵器 皿	—	2.3	16.6		
々	225	Ⅶ層	須恵器 杯	—	—	(9.9)		
々	226	Ⅷ層	土師質土器 杯	—	—	6.4	底部外面糸切り未調整。	
々	227	Ⅶ層	瓦器 椀	—	—	(5.1)	断面台形の高台を貼りつける。	
々	228	Ⅲ層	瓦器 椀	—	—	(4.8)	断面台形の高台を貼りつける。	
々	229	包含層	弥生土器 甕	—	—	4.0	外面叩き成形後、未調整。内面ハケ調整。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口径	器高	底径		
45	230	包含層	弥生土器 甕壺	—	—	5.6	上げ底。内外面ハケ調整。	
ク	231	落ち込み	弥生土器 甕壺	—	—	6.0	外面ハケ調整。角礫含む。被熱赤変。	
ク	232	Ⅲ層	土師質土器 杯	—	—	8.0	底部外面糸切り未調整。	
ク	233	包含層	瓦器 椀	—	—	(4.4)	断面三角形の高台を貼りつける。	

石器・土製品観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品 種	法量 (cm、g)				材 質	特 徴
				全長	全幅	全厚	重量		
9	29	SD1	叩石	11.6	9.6	2.7	447.2	石英粗面岩	両面にこう打痕あり。側面にも使用今あり。
ク	30	SD1	石包丁	—	—	—	—	粘板岩	直線刃、片刃。背部は湾曲。
ク	31	SD1	石庖丁	(5.0)	3.6	0.3	—	粘板岩	直線刃、片刃。背部は湾曲。
12	39	SD2	叩石	10.7	8.9	3.3	477.6	石英粗面岩	両面にこう打痕あり。
ク	40	SD2	石斧	4.8	1.6	0.5	6.6	頁岩	自然石を利用。
ク	41	SD2	石鏃	2.3	1.6	0.3	1.0	サヌカイト	凹基無茎式。
ク	42	SD2	石鏃	2.1	1.0	0.2	0.8	サヌカイト	平基無茎式。
13	43	集石遺構1	石鏃	3.3	1.7	0.4	2.3	サヌカイト	平基無茎式。
25	150	包含層	石庖丁	(4.5)	3.7	0.7	(12.6)	粘板岩	直線刃、片刃。大部分が欠損。
25	151	包含層	石庖丁	(7.3)	(3.0)	0.7	16.7	頁岩	直線刃、片刃。大部分が欠損。
26	154	包含層	石鏃	(1.3)	1.1	0.5	(0.7)	サヌカイト	凹基無茎式。先端部を欠損。
ク	155	包含層	石鏃	2.4	1.4	0.2	0.6	サヌカイト	凸基無茎式。
ク	156	包含層	石鏃	3.1	1.5	0.5	2.2	粘板岩	凹基無茎式。
26	157	包含層	石斧	4.9	3.4	0.8	29.9	長塩基成岩	扁平片刃石斧。
ク	158	包含層	石斧	3.8	1.7	0.6	5.0	みかぶ緑色岩類	自然石を利用し刃をつける。一側面のみ加工。
28	174	包含層	石鏃	2.8	1.6	0.4	2.2	サヌカイト	平基無茎式。
29	176	VIII層	石庖丁	(2.8)	4.7	0.7	(12.8)	緑色片岩	外湾刃、片刃。大部分が欠損。
ク	177	XI層	石斧	(9.3)	5.3	2.7	243	みかぶ緑色岩類	蛤刃石斧。大部分を欠損。
45	219	包含層	石斧	7.8	3.0	0.5	33.4	みかぶ緑色岩類	扁平片刃石斧。
18	75	包含層	土錘	5.0	1.6	—	10.8		
45	223	IV層	羽口	—	—	—	—		

出土古銭計測表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	銭種	分類	初鑄年	銭径 (cm, g)			
						外径	内径	銭厚	重さ
18	76	包含層	天聖元寶	宋銭	1023	2.5	2.1	0.1	2.7
〃	77	包含層	景祐元寶	宋銭	1034	—	2.0	0.1	1.5

キセル計測表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	種別	a	b	c	d	e	f
28	159	Ⅱ層	煙管雁首	6.2	2.0	1.7	1.1	—	—
〃	160	Ⅱ層	煙管吸口	—	—	—	—	5.9	0.4

木製品観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	品種	法量 (cm, g)		
				全長 (長径)	全幅 (短径)	全厚
25	152	包含層	鋤	29.3	13.2	1.0
〃	153	包含層	不明木製品	67.2	4.5	1.0
29	178	Ⅳ層	不明木製品	(21.2)	2.6	1.1
30	179	Ⅶ層	不明木製品	(57.8)	7.8	1.1
〃	180	Ⅶ層	田下駄	61.5	8.8	1.3
31	181	Ⅶ層	田下駄	61.1	16.1	1.1
32	182	Ⅷ層	不明木製品	64.0	13.2	1.0
33	183	Ⅶ層	ナスビ形木製品	(47.3)	(7.9)	1.3
〃	184	Ⅷ層	建築部材	111.0	12.8	2.8
34	185	Ⅶ層	ナスビ形木製品	66.1	16.9	1.6
38	186	SR7	杭	(70.2)	5.3	5.5
〃	187	SR7	木錘	18.8	6.0	6.6
〃	188	SR7	不明木製品	19.7	7.2	5.3
42	192	SR8	曲物 (円形板)	14.5	(4.6)	0.6
〃	193	SR8	曲物 (側板)	—	(3.3)	0.5
〃	194	SR8	不明木製品	(35.8)	(13.2)	2.2
44	208	Ⅲ層	不明木製品	(7.3)	(3.2)	0.6
〃	209	Ⅲ層	鋤	(33.5)	(7.2)	2.0
〃	210	落ち込み	不明木製品	(45.8)	6.5	2.0
〃	211	落ち込み	不明木製品	12.0	23.5	1.7

付編 自然科学的考察

高知県内の遺跡出土初期須恵器の産地問題

奈良教育大学 三辻利一

1. はじめに

蛍光X線分析法による胎土分析によって、全国各地の古墳から大阪陶邑産と推定される初期須恵器が大量に検出されている。今や、陶邑産の初期須恵器が古墳での祭祀道具として全国各地の古墳へ供給されたことは常識となりつつある。このことはかつて、田辺昭三氏が唱えた「陶邑一元供給説」と一致する。その後、限られた地域で地方窯が見つけれられたが、その製品は遠方へは動かず、地方窯周辺の古墳にしか検出されていない。その地方窯周辺の古墳にすら、陶邑産と推定される初期須恵器が検出されているのである。

四国ではこれまで、香川県と愛媛県内の古墳から陶邑産と推定される初期須恵器が出土している。香川県内には宮山窯、三谷三郎池窯という地方窯が見つけれられているにもかかわらずである。

最近、高知県下のいくつかの古墳時代の祭祀跡から初期須恵器が出土している。しかも、肉眼による器形、胎土観察から、県外からの搬入品と考えられている。本報告ではこれらの須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2. 分析法とデータ解析法

須恵器資料は表面を研磨して付着汚物（自然灰釉を含む）を除去したのち、胎土をタングステンカーバイド製乳鉢で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、約13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。錠剤試料は試料ホルダーに詰められ、48試料を1セットにして、6列8行の自動試料交換機に並べた。波長分散型の蛍光X線分析装置（理学電機製3270型機）でNa、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素の蛍光X線強度を測定した。標準試料としては岩石標準試料JG-1を使用した。通常、標準試料の蛍光X線強度との比較から、含有量（%、ppm濃度）が求められるのであるが、筆者は一日に測定される1セット、48個の試料中に1個、岩石標準試料JG-1を入れておき、JG-1に標準試料としての役割とともに、分析装置の安定性をチェックするためのモニターとしての役割をももたせることにした。1年間を通しての蛍光X線強度のばらつきはどの元素についても変動係数にして、1%程度であった。これに対して、1基の窯から出土する須恵器資料を50～100点程度分析すると、10～20%程度はばらつく。したがって、分析装置の安定性はきわめて良好であるといえる。

筆者は毎日、1セット、48個の試料の蛍光X線強度を測定しているので、その中に挿入したJG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で分析値を表示することになっている。通常、分析装置が打ち出してくるのはバックグラウンドを差し引いたネットの蛍光X線強度であり、Kcps（すなわち、3カウント/秒）であるが、JG-1による標準化値は相対的な蛍光X線強度であり、単位はない。一種の普遍化された蛍光X線強度であり、電流・電圧の測定条件が変わっても、また、エネルギー分散型、波長分散型のように機種が変わっても大きな変動はしない。再現性の良い値をもつ。古代土器の産地

推定法の開発研究はロングランの研究であり、それだけに、再現性の良い分析値を得るようにしておくことは必要である。勿論、その日に測定した分を検量線を使って%やppm濃度を求めることは可能であるが、いちいち、%やppm濃度に変換しなくても、JG-1による標準化値で十分データ解析はできる。この研究では大量の分析試料を取り扱うので、分析方法をできるだけ簡素化しておくことが必要である。このような考えから、筆者は分析値をJG1による標準化値で表示することになっている。日

本地質調査所から配布されている20種類近い岩石標準試料を使って、JG-1による標準化値と%、ppm濃度の間に直線性があることが確かめられているので、JG-1による標準化値から%やppm濃度に変換することは容易である。

K、Ca、Rb、Srの4元素が地域差を有効に示す因子であることが全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから立証されている。このうち、K、Caは主成分元素であり、母岩の長石類中に主として存在したと推定されている。一方、Rb、Srは微量元素ではあるが、土器中には通常、数10ppm程度含有されている。微量元素がどの鉱物中に存在したかを直接実証することは困難であるが、主成分元素との正の相関性を調べることによって間接

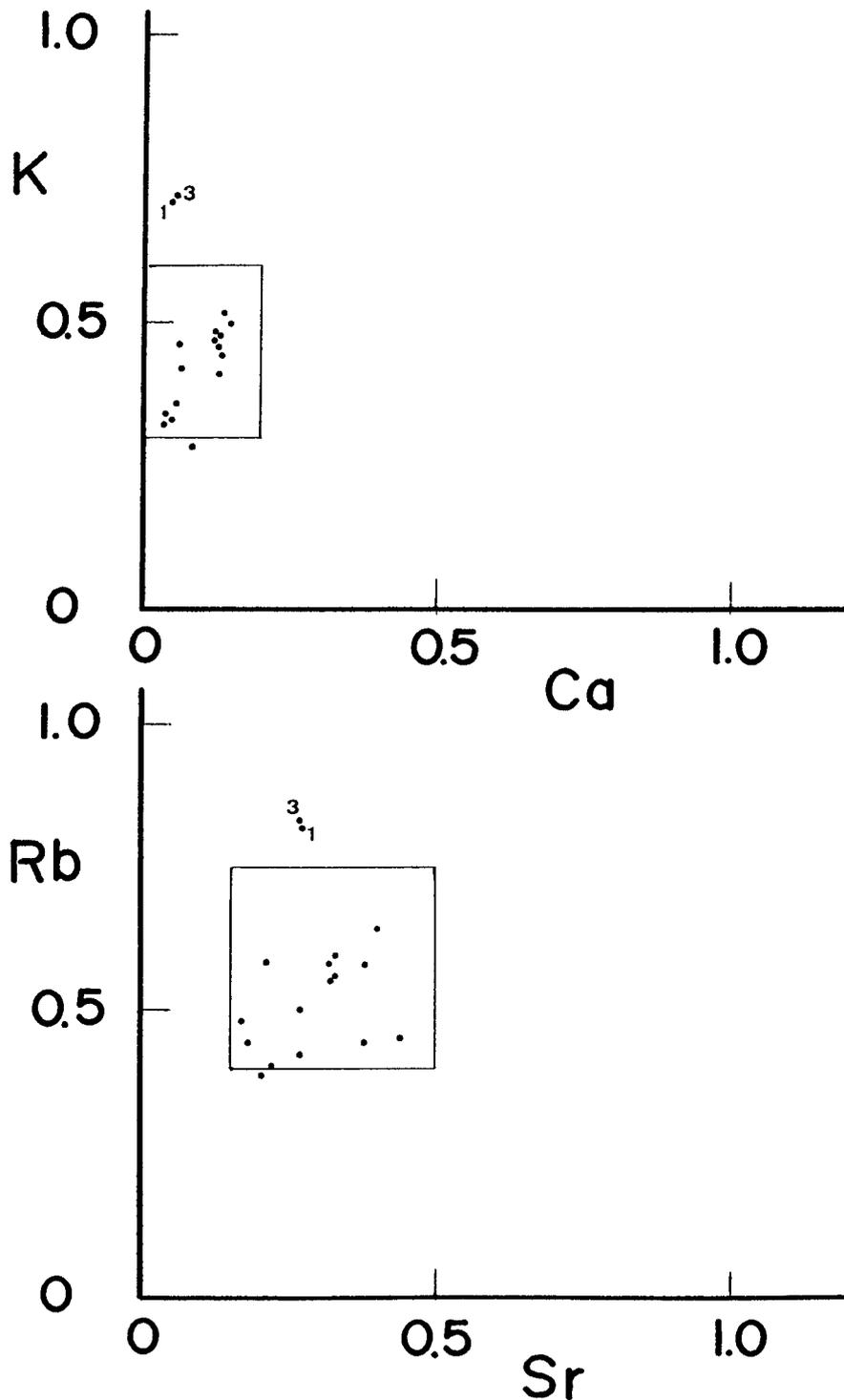


図1 高知県内の遺跡出土初期須恵器の両分布図

的に証明することはできる。RbはKと、SrはCaと良好な正の相関性をもつことが実証されており、Rb、Srもまた、母岩中では長石類中にそれぞれ、K、Caと共存したと推定される。

以上のような背景を考慮に入れて、測定された分析データから、KCa分布図とRbSr分布図を作成し、目に見える形で試料の特徴を把握することにした。通常、窯跡出土須恵器は両分布図上で集中して分布する。したがって、この窯跡出土須恵器が分布する領域内に、遺跡出土須恵器が分布すれば、その窯跡が産地ということになる。このように、作図法による産地推定では目に見える形で産地に対応させるので、理解し易い点で優れる。しかし、定性的にしか対応させることはできないので、

これに代わる手法の導入が必要となる。その手法が2群間判別分析法という統計学的手法である。簡単にいえば、可能性のある2つの産地を選択し、そのどちらに帰属するかを統計学の理論式を使って決めるのである。この手法をとるにしても、まず、作図法で目に見える形で試料の特性を把握しておくことは重要である。本報告ではこの両方の手法を使ってデータ解析を行った。

3. 分析結果

分析値は表1にまとめられている。すべての分析値はJG-1による標準化値である。

はじめに、表1の分析データに基づいて作成した両分布図を図1に示す。この分布図には大阪陶邑群の多数の試料の分析データに基づいて陶邑領域を描いてある。

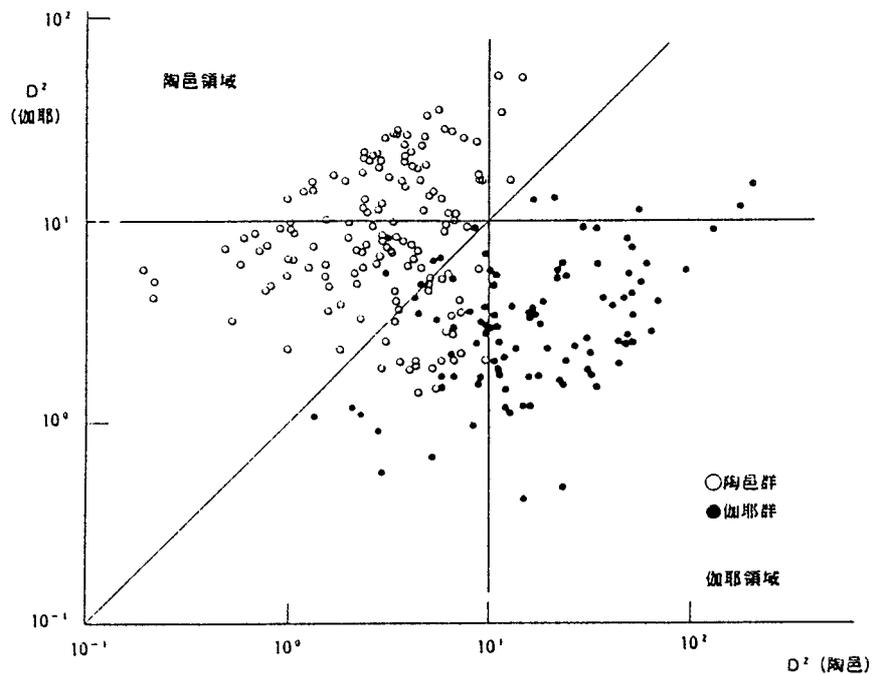


図2 陶邑群と加耶群の相互識別

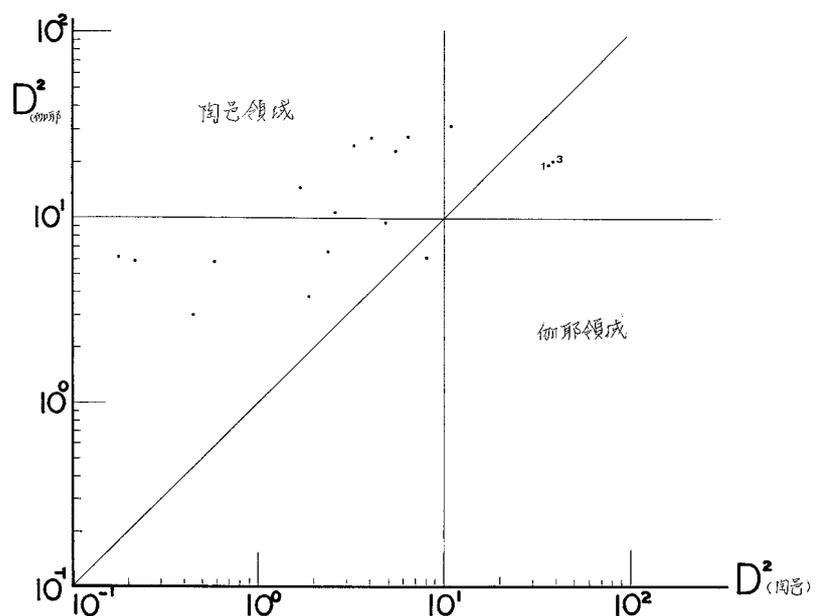


図3 高知県内の遺跡出土初期須恵器の産地推定

もし、高知県内の遺跡出土初期須恵器が陶邑群の製品であれば、両分布図で陶邑領域に分布するはずである。図1をみると、No1、3の2点を除いて他の試料はすべて、陶邑領域に対応することが分かる。No1、3は陶邑の製品ではあり得ない。勿論、高知県内には初期須恵器の窯は見つかっていないので、高知県内産の須恵器でもない。

初期須恵器の中には土器形式が朝鮮半島産の陶質土器に類似したものがあり、それらを称して、考古学者は韓式土器という。今回分析した須恵器の中に韓式土器が含まれているかどうかを調べるため、陶邑群と伽耶群の間で2群間判別分析を試みた。伽耶群の試料としては大伽耶、高霊の内谷洞窯群、尚寧の余草里窯群の陶質土器が含まれている。2群間判別の結果は図2に示されている。

D2（伽耶）、D2（陶邑）はそれぞれ、伽耶群、陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値である。中央に引かれた斜線は両群の理想境界線である。この他に、 $D2（伽耶）、D2（陶邑）=10$ のところに境界線を引いてあるが、ホテリングのT2検定で合格する境界線を示している。ホテリングのT2式は一種のF分布関数である。5%の危険率をかけたF検定で合格する境界線が $D2（伽耶）=10$ であり、 $D2（陶邑）=10$ である。したがって、図2をみると、 $D2（伽耶）\leq 10$ の領域に伽耶群の試料のほとんどが分布し、また、 $D2（陶邑）\leq 10$ の領域に陶邑群の試料のほとんどが分布することがわかる。本来、両群の化学特性が全く異なると、両群の試料は互いに、 $D2（相手群）> 10$ の領域に分布し、完全に分離する。しかし、両群の化学特性が類似してくると、 $D2（相手群）< 10$ の重複領域に混在して分布するようになる。図2をみると、伽耶群と陶邑群の試料の一部は重複領域に分布し、両者の分離が不完全であることがわかる。しかし、大部分の試料は分離して分布しており、両群の相互識別は十分可能であることがわかる。この分布図上に高知県内の遺跡出土初期須恵器を分布させたのが図3である。No1、3の2点を除いて他の試料はすべて、陶邑群の試料の分布領域に分布しており、陶邑産の製品であることを示している。陶質土器ではあり得ない。したがって、もし、これらの中に形式が陶質土器に似ている物があっても、それは朝鮮半島から渡来した工人が陶邑で製作した須恵器であることに相違ない。大庭寺1、2号窯の須恵器の分析データから、朝鮮半島から工人が渡来していることが明らかになったからである。No1、3は図3で不明領域に分布しており、陶邑の製品でも、伽耶の製品でもないことを示しており、そのため、産地不明としておいた。ただ、朝鮮半島の遺跡出土陶質土器の中に、このように、K、Rb量の多いものが時折、検出されており、未発見の窯が朝鮮半島側にある可能性は否定できない。したがって、No1、3は朝鮮半島産の陶質土器である可能性は残されている。表1をみると、No1、3は全因子で類似しており、同一産地の製品であることはほぼ、間違いはない。

D2（伽耶）、D2（陶邑）の計算値は表1に示されている。各母集団への帰属条件は $D2（X）\leq 10$ である。No1、3を除く他の試料はすべて、陶邑群に対してこの条件を満足しており、陶邑産であることを示している。No14については $D2（陶邑）=11$ であるが、他に対応する母集団もないので、一応、ここでは陶邑産としておいた。また、香川県の宮山窯、三谷三郎池窯からのD2値も計算したが、これらの窯への帰属条件を満足するものは1点もなかった。したがって、香川県産の初期須恵器でもないことは明白である。こうして、高知県内の初期須恵器も陶邑からの搬入品であることが証明された訳である。「陶邑産の初期須恵器が全国各地の古墳へ供給されている」という仮説が高知県でもまた、成立することがわかった訳である。

表1 分析データ

		K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D ₂ (陶邑)	D ² (伽耶)	D ² (三郎池)	D ² (宮山)	推定産地
介良遺跡	No1	0.711	0.046	2.38	0.823	0.266	0.194	36.6	19.7	169	1100	不明
(高知市)	2	0.409	0.130	2.50	0.445	0.384	0.251	4.9	9.5	56.5	71.7	陶邑
	3	0.724	0.053	2.35	0.831	0.269	0.191	39.1	20.3	170	1170	不明
	4	0.442	0.130	2.33	0.446	0.437	0.292	8.0	6.2	120	84.6	
	5	0.343	0.035	2.36	0.400	0.217	0.128	5.6	23.4	62.4	157	陶邑
	6	0.419	0.063	2.07	0.576	0.209	0.151	1.7	14.7	10.4	259	陶邑
	7	0.318	0.037	2.43	0.386	0.206	0.114	6.5	27.5	46.2	132	陶邑
小籠遺跡	No8	0.516	0.134	2.08	0.589	0.333	0.266	1.9	3.8	27.7	281	陶邑
(南国市)	9	0.495	0.145	2.03	0.575	0.381	0.293	0.45	3.0	26.6	169	陶邑
	10	0.460	0.125	2.12	0.564	0.332	0.279	0.18	6.1	14.7	164	陶邑
	11	0.475	0.127	2.06	0.555	0.326	0.283	0.59	5.8	21.0	206	陶邑
	12	0.469	0.121	2.11	0.583	0.321	0.257	0.22	5.9	13.5	192	陶邑
神母谷遺跡	No13	0.484	0.117	2.14	0.642	0.404	0.236	2.4	6.6	28.7	123	陶邑
(吾川郡伊野町)	14	0.283	0.079	2.09	0.423	0.268	0.103	11.1	30.6	12.8	29.7	陶邑
具同中山遺跡	No15	0.359	0.056	2.41	0.476	0.167	0.110	3.3	24.7	7.6	222	陶邑
(中村市)	16	0.458	0.060	2.74	0.501	0.267	0.141	2.6	10.6	81.0	292	陶邑
	17	0.329	0.042	1.91	0.441	0.178	0.129	4.1	27.3	14.3	162	陶邑

写真図版



第 I 調査区 北壁



第 I 調査区 SR1 完掘状況

PL.2



第 I 調査区 SR 2 遺物出土状況



第 I 調査区 第 2 遺構面 完掘状況

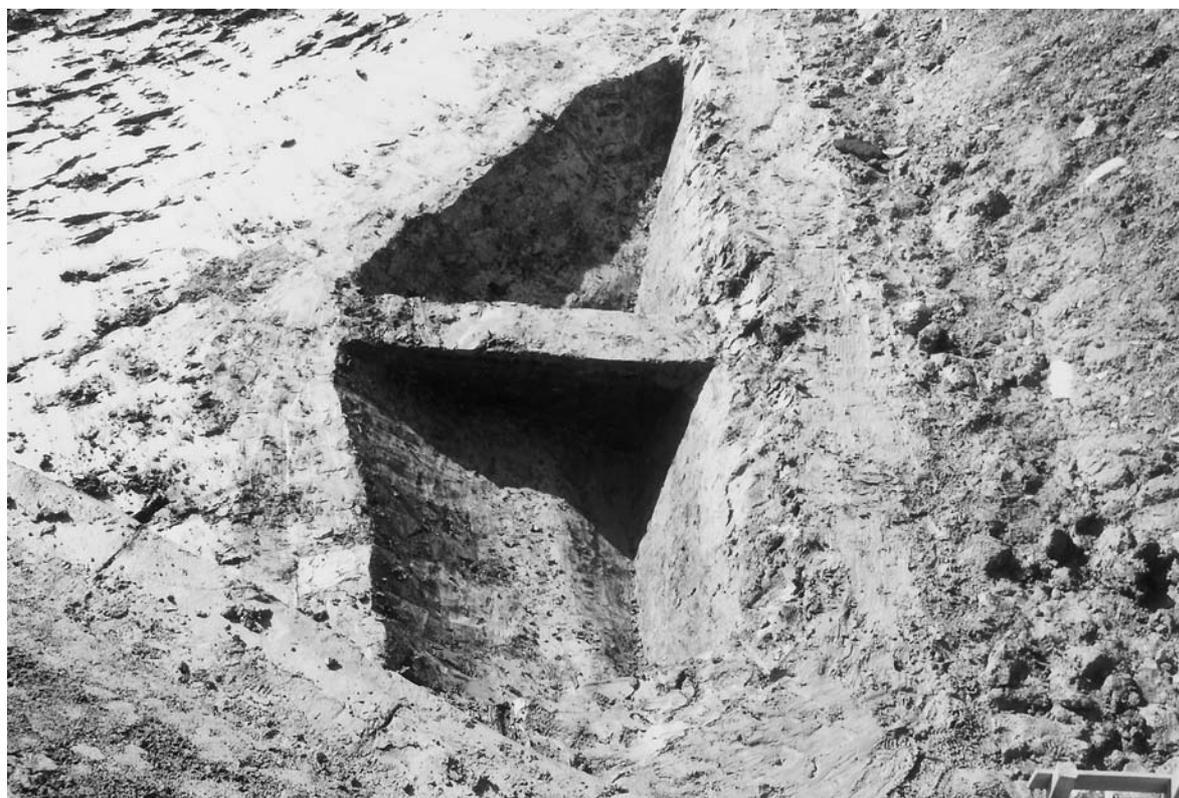


第 I 調査区 集石遺構 1 検出状況



第 I 調査区 SR4 完掘状況

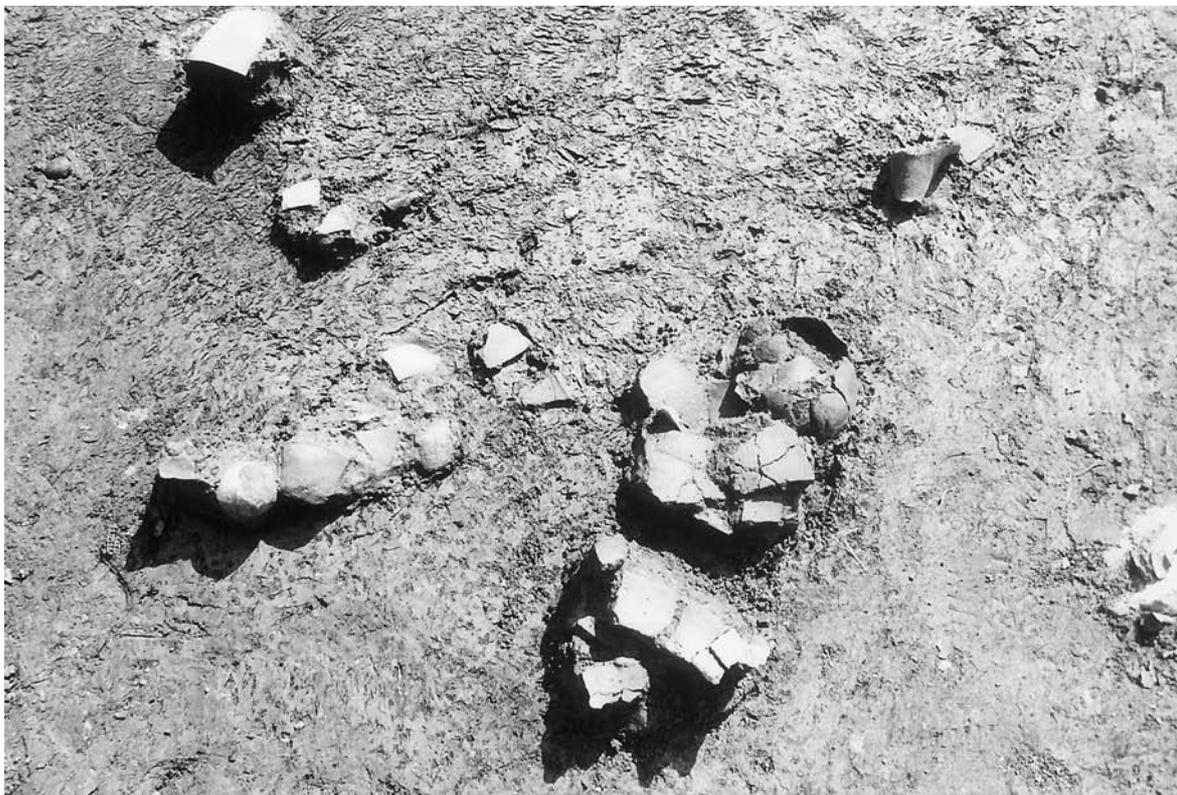
PL.4



第Ⅰ調査区 SR5 完掘状況



第Ⅱ調査区 遺物出土状況

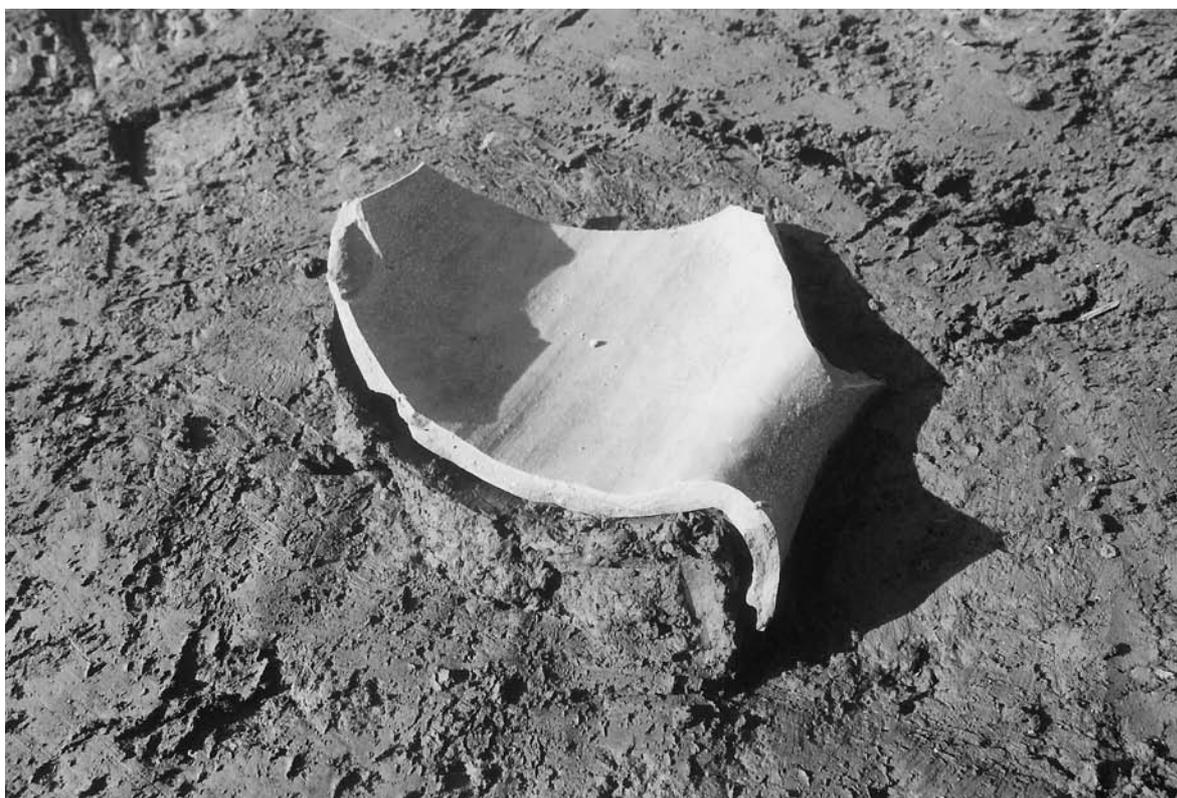


第Ⅱ調査区 遺物出土状況



第Ⅱ調査区 遺物出土状況

PL.6



第Ⅱ調査区 遺物出土状況



第Ⅱ調査区 遺物出土状況



第Ⅱ調査区 遺物出土状況



第Ⅱ調査区 遺物出土状況



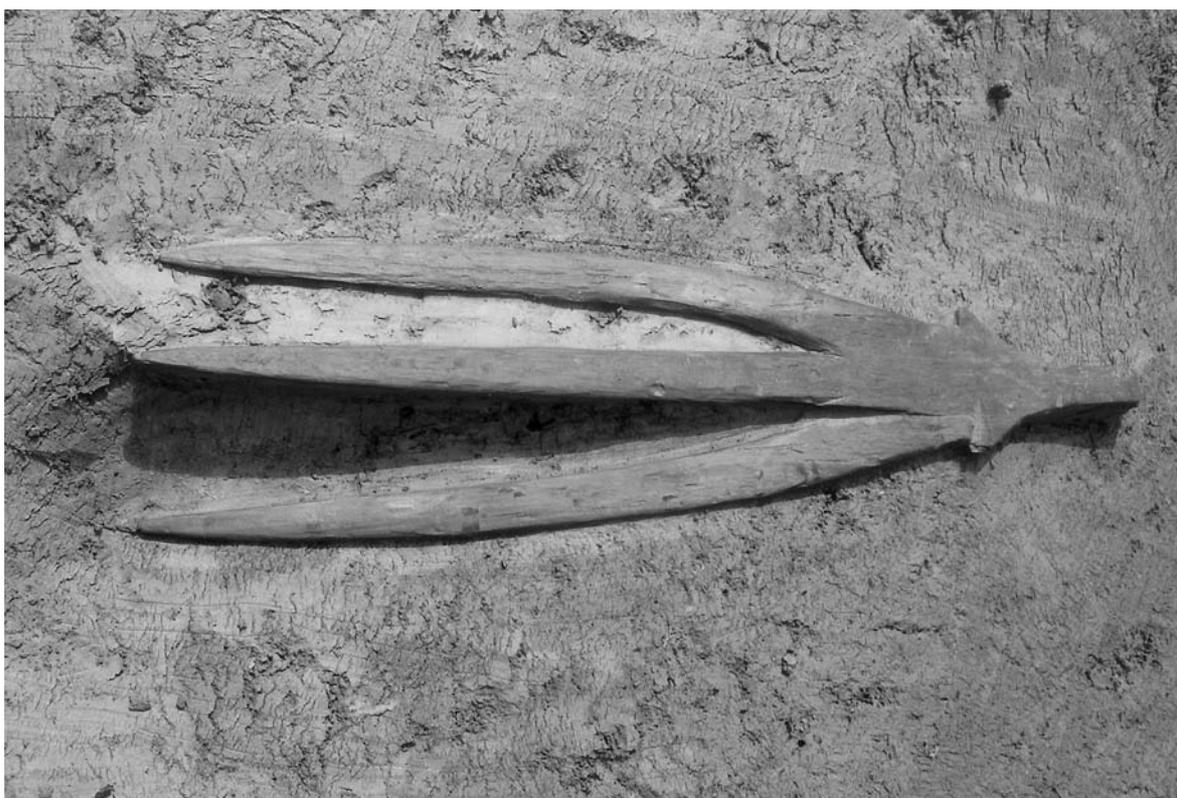
第Ⅲ調査区 調査前全景



第Ⅲ調査区 遺物出土状況



第Ⅲ調査区 遺物出土状況



第Ⅲ調査区 遺物出土状況

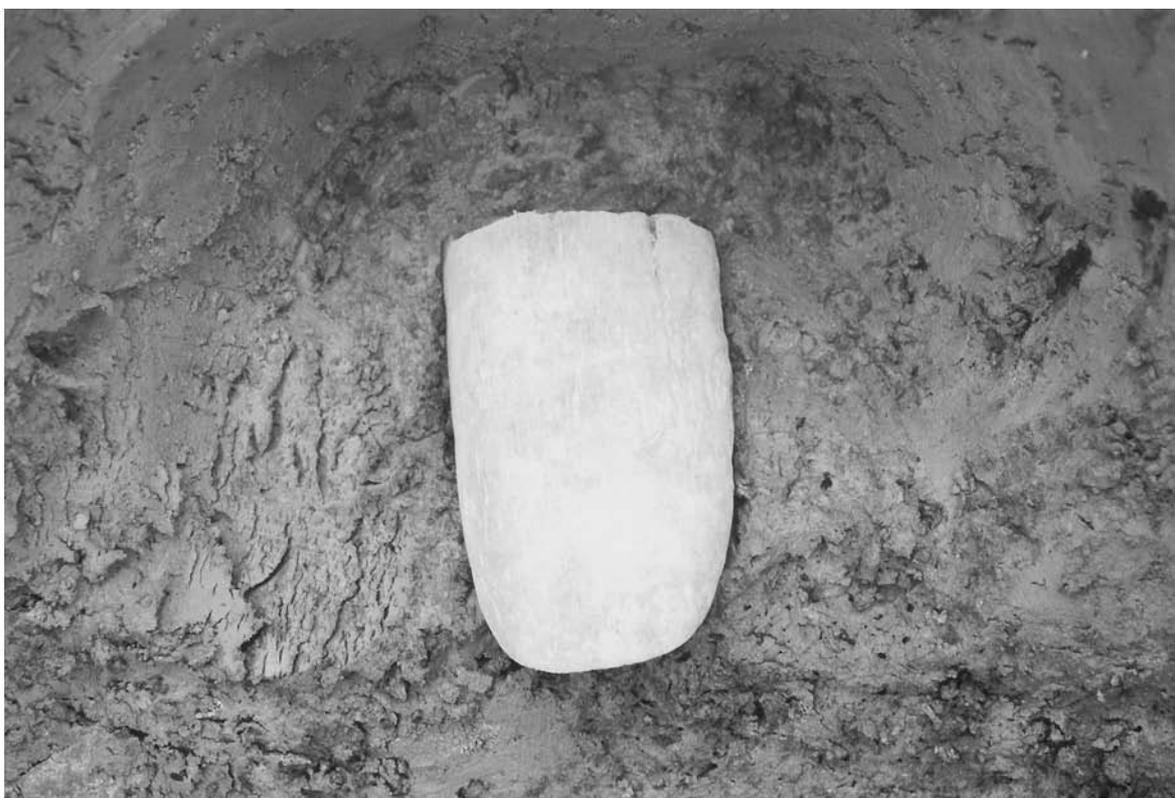
PL.10



第Ⅲ調査区 遺物出土状況



第Ⅲ調査区 遺物出土状況



第Ⅲ調査区 遺物出土状況



第Ⅲ調査区 遺物出土状況

PL.12



第IV調査区 中央南北セクション



第IV調査区 SR7 遺物出土状況



第Ⅳ調査区 SR8 遺物出土状況



第Ⅳ調査区 SR8 遺物出土状況

PL.14



第IV調査区 西半部 SR7 完掘状況



第IV調査区 SK1 断面



第Ⅳ調査区 SK1 完掘状況



第Ⅳ調査区 東半部 SR7 完掘状況

PL.16



第IV調査区 落ち込み1 遺物出土状況



第IV調査区 落ち込み1 遺物出土状況



SR 1 出土遺物





SR1 · 包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



118 · 120



126



121



127



122



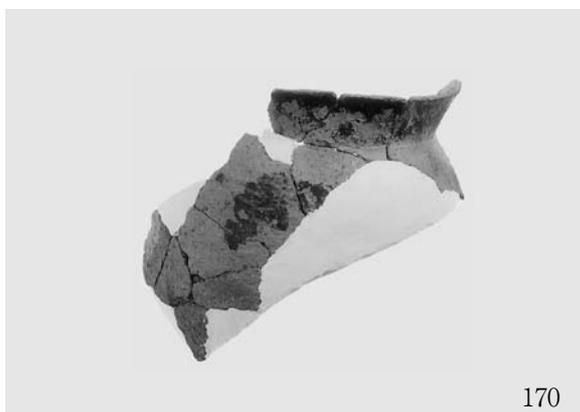
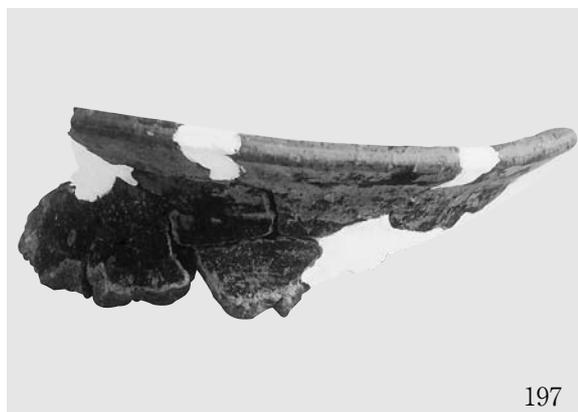
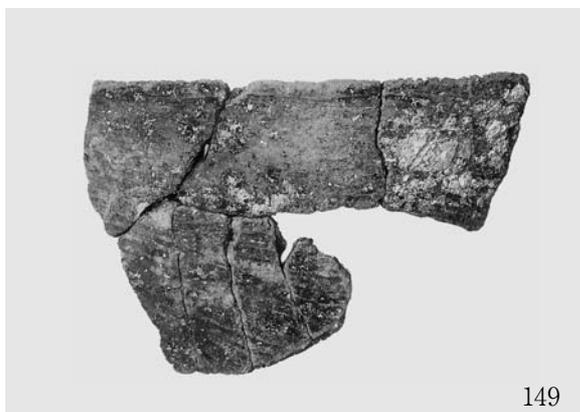
128



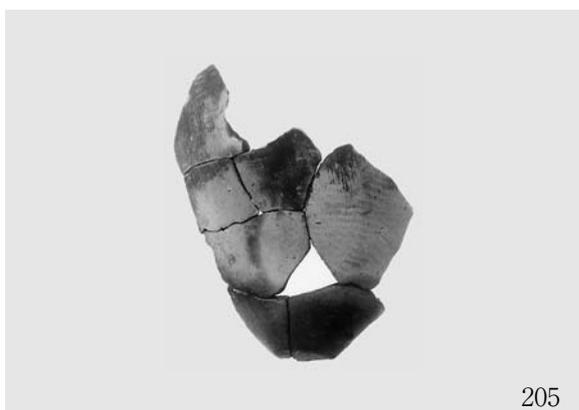
124

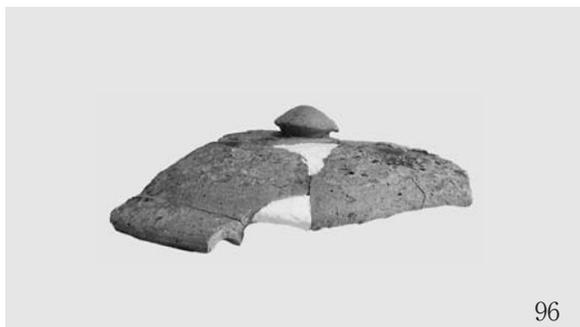


129



包含層・落ち込み 1 出土遺物





包含層出土遺物





26 (内)



26 (外)



73



74



147 (内)



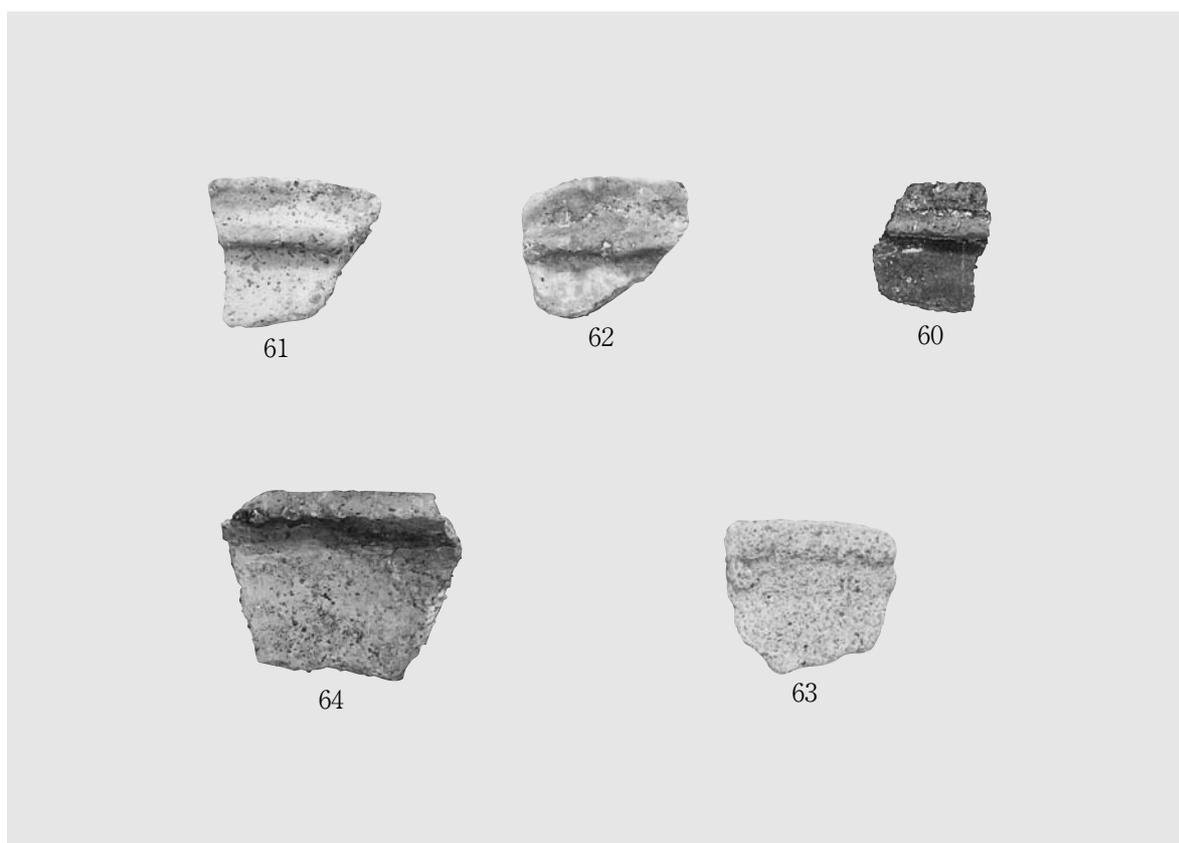
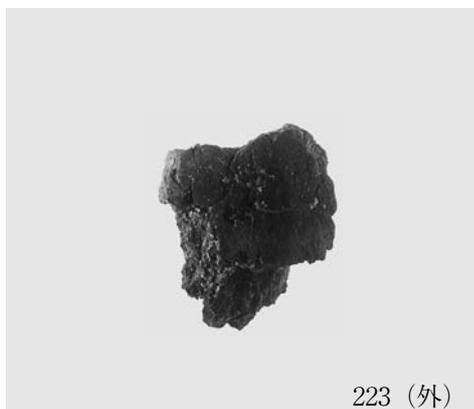
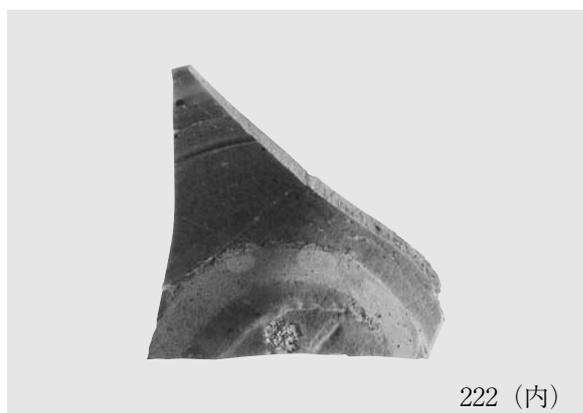
147 (外)



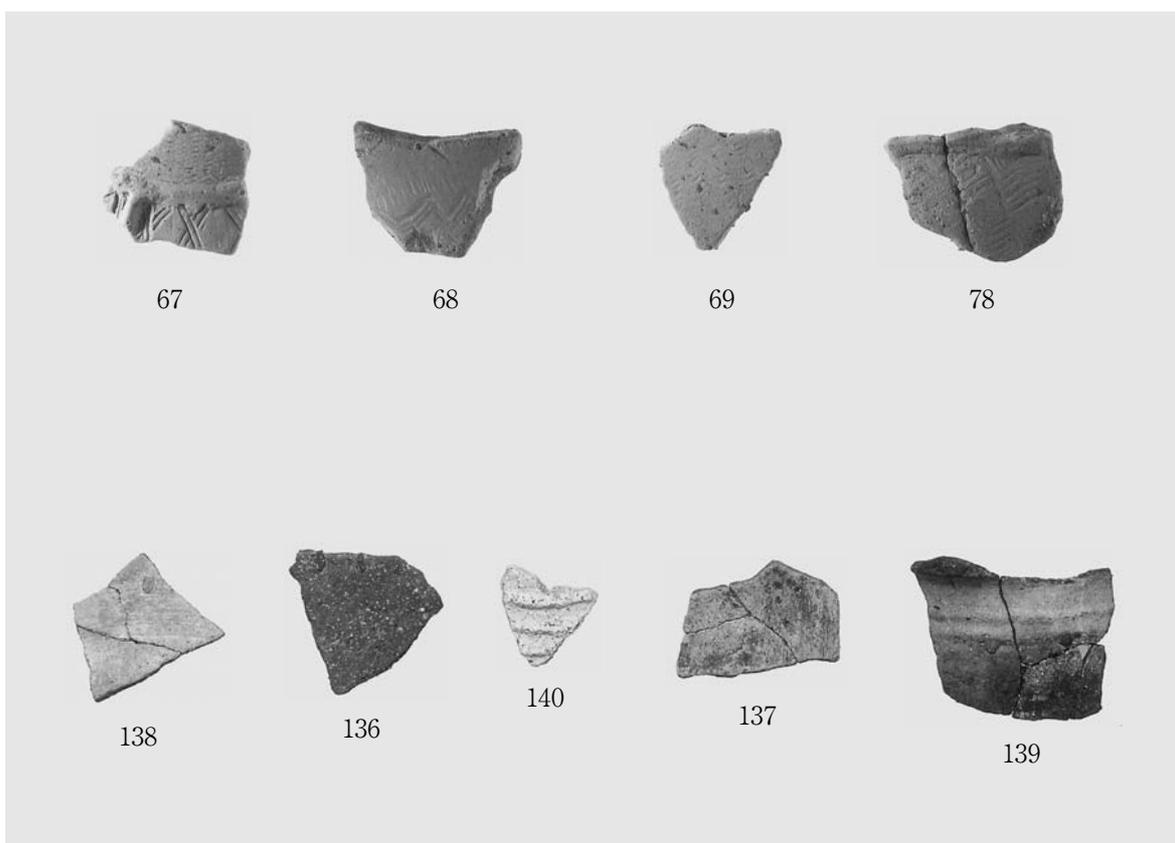
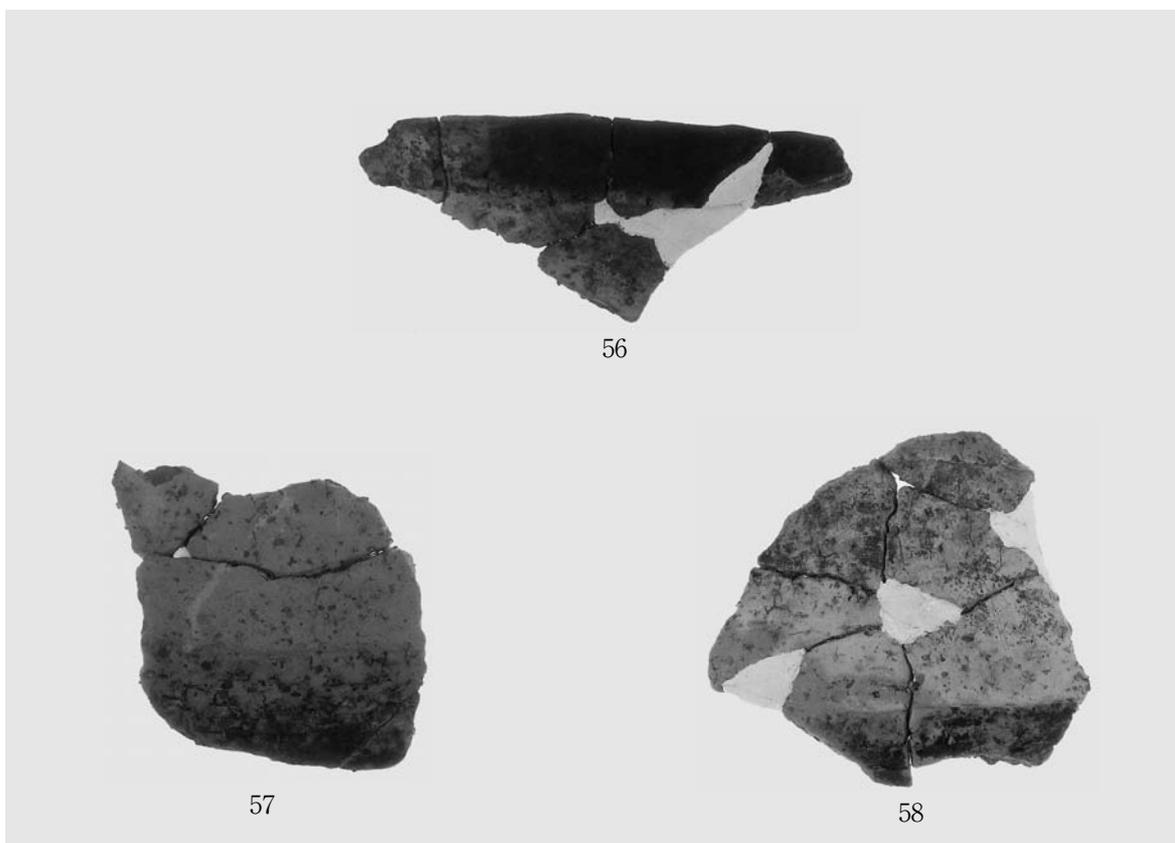
148 (内)



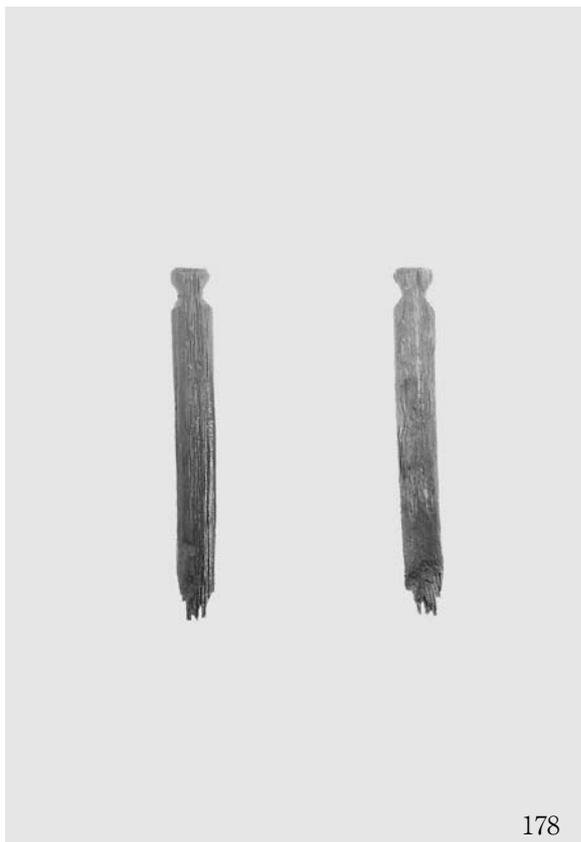
148 (外)



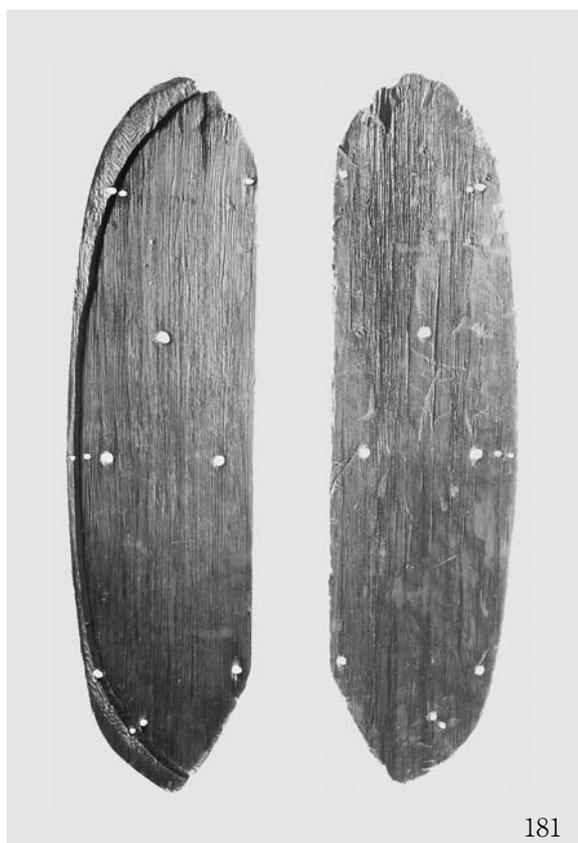
包含層出土遺物



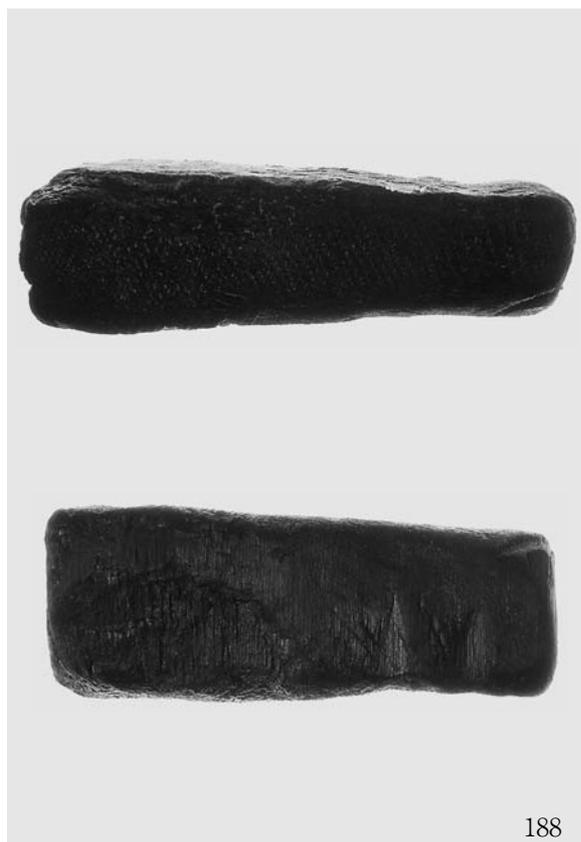
包含層出土遺物



包含層出土遺物



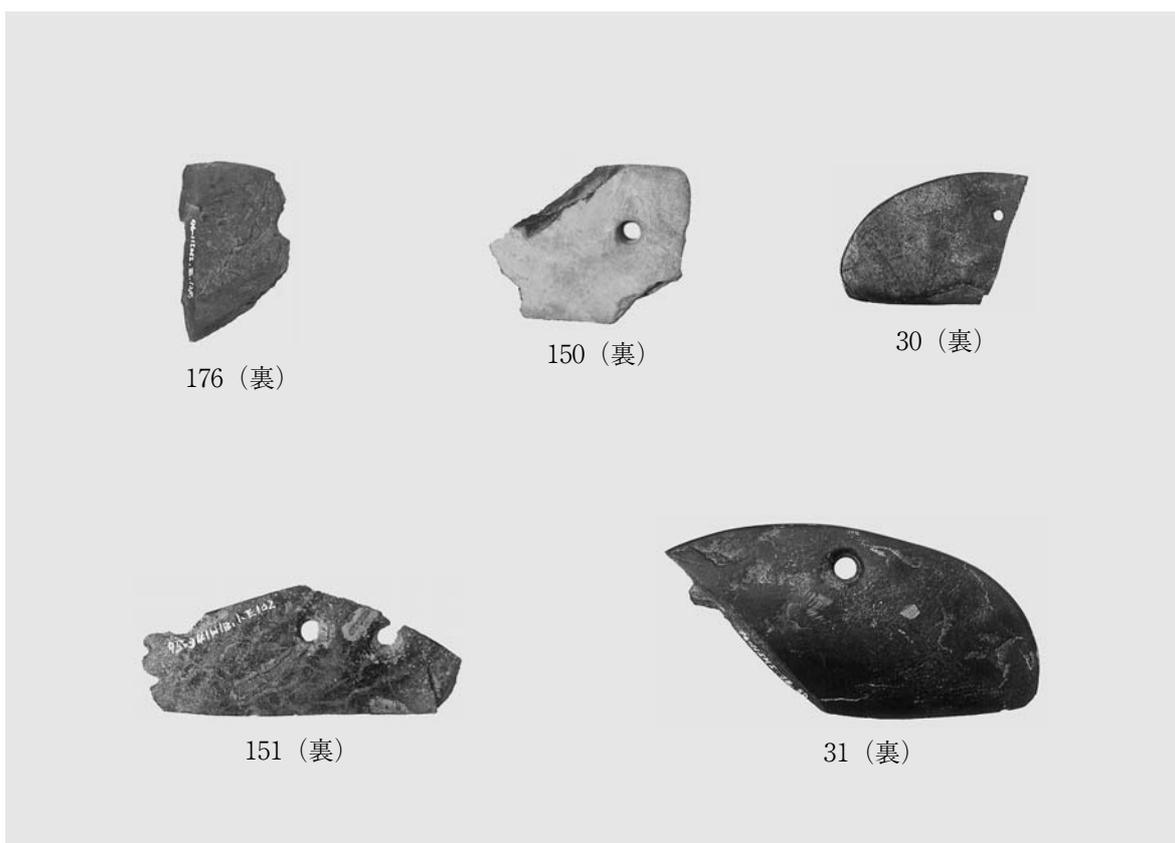
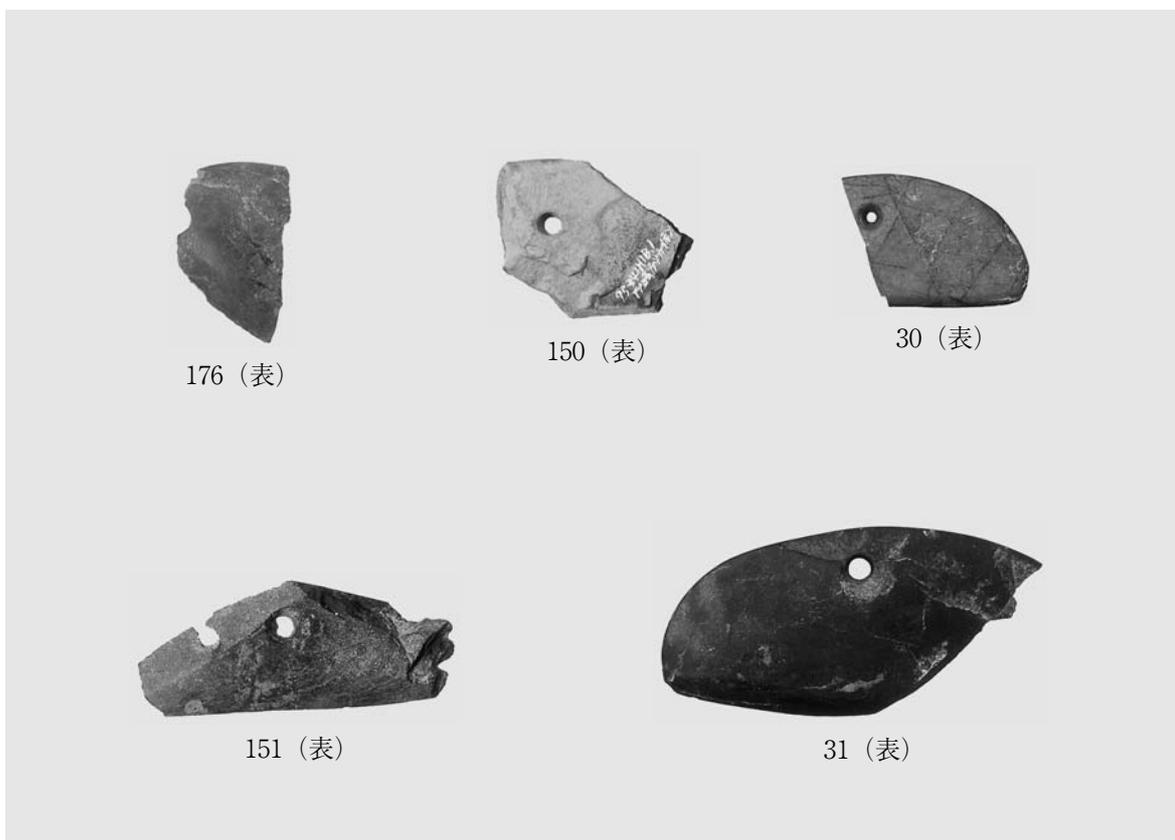
包含層出土遺物



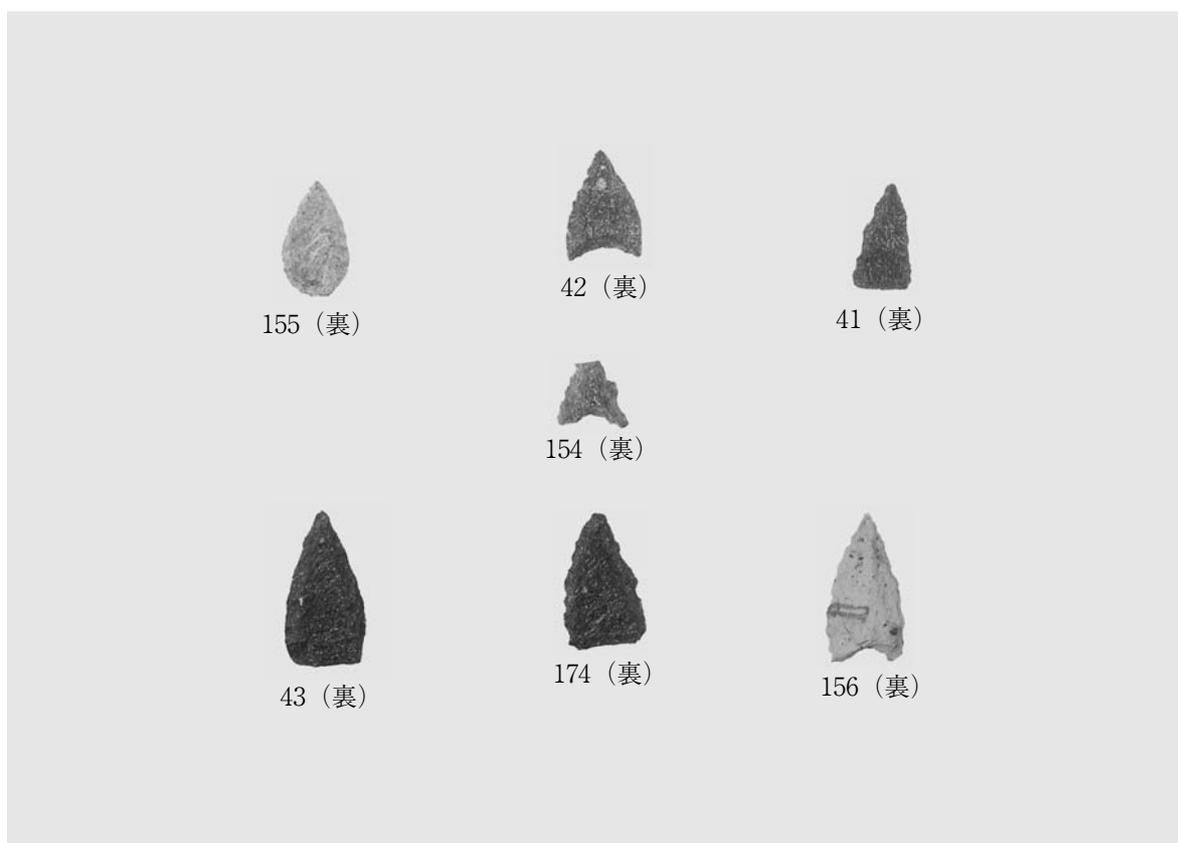
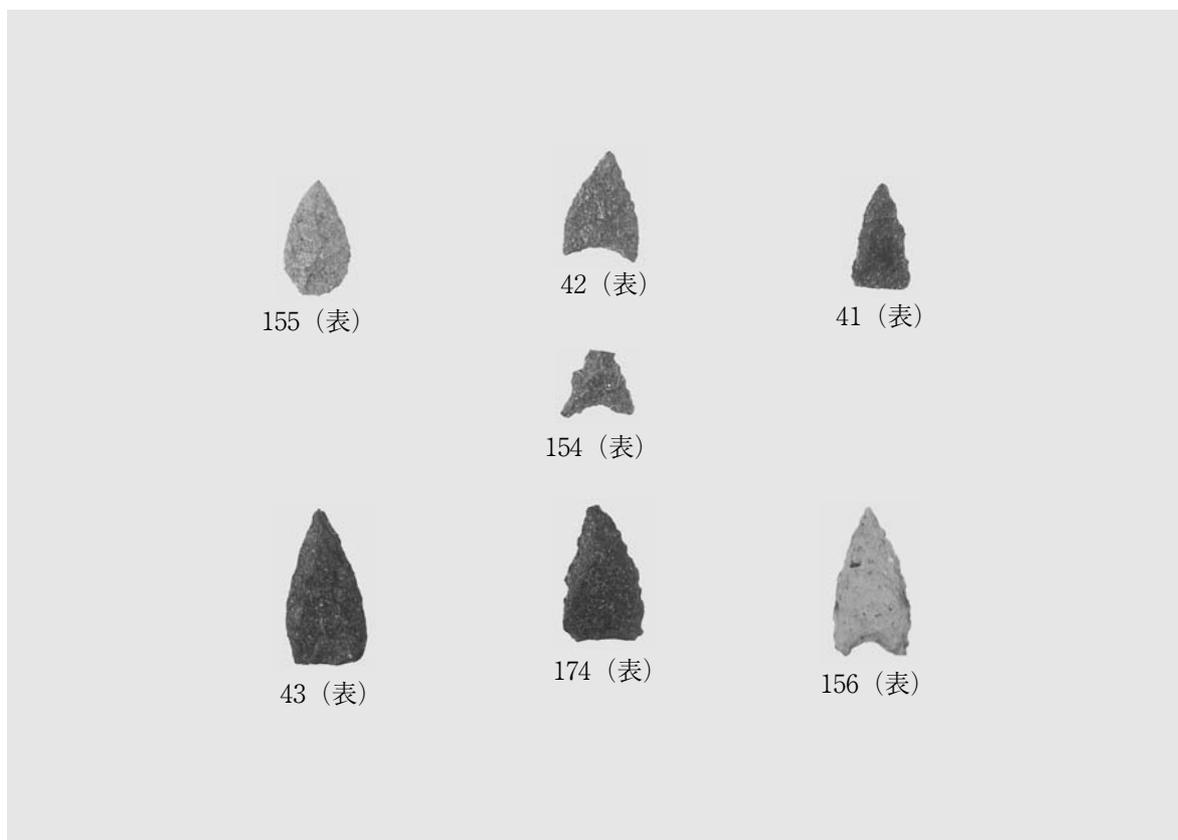
包含層・SR7 出土遺物

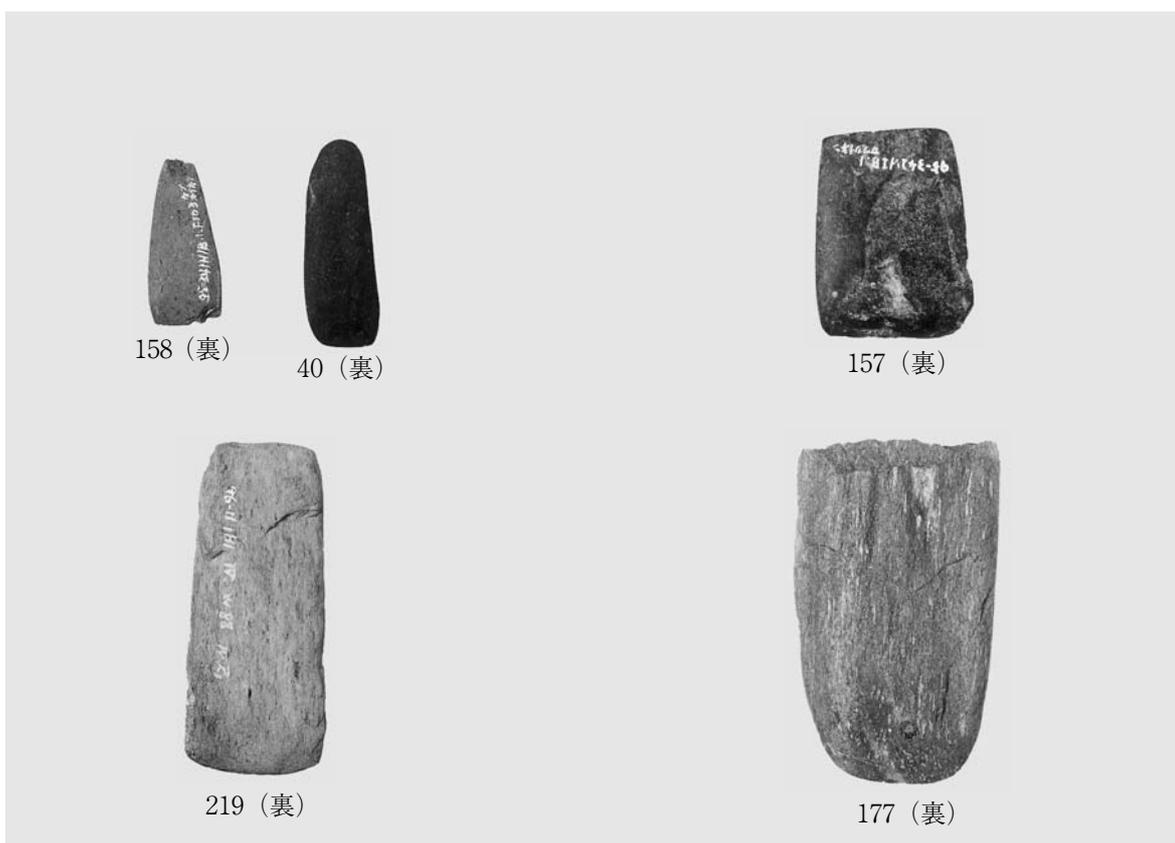
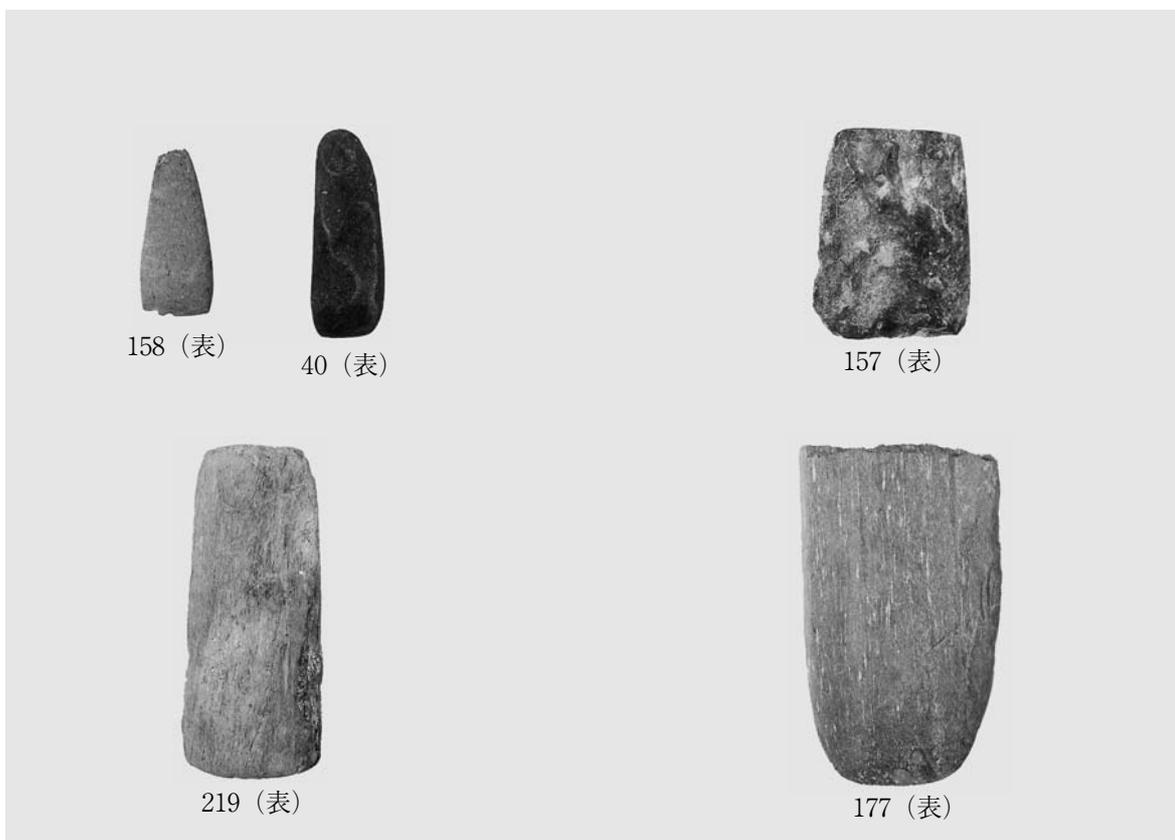




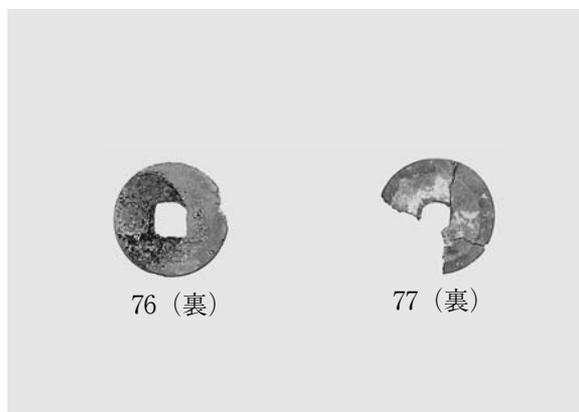
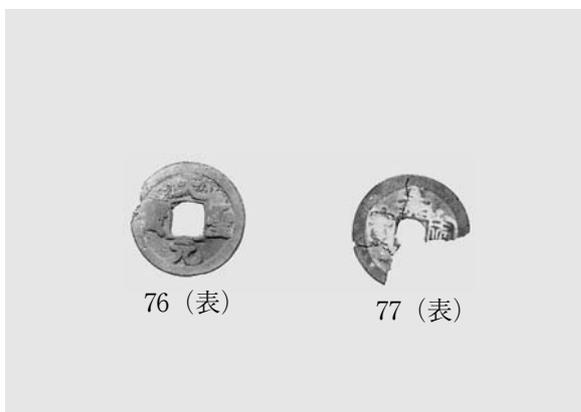


SR1・包含層出土置物





SR2 · 包含層出土遺物



報告書抄録

ふりがな		はたいげだにいせき						
書名		八田神母谷遺跡						
副書名		四国横断自動車道（南国～伊野間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第32集						
編著者名		久家隆芳						
編集機関		高知県文化財団 埋蔵文化財センター						
所在地		〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671						
発行年月日		西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたいげだにいせき 八田神母谷遺跡	高知県知川町の野田伊母高吾伊八神	39381	144	33° 30′	133° 26′	1995年 12月15日 ～ 1997年 2月28日	3,023m ²	四国横断 自動車道 (南国～伊野間) 建設に伴う
								事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
		縄文時代～世 近	土ピ溝自 ツ状然 杭ト跡路等	伊吹町式土器 弥生土器 古式土師器 須土師質土 石石包				

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集

は た い げ だに い せき
八 田 神 母 谷 遺 跡

— 四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1998年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社